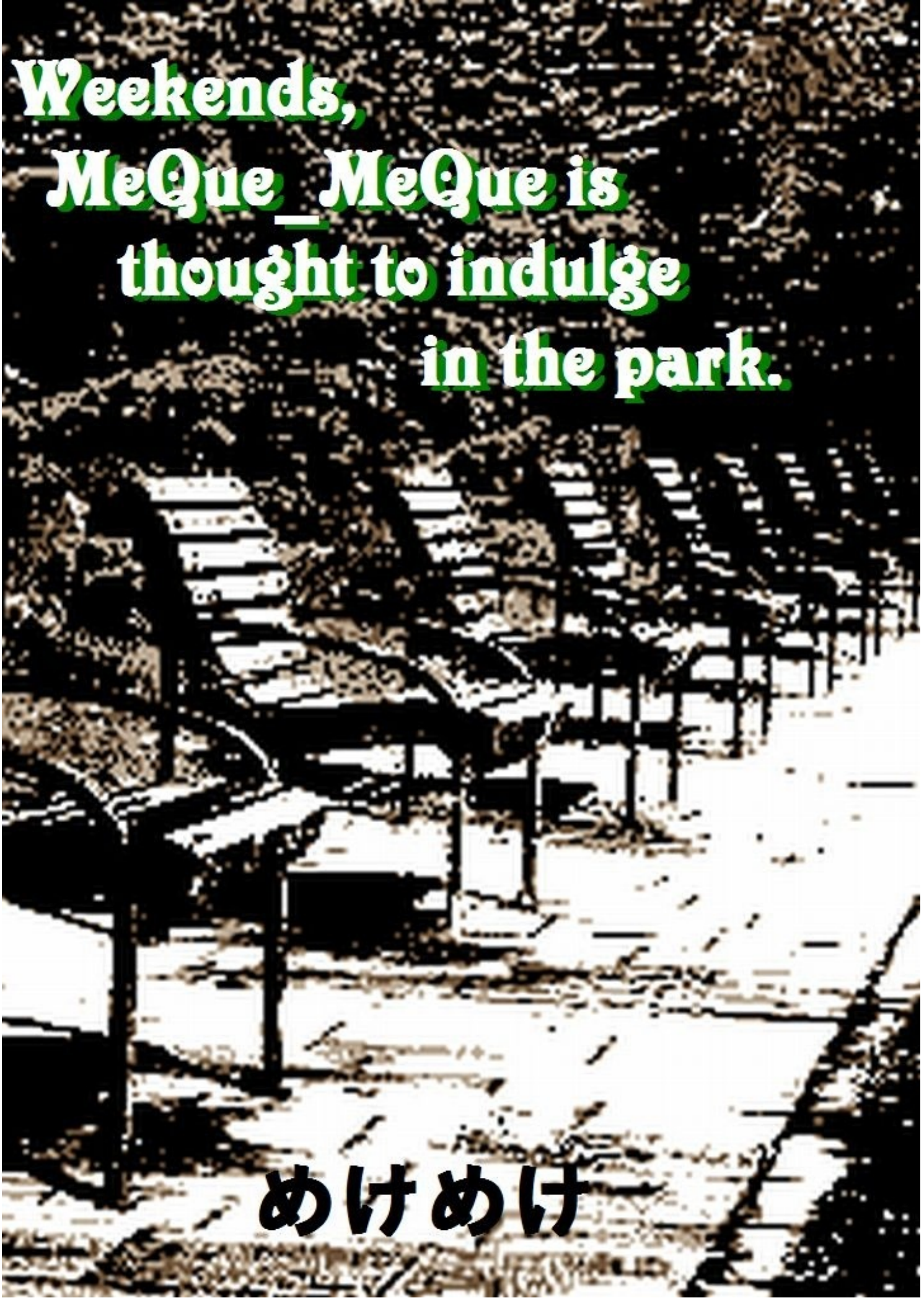
Weekends,
MeQue_MeQue is
thought to indulge
in the park.
めけめけ

# カウントダウン

　１９９９年１２月３１日、ボクらは永遠に続くかのように思われていた１９００年代に別れを告げようとしていた。街はいつもの暮れよりも賑わい、２０００年という未知の年代を迎えようとしている。

　ボクらは集まった。

「ねぇ、２０００年ってどんな感じかな？」
「どんな感じって、そりゃ１９９９年の次の年で、２００１年の前の年さ」
「もう、そういうことじゃなくてさ」
「まさか世界が滅ぶとか、そんな話信じているわけ？　Ｙ２Ｋ問題だって、結局何も起きないじゃん」
「もう、ホント、夢がないというかロマンがないっていうか」
「愛だけでは生きていけないが、愛なしでは生きたくない」
「なにそれ？」
「え？　知らない？　座右の銘ってやつ」
「ざ・ゆ・う・のメイ？」
「あーもう、これだから学のない奴は困るねぇ」
「あー、またそういうことを言う」
「ほらほら、ケンカしないケンカしない、もう、いつもそうなんだから」
「たまにみんなで集まったんだから楽しくやろうよ」
「まぁ、そうなんだけどね。ホラ、ボクら人間と違って、こういうときに何をすればいいかわからないから」
「だからって、喧嘩することないでしょう」
「えー、だってホラ、人間って喧嘩ばっかりしてたじゃない」
「うーん、そー言われてみればそうなんだけど」
「そうでしょう？」
「でも、人間の悪いマネをすることもないでしょう」
「そりゃあ、そうさ。人間のマネをするってことは滅びるってことだもの」
「まぁ、滅びるといっても、人間は出て行っちゃっただけで、きっとどこかの星で、同じことを繰り返しているのだと思うけど？」
「それはどうかな？　人間だって少しは進化するだろう？　ちょっとはマシになったんじゃない？」

「まぁ、そうだとしても、ボクらには関係のない話だね」
「そういうこと、ボクらには関係ない」
「そうね、ボクらはボクらだもんね」
「そうとも、ボクらはボクらさ」

人類が地球を離れて２０００年の月日が流れようとしている。
地球歴２０００年。ボクらはカウントダウンを始めた。

「いよいよカウントダウンだね」
「そうだね。カウントダウンだね」
「さぁ、みんな始めるよ」
「ああ、始めよう」
「じゃぁ一緒に数えよう」
「1010,1001,1000,111,110,101,100,11,10,1,0」

『０』と『１』だけで作られた世界は、２０００年を迎えた。

おわり

# 扉の向こう

扉の向こう

　この扉の向こうには、一体、何があるのだろう

　どんなことが待ち受けているのだろう

　待ち受けている？　いったい、誰が

　扉を開けようとドアノブに、手を伸ばそうとする、ひとりの男がいる。

「……なんだ。妙な胸騒ぎがする」

　ここに来る途中ですれ違った、パトカーや救急車のことを思い浮かべる。

「なにがあったのだろうか……」

　気になって後ろを振り返る。なにもありはしない。
「何をびびっているんだ……」

　気を取り直してもう一度、ドアノブに手をかけようとした。だが男の右手は何も掴むことができなかった。

　男がつかもうとしたドアノブは、すでにそこにはなく、大きな闇がぽっかりと目の前に広がっていた。

　差し出した男の右手は、恐ろしく強く、そして信じられないほどの速さで何者かによって、食いちぎられていた。

「うわぁっ！」
　男は声を出しかけたが、それを最後まで言うことはできなかった。

ドアの前には右手くびと、頭をうしなった男の体が、できの悪いマネキンのように立っていた。

ガリガリガリッ……。

バリバリッ……。

それは男の右手くび、次に頭蓋骨が何者かによって噛み砕かれる音である。

シュシュッ！　シュシューーーー！

できの悪いマネキンは、大量の血を噴出しながら膝から崩れ落ちる。が、倒れると同時に闇の中に引きずり込まれていった。

ガチャッ。

扉は、静かな音を立てて閉じた。

ガリガリガリ……。

バリバリ……。

その音だけはしばらくドアの外に漏れていた。

この扉の向こうには、一体、何があるのかしら

どんなことが待ち受けているというの

待ち受けている？　本当に？

扉を開けようとドアノブに手を伸ばそうとするひとりの女がいる。

　扉を開けようとドアノブに手を伸ばす。

「なんでだろう。ドキドキする……」

　胸の鼓動が高まる。ここに来る途中ですれ違った、恋人たちのことを思い浮かべる。

「どうしてわたしたち、あんなふうになれないのかな……」

　思わず引き返そうかと立ち止まる。
「なにを迷っているの……、わたし。ここまで来たのに今更引き返してどうするのよ」

　意を決してドアをノックしようとしたわたしの手は、ドアに触れることができなかった。一瞬何が起きたかわからなかったけど、何かがわたしの右手を掴み、それから――。

　気がつくとわたしのからだは、彼の大きな腕の中に包まれていた。
　彼は痛いほどわたしを強く抱きしめた。

「いやっ」

　わたしは声を出しかけたが、それを最後まで言うことはできなかった。

　彼の唇がわたしの声をさえぎった。

　ドサッ！

　わたしは左手に持っていたカバンを床に落とした。糸の切れたマリオネットのように膝から崩れ落ちそうになる。が、そんなわたしを彼は力強く支えてくれた。

　カチャッ……。

　扉は、誰にも気付かれないような静かな音を立てて閉じた。

　愛し合う二人の吐息が、ドアの隙間から、漏れていた。

あなたの目の前、その扉の向こうには、一体、何があるのだろう

どんなことが、あなたを待ち受けているのだろう

待ち受けている？

いったい誰が……

おわり

# すぐそこ

すぐそこ

　高校一年の夏。高校受験で世話になった人の家に遊びに行ったときのことである。

　僕は英語が苦手で、たまたま近所のマンションに住んでいた女性翻訳家が、英語教室を開いていた。親の勧めだったのか、友達の勧めだったのかは覚えていない。ともかく、僕と同じく英語の苦手な二人の学友は、彼女に英語を教わり、何とか希望の高校に受かることができた。そのマンションはいわば彼女の作業場所で、本当の住まいは横須賀にある。かねてからの約束で、受験に成功したら夏休みを利用してみんなで泊りがけで彼女の自慢の家に遊びに行くことになっていた。

　横須賀のその家は、庭にプールがあり、とても日本とは思えないような素敵な家だった。彼女の生活スタイルは、今考えてみても、かなりあか抜けていた。昼間はプールで遊び、夜は彼女の自慢の手料理をごちそうになった。その夜、はじめて彼女の旦那さんを紹介してもらった。夫婦というよりはどちらかといえば、恋人同士のように思えた。食事が終わった後、彼女のリクエストで旦那さんが僕らに怖い話を聞かせてくれた。旦那さんの低い声でゆっくりとした語り口調は、今でも鮮明に覚えている。それは確か、こんな話だったと思う。

　ある山道で、道に迷った男の話である。

　こういうことは、初めてではない。出発前の準備は万端だった。山を甘く見たらどんな危険なことになるのか、よく心得ているつもりだ。いや、そこにこそ慣れから来る油断があったのかもしれない。

　どうやら私は道に迷ってしまったようだ。

　もうどのくらい歩いただろうか？　いや、もしかしたら、それほど歩いていないのかもしれない。また霧が深くなってきたようだ。しかし、こう暗くては、それすらもよくわからない。

　どうする。しばらく休むか……。

　予定通りのコースを歩いていれば、とっくに目的地の山小屋に着いて、温かいコーヒーを暖を

とりながら飲んでいるはずだった。いや、予定という意味では、そもそもここにくる予定ではなかった。

　疲れた体に、重くのしかかるカーキ色のザックの肩紐を強く握りしめながら、ここにきたことを後悔していた。思い起こせば数日前――。

「今度、家族でキャンプに行くから、アウトドアグッズの店を案内してくれないか」

と知人に頼まれたときから悪い予感はあったのだ。案の定、私は、衝動買いをしてしまった。

　真新しいカーキ色のザック。

　それを部屋で眺めているうちに、早速使わずには、いられなくなってしまった。私は買ったばかりのカーキ色のザックを背負い、次の週末に、一泊二日の予定で一人、山へ出かけた。

　いや、それは大きな問題じゃない。そもそもこんなことになってしまったのは……。

　目的地の山小屋までもうすぐというところで、地図には載っていない道を見つけた。案内もない。私が地図を眺めながら、その道のことを調べていると、ちょうどそこへ、ひとりの男がその道――つまり地図に載っていない道から現れた。

「あのー、すいません。この道は、どこに繋がってるんですか？　地図には載っていないようなんですが……」
「あー、この先を、二十分くらい行ったところに見晴らしのいい高台があってさ。そりゃあもう、この山じゃ一番の絶景ポイントさ。案内がないのはさ。不慣れな登山客が入ると転落事故なんかあったりするもんだから」
「へぇー、そうなんですか。何分この山は初めてなもので……。その高台は、そんなに眺めがいいんですか？」

　男は、まるで私のことを品定めするかのようないやらしい目で、私の様子をじろじろと見た。そしていやらしく笑いながら『なるほど、素人じゃなさそうだ。こいつになら大丈夫か』という顔をした。したように見えた。あのときは気づかなかったが、間違いない。あの男はそういうふうに見ていたに違いない。

「行くのなら急いだほうがいいなぁ。もうじき暗くなる。このあたりはお日様が向こうの山に隠れちまうと、あっという間に暗くなるからよ。酷い時には霧も出る。行くのなら急いだほうがいいねぇ」

　この土地の人間なのだろうか？　いや、そうでもなさそうだ。長年使い古した感じの、紺色のザックが印象的だ。あのデザインは一昔も二昔も前のものだろう。服装もどこか時代錯誤を感じる。少し風変わりというか、かたくなに、ある年代のセンスを守っているかのような……。いや、それも違う気がする。

　男は私より十歳かそれ以上年上に見える。妙に人懐っこいが、それでいて『決して他人に気を許さない』というような用心深さ、抜け目のなさがうかがえる。もっと簡単に言えば、『嫌なやつ』ということだ。
「二十分くらい……。往復で四十分、いや、少し急げば三十分くらいで移動できるだろう。5分くらいは景色を眺めることができるか」

「ああ。あんたならきっとうまくやるさ。今夜はこの先の小屋に泊まるんだろう？」
　男は一歩、前に踏み出し、私を下から見上げるような、いやな目つきをしながら言い寄ってきた。
「ああ。すぐさ。すぐそこ。すぐそこだよ」
「すぐそこですかぁ。そうですね。すぐそこなら、いってみようかな」
「でもくれぐれも気をつけな。あんまり景色に見蕩れて、引き返すのが遅くなると面倒だぞ。まぁ、すぐそこだから、心配はないけどな。じゃぁ、お先に」そう言って男は、私が向かおうとしていた道、つまり小屋のある道へと消えていった。

　なだらかなくだりの道、道幅はやや細く、あまり使われていないようだ。先に進むにつれ、だんだんと道が険しくなってきた。足元に気をとられているうちに、突然ぽっかりと見晴らしのいい場所に出る。一瞬息をのみ、思いついたことを口にした。

「トンネルを抜けたら、そこは絶景だった」

　そこは、一連の山々が、パノラマのように見渡せる、まさに絶景ポイントだった。

「こいつは……、すごいなぁー」

　私は慌てて荷物からカメラを取り出した。こんな壮大な景色はめったに見ることはできない。念入りに、何度もファインダーを覗きこみ、シャッターを切る。思わず「ヤッホー！」と叫びたくなる。その衝動を抑えられたのは、先ほどすれ違った男に、自分の恥ずかしい声を聞かれるかもしれないと思ったからである。先に小屋で寛いでいるあの男がニヤニヤしながら「どうです。絶景でしょう。思わず、『ヤッホー！』って叫びたくなるでしょう？」と言っている姿が、どうにもおぞましかった。ふと、時計をみると、予定の時間を大幅にすぎていることに気付く。

「しまった。思わず長居をしてしまった。急いで引き返さないと、あの男が言うように、暗くなったら面倒だ」

　またしても、忌々しいあの男の顔が頭に浮かぶ。卑しく私を蔑むような目。

　あの男……。いや、おかしいな。そんなんじゃなかったはずだ。あの男の印象は、そこまで酷くなかったはずなのに。どうして私の中で、あの男のイメージがどんどん酷くなっていくのだろうか。一瞬、歩く速度を緩め、後ろを振り返る。そこには薄暗い闇が、まるで私を追いかけてくるように迫ってきていた。あの男が言ったとおりだ。日が向こうの山に隠れた瞬間、突然あたりの景色が変わってしまった。それにしてもこの道、多少の険しさはあったものの、こんなに歩きにくい道だったろうか？

「まずいぞ。ガスがでてきた。周りが良く見えない」

　でも大丈夫だ。あの分かれ道から見晴らしのいい場所までは、たしか一本道だったはず。なにも心配することはない。足元だけ気をつけておけば……。

　私はできるだけ足元に気をつけながら、先を急いだ。しかし、いくら歩いてもあの分かれ道にたどり着かない。険しい道をすぎて、なだらかなところに出たまではよかったのだが、どうもおかしい。もしかして、足元を気にするばかりに、分岐点を行過ぎてしまったのだろうか？

「あと、5分歩いて、分岐点に戻れなかったら、引き返すか」
　一度立ち止まり、あたりを注意深く見渡す。霧は少し晴れてきたようだが、周りはすっかり暗くなってしまった。
「畜生、余計な寄り道さえしなければ……」
　私の怒りの矛先は、余計な進言をしたあの男に向けられた。
「あいつさえ、あいつさえいなければ……」

「あいつ」ふと立ち止まり考えた。

「あいつ。あの男は、どんな格好をしていた？　どんな人相だった？　中年で、いやらしい笑いをする……。でもおかしい。ついさっき会ったばかりだというのに、まるであの男のことが思い出せない」
　そんなことを呟いているうちに、いつの間にか歩き出していた。それから、どのくらいの時間が経過したのかわからない。
「あっ、そうだ。5分経ったら、引き返そうって……、まずいな。どのくらい歩いたのかもわから

なくなっている」

　いつ時計を見たのかさえ思い出せない。私は、まるで十秒前のことを覚えていられないような、そんな状態に陥ってしまっていた。何分かに一度、冷静になる。しかし、かえってそれが恐ろしかった。
「まさか、あの霧か？　あの霧が出てくるたびに、意識が朦朧として……。畜生、一体何だって言うんだ！」男は自暴自棄になり、そして賭けに出た。「意識がまともなうちに、一気に走りきろう。そうすれば、この迷路から抜け出せるかもしれない」

　男は無我夢中で走り出した。途中、何度もバランスを崩して、山道からそれそうになりながらも、驚異的な精神力と、そしてありったけの体力を使い、男は漆黒の闇の中を駆け抜けた。息が上がる。もうだめだ。走れない。そう思った次の瞬間、突然男の前に道が拓ける。

「やった、やったぞ！」

　歓喜の叫び声をあげながら、男は拓けた空間に向かって走り抜けようとした。

「あぁぁぁぁあああああ」

　間一髪のところで、男は踏みとどまった。いや、男の気持ちは、すっかりその場所を駆け抜けていたのだが、体はもう限界を超えていた。一瞬、男の足がもつれ、体勢を立て直そうとしたその瞬間、男の目の前にぽっかりと口をあけた空間ーー、さっきまで男がいた見晴らしのいい場所から、飛び降りそうになっていたのである。

「あっ、あっ、危なかった。あっ、危なかったぞ。ハァー、ハァー、ハァー」
　男の息が上がる。そして、同時に笑いがこみ上げる。助かった。自分は助かったんだ。
「はっはっはっは、はっはっはっは……」

「どうしたんです。ほら。すぐそこ。すぐそこですよ」不意に男の後ろから声がする。
「ほら、ほら。もう、すぐ。すぐそこなのに。ほら、すぐそこ、そこですよ」

　あの道ですれ違った。あの男、あの男……。

「来るな。やめろ。やめろーーーー！」

一瞬の狂気の後、まるで何事もなかったかのように、静寂があたりを包む……。

数日後、男の家族から捜索願が出た。だが、その男は山のどこをどう探しても、何ら手がかりすら見つからなかった。しかし、捜索隊は別の遺体を見つけた。それはもう、何年も前に遭難した男の死体だった。不思議なことに、遺体はすっかり白骨化していたが、衣服や装備はまるで最近まで使っていたかのように痛みが少なかったという。

男の捜索が打ち切られ、誰もそのことを口にしなくなったころ、その山のある場所で……。

「どうしました？　なにかお困りですか？」
「いえ。困ってはいないのですが、この道、地図に載ってなかったものですから、どこに出るのかなぁって」
「あぁあ。この先にとても景色が良く見える場所があるんですよ。もしカメラを持っているなら、是非、行ったほうが良いです。なに、ほんの二十分ほどです。ただ、ひとつだけ注意が必要です。あまり、長居をすると、このあたりは急に暗くなりますからね。霧も出てくる。くれぐれも、気をつけてください」
「二十分くらいなんですか？」

「えー。すぐそこ。すぐそこですよ」

不気味な笑顔を見せながら、その男は小屋に向かう道の方へ去っていった。歳はわりと若い。カーキ色のザックは、少し汚れはしているが、それほど使った感じはない。買ったばかりなのだろう。道を尋ねた男は、しばらく男に勧められた道を眺めてたが、考え直して、当初の予定通り、山小屋へと向かった。しかし、先に行ったはずの真新しいカーキ色のザックを担いだ男の姿は、もうどこにもなかった。

「すぐそこ……。すぐそこですよ……」と、こんな話だったと思う。

でも、僕にはどうしても思い出せないことがある。

それは、この話を聞かせてくれた、旦那さんの人相である。

すぐそこ……。すぐそこですよ……。

おわり

# 時空を超えて

時空を超えて

　寝て起きると、僕は日付が１日進んでいることに気付いた。
　ここのところ徹夜続きで、曜日の感覚がなくなってはいたが、流石にこれには驚いた。

「うわ～、２０時間以上寝たのは初めてだな」

　ようやく取れた休みだというのに、もう仕事に行かなければ。
「一日損をした気分だよ」

　そんな話を昼休みに同僚に話した
「いや～、お前もか。俺なんかしょっちゅうだぜ」
　ソフトウェアの開発の仕事は、時としてむちゃくちゃな納期の上、仕様変更や追加に追われ、日夜を徹して作業することなど、日常茶飯事だ。それでも少しはましになった。あまりの過酷な労働条件で、身体を壊す社員や、精神科や神経科に薬を処方される社員が増加したことを受けて、会社も多少なりの配慮――ある一定時間の労働後の２日間の休みを徹底した。

　しかし、そのことにより、通常の勤務時間に歯止めが効かなくなるような部署まで現れた。それが今、自分がいる部署だ。
「俺なんか、意識失って、ふと気がつくと、ちゃんとテーブル組んでたりしてるんあよな」
「でも、それって間違ったパラメーターとか入ってるんじゃない？」
「そうそう。小人さんは計算が苦手なようで」
「小人さん？」
「そう、小人さん。お前も経験ない？うっかり居眠りしてしまったときに、ふと気がつくとしっかり、作業が進んでいるとか？」
「まぁ、確かに、忙しいときなんか、コンパイルを待っている間にネオチしちゃうことあるからね」
「そうそう、で、そういうときに、自分がやった覚えがないのに、作業が進んでるってことがあった時は、俺は小人さんが現れて、俺の仕事を手伝ってくれたって思うわけ」
「なるほどね。小人がね」
「その小人はさぁ、もしかして、全部お前の姿してたりして」
「おいおい、気持ち悪いこというなよ」
「こんど罠仕掛けて捕まえてやろうか」

「おー、いいね。そしたら世紀の大発見とかいって、遊んで暮らせるほどの大金が手に入るかもな」
「いやいや、そんなにうまくはいかないぞ。もしその小人がお前とそっくりだとしたら、お前もセットでラボ行きだ」
「ちがいない。それにうちの会社は全ての発見・発明は会社に権利が移るとか何とかいって、全部持っていっちまうよ」
「あー、あ、夢を見ようにも、ここにいる限りは夢も見れないのかよ」
「まぁ、寝て起きたら２４時間近くたってましたって奴には、夢はひつようないんじゃないか。どうせ、何も覚えちゃいないんだろう？」
「それとこれとは話が違うだろう。夢を見ることと、覚えていることは全然違うことだぜ」
「わかった。わかった。まぁせいぜいいい夢みろよ。見れればの話だがな」

　どうということはない。疲れているだけだ。最初は曜日の感覚、そして昼夜がわからなくなり、最後に時間。睡眠をとるたびにいい加減になっていく気がする。ここ数日、いや、或いは数週間か――やたらとデジャブを体験する。

「あれ？おかしいなぁ」
「どうした？」
「いやぁ、このプログラムのミスなんだけど、確か一度直したような気がするんだが」
「なんだよ、そんなのよくあることじゃないか。どうせ修正するファイルを間違えたか、ほら、ちゃんと更新履歴確認したのか？しっかりしてくれよ」
「あ、あぁ、すまない」

　そんなはずはないという気持ちと、そういうこともありうるという気持ち。なんとも気持ちが悪い。ひどいときなど、その後の会話も含めて一度体験したような『錯覚』に陥る。これは、いよいよ問題だ。しかし、休みはとれない。特に体に問題があるとは思えない。気が張っているせいか、或いは集団心理なのか、みんあががんばっているのに自分だけリタイアするわけにもいかない。それに、なによりこの仕事は楽しい。

「じゃぁ、これ、明日までに頼むよ」
「おいおい、勘弁してくれよ。明日は土曜日だぜ？」
「あ、あぁそうか、すまない。最近曜日の感覚がすっかりおかしくなっちまって」
「いや、かまわないさ。俺もさっき、同じことを誰かに言われたばかりなんでね。あれ？ちがうか？俺がいったのか？まぁ、どちらでもいい。ともかく明日はゆっくり休んで……」
「なぁ、やっぱり、なんか変じゃないかなぁ、俺たち」
「え？なにを急に……まぁ、クレイジーだっていうことは否定はしないけどよ」
「い、いやぁ、そういうことじゃなくてさ、なんかあまりに記憶が曖昧だと、記憶や時間に関す

る感覚がいい加減だと思わないか？」
「あ、まぁ、確かに……でも、ほら、みんなそうじゃないか？お前も……だろう？」
「そうさ、そうなんだ。確かに同じなんだ。でも、それっておかしくないか、だって俺とお前は……」
「な、なぁ、もうやめにしないか、この話。なんていうか、まずい気がして……」
「あ、あぁ、そうだな。俺も、同じことを……同じことを感じ……これもデジャブなのか？」
「ともかく。ゆっくり休んで、それでリフレッシュすりゃ、何も問題ないさ。ゆっくり休めよ。おっと、もうこんな時間だ。じゃぁ、先に失礼するよ」
「あ、あぁ、すまない。お疲れ様」

　俺はサーバにアクセスし、報告書を作成した。確かに過去の履歴にはきちんとした時間の経過と作業の流れが記述してある。それすら、自分で書いたものかどうか記憶が怪しいのだが、過去の記録に間違いがあるはずもない。ふと、いたずら心で、先ほどのやり取りを報告書の備考欄に記述した。もちろん会話をそのままというわけにはいかない。

自分を＝Ｉ　あいつを＝Ｙ（youの頭文字）に代入し、

```
call open Y
Ret = Check Y() ' データを開けたか
if Ret then
 call YErr
else
 Ret = chkKan
 'if Ret = 0 Or Ret > 2 then
  Call set I

 'else
 ' Call Err(Ret)
 'end if
end if
call Close Y
```

#メモリー上にエラーの恐れあり。要チェック

　俺はＰＣの電源を落とし、自分の部屋に帰った。途中コンビニによって弁当を買う。はたしてこれが夕飯なのか夜食なのかもわからない。あるいはこのから揚げ弁当は昼に食ったものと同じかもしれないが、考えるもの面倒だ。店員はいつもの調子で「あたためますか？」「飲み物と別々にいたしますか？」と聴いてくる。それはいい。マニュアルだがら、毎回同じことを聴けば

いい。

「あ、すいません。こちらのお弁当、期限が過ぎていました。新しいものとお取替えしますので、少々お待ちください」
「あ、は、はい」
　ちょっと、待てよ。なんだ、この感覚は！こんなことまでデジャブなのか？俺は怖くなって――いや、ちがう。怖いのではない。これはどちらかといえば、怒りに近い衝動的な感情――その弁当をキャンセルすることにした。
「いいです。やっぱり、弁当いらないです」
　すると店員はひどく困った顔をした。それは通常の業務のトラブルの対応とはあきらかにちがう、鬼気迫るものだった。
「大変申し訳ございません。お気持ちはわかりますが、お願いです。どうか、どうかこちらの商品を、お買い上げいただけないでしょうか？」
「い、いらない。いらないから、いらないと言っている。それが無理だというなら仕方がないが、道理を説明してくれ」
「も、申し訳ございません。道理と申されてましても私などには、とてもとても……ですが、どうかお聞きいれいただけないでしょか？」

　店員のあまりの必死の形相に俺は簡単に根負けした。たかだか５００円くらいのことで、他の客に迷惑をかけることは本望じゃない。レジにはすでに二人の客が弁当やら雑誌を持って並んでいた。
「わ、わかりました。暖めなくていいんで、その弁当ください」
「お時間さほど、かかりません。暖めさせていただきます」
　余計なことをするな！と言いかけて俺はその言葉を飲み込んだ。もういい。好きにしてくれ。

　コンビニを後にして、部屋に戻る。テレビをつけて弁当を食べる。この時間帯の民放のテレビはどの局も同じような番組しかやっていない。よく知らない若手芸人と、よく知らないグラビアアイドルが、面白くもないことをしゃべり、色気のない馬鹿笑いに終始する。だが、それがいい。なにも考えず、二度と思い出すことのないようなこの光景が、妙に心を落ち着かせてくれる。

　弁当を食べ終えるとすぐに眠気が襲ってくる。シャワーをあびるしたくをしている途中で力尽き、そのままベッドに横たわる。
「きっとこれじゃ、また時空を飛び越えそうだな」
　テレビをつけっぱなしで電気だけ消し、俺はそのまま眠ってしまった。

「９月１８日水曜日、それでは今朝のトップニュースから……」
　つけっぱなしのテレビの音で目が覚める。なんだこの違和感は……水曜日？水曜日だって！

「お、おいおい、なんだよ、水曜日って！
　テーブルの上の携帯を手に取る。電池がない。ともかくもう、出社する時間だ。急がなくては。俺は身支度を間単位済ませて、家を飛び出す。そういえばシャワーも浴びていない。いや、その割には体臭がくさいということも、汗ばんでもいない。まぁ、いい、そんなことはどうでも。

　オフィスに着き、ＩＤカードで入室する。これで出勤管理がされている。２日も連絡なしで休んだとなれば一大事だ。
「おはよう。どうした？血相変えて？」
「あ、すまない。朝起きたら水曜日だったなんて言っても信じてもらえないかもしれないけど……」
「おい、おい、大丈夫か？お前」
「あ、あぁ、別に体の調子が悪いわけじゃないんだが」
「はぁ？問題は体じゃなくてこっちのほうじゃないのか」
　そういってやつは人差し指で頭を指差した。
「火曜日の次は水曜日。寝て起きようが寝まいが、そう決まっているの？お前本当に曜日の感覚むちゃくちゃだな」
「え？だって、俺、金曜日に帰って、そなまま……」
「そのまま、水曜日まで眠っていたってか？ＳＦじゃあるまいし、時空を飛び越えて気がついたら４日も５日も経ってましたってか？」
「ど、どういうことだよ、それって？」
「どういうことって、お前ＰＣ立ち上げてみよ。ちゃんと作業もしてるし、報告書も毎日あがってるだろうに」

　確かにそうだ。もはや確認するすべはそれしかない。俺は急いでＰＣを立ち上げ、サーバにアクセスした。
「ある。ないはずのものがある」
「ちがうだろう。あるべきものしかそこにはないさ。お前、本当に大丈夫か？医者に診てもらえって、言いたいところだけど、今日もやること山積みだ。頼んだぞ。一人でも欠けたら、このプロジェクトは立ち行かなくなるからな」
「あ、あぁ、すまない」

　なんだ、この「あ、あぁ、すまない」というのは、前にも言ったよな。それに……それになんなんだ。この感覚、これだけ、非日常的な感覚だというのに、またしてもデジャブだ！

　ともかく、作業を……いったい、なにをどこまでやったのかすらわからないのに。
　９月１７日の作業履歴をみる。驚いたことにその内容には覚えがある。しかし、この備考欄の記述はなんだ？

```
call open Y
Ret = Check Y() ' データを開けたか
if Ret then
 call YErr
else
 Ret = chkKan
 'if Ret = 0 Or Ret > 6 then
  Call set I

 'else
 ' Call Err(Ret)
 'end if
end if
call Close Y
```

#メモリー上にエラーの恐れあり。カウントチェック

　この記述には覚えがない。だが、それは１６日にも同じものが記載されている。最初は１３日の金曜日だ。いや、よくみると、微妙に一箇所記述に違いがある。７行目の数値が最初が「２」次が「４」そして昨日が「６」になっている。

「カウント……？」
　それに最初の２回はコメントに

#メモリー上にエラーの恐れあり。要チェック

　となっているが、昨日のものから『要チェック』が『カウントチェック』になっている。つまり、この数値の変化に気をつけろということなのか？そういえば聴いたことがある。ハリウッド映画だったか？主人公の記憶が一日しか持たないという設定のサスペンス映画。まさか、自分はそういう病気にかかったのか。いや、それにしては記憶が飛びすぎている。いや、飛びすぎたいるんじゃない。一日一日記憶が消去されれば、記憶はどんどん飛んでいく。それが発症したのが金曜の夜からということなのか？それもおかしい気がする。この言い知れない違和感は、一体なんなんだ。

「たしか、このＩは自分のこと、Ｙはあいつのこと、あいつって誰だ？そうか！あいつに聞いてみるか？」

　そう思った瞬間、不意にあいつが声をかけてきた。
「なぁ、ちょっと、いいか、変なこと聞くようだけど……あ、その前にこれ見てくれるかな」
　あいつはさっきとはちがい、妙に深刻な顔をしていた。きっと、さっきの自分もそんな顔をしていたのだろう。
「これなんだけど、何だと思う？俺、自分で書いているはずなのに、ぜんぜん記憶になくって……」

　あいつのＰＣの画面にあったのは、あいつの作業報告書の備考欄だった。そこにはこう記載されていた。

```
call open Y
Ret = Check Y() ' データを開けたか
if Ret then
 call YErr
else
 Ret = chkKan
 'if Ret = 0 Or Ret > 5 then
  Call set I

 'else
 ' Call Err(Ret)
 'end if
end if
call Close Y

#メモリー上にエラーの恐れあり。カウントチェック
```

　俺とあいつ

　ＩとＹ

　Ｙって、あいつって誰だ？

　二人がお互いの顔を見合わせる。それはまったく同じ表情をしたいた。何一つ違わない。まったく同じ表情だった。

おわり

# 魔法少女

魔法少女

　それは僕が小学３年生の時の話。二歳年下の弟と近所の公園で遊んでいるときのことだった。弟はキャッチボールがへたくそで、それでも根気よく、ボールの握り方、投げ方、とり方を教えてあげていた。でも、弟はなかなか思うとおりにやってくれない。弟の投げた球は、とても僕が届かないあさっての方向に飛び、僕はそのボールを追いかけて走った。公園のベンチ。ボールの転がった先に一人の少女がぽつんと座っていた。ボールは彼女の足元に転がった。

「ねぇ、ボール取ってくれる？」
　少女は酷く驚いた表情をして、回りをきょろきょろと見渡し、小さく舌をだした。
「ボール、これね。はい、どうぞ」
「あ、ありがとう」
「この町の子？」
「うん、そうだけど、君は？」
「わたしは、ほかの町に住んでいるわ。ちょっと、遠いところよ」
「いま、一人なの？」
「うん、お父さんとお母さんが用事を済ませるからって。だからここで待っているの」

　少女はまるでフランス人形のような透き通った白い肌をしていたが、髪の毛は少し重たく感じるくらいに黒々としていた。目はパッチリとしているが、瞳はどことなく日本人のそれとは違うような、色素の薄い色をしていた。着ているものは公園で遊ぶには不釣合いな格好である。町に出るような余所行きの格好。

「おにいちゃん、まだぁ？」
　弟がボールを催促する。僕はボールを弟に投げた。
「ちょっとタイム。アキラ、一人で練習してて」
「えー、つまんない」
「いいから、そこのトイレの壁にボールを投げる練習しておけよ。ちゃんとまっすぐ投げられるようにな！」
「おにいちゃんといっしょがいい」
「１０回ちゃんと投げられたら、一緒にやってあげる」
「１０回？いいよ、わかった」

　弟はいつも僕について歩いていた。僕は時々それを疎ましく思っていた。弟と一緒じゃなければ、もっと友達といろんなところで遊べるのに、どこにでもついて歩こうとする弟は必ず最後には足手まといになっていた。

「弟さん？いいの？」
「いいよ、あんなやつ」
「そうなの？」
「いないほうがせいせいするよ。君には兄弟はいないの？」

　どういうわけか僕は、その少女に興味を引かれた。それを一目ぼれというには、あまりに僕も少女も幼かった。いや、彼女はもしかしたら、そんなこともないのかもしれないけど。ともかく僕は、弟のことよりも、その少女ともう少し話がしたかった。

「ねぇ、君はいくつ？今、何年生なの？」
「何年生？あぁ、学年ね。わたしの通ってる学校みたいなところは、たぶん、あなたのそれとは違うから、何年生とかないのよ」
「えー、本当に？そんな学校あるんだ。びっくり」

　少女は少し笑いながら答えた。
「びっくりも何も。わたしこそ、びっくりよ。私が見えるなんて」
「え？なにが？」
「まぁ、いいわ。どうせ話しても信じてもらえないし」
「だから、何がだよ。信じるとか、信じないとか」
「ねぇ、あなた。宇宙人とか幽霊とか信じる？」
「見たことのないものは信じない」
「へぇ、そうなんだ」
「でも、本当はわかんない。オヤジはいつもそういって、僕が見ているテレビのチャンネルを変えちゃうんだ。本当はＵＦＯとかネッシーとかもっとみたいのに」
「ネッシー？」
「知らないの？ネス湖にいる恐竜さ」
「恐竜？まさか」
「そうだろう？僕もそう思うんだ。そう思うんだけど、いたらすごいなぁって思わない？雪男とか地底人とか」
「じゃあ、魔女とかは？」

　少女はとてもいたずらっぽい顔で僕に尋ねてきた。僕はそのあまりのかわいらしさに思わずたじろいでしまった。

「まっ魔女？ほうきに乗って空をとぶの？」
「そんな魔女はいないわよ。そうじゃなくて、魔法を使う女の人」
「魔法？人間をカエルに変えたり、かぼちゃを馬車に変えたりかい？そんなのはおとぎ話や漫画の世界の話だよ」
「そう、やっぱり信じられない？」
「だってさ、もし、魔法使いがこの世に存在したら、もっとすごいことが起きてるんじゃない？」
「もっとすごいことって？」
「うーん、よくわかんないけど、奇跡とか……」
「奇跡は、毎日どこかで必ず起きているわよ」
「あ、そりゃあ、そうだけど、でも、それって小さな事件とかでしょ？」
「魔法はね。誰も望んでないことはかなえられないのよ」
「誰も望んでいないこと？」
「そう、たとえば、世界が平和になりますようにとか、病気で苦しむ人がいなくなりますようにとか、そういうこと」
「えっ、なんで？どうしてそれがダメなの？」
「わかんない。それがわからないから、わたしダメなのね」

　少女はとても悲しそうな、寂しそうな表情をした。力なくベンチに腰掛け、空を見上げた。その瞳にはまるで空の青さがそのまま映ったような美しさだった。僕は、しばらくそれに見蕩れてしまった。

「ねぇ？あなたの望みってなに？」
　不意に少女が尋ねてきた。お金持ちになりたい。野球が上手くなりたい。そんなことが最初に頭をよぎった。

「ねぇ、お兄ちゃん。まだぁ。ねぇ、もう一人でやるのやだよ」

　公園の入り口のそば、トイレの壁にボールを投げて遊んでいた弟がすぐ後ろまで来て、僕をせっついた。
「うるさいな！ちゃんと１０回できたのかよ！」
「だって、だって、一人じゃできないもん！」
「できないなら、もう一緒にやってやらない！」
「お兄ちゃんのいじわる！ばかーっ！」

　売り言葉に買い言葉。弟に罵声を浴びせるのをこらえられたのは、目の前にあの少女がいたおかげだ。だけど、弟が公園のトイレに向かって駆け出したあと、思わず口走ってしまった。

「あんなやつ……あいつなんか、いなきゃいいのに！」

「そう、そうなの」

　その声は、少女の今までのそれとは少し声のトーンが違うように思えた。いや、少女が公園のベンチに座っているのに、なぜかその声は僕の耳元で囁くように聞こえた。そう、空間的な位置関係がずれているのだ。同時になにかとてつもなく嫌な感じが僕の肌を突き刺した。鳥肌が立っている。急にアキラが心配になった。

「アキラ……」
　振り向くと、アキラがボールを公園のトイレの壁に向かって投げているところだった。あきらかに暴投とわかるフォームから放たれたボールは、トイレの壁に当たらずに公園を出て、道路に転がる。アキラはそれを無我夢中で追う。そこへ一台の乗用車が……

　ボールのフライを取る感覚と同じだ。ボールの軌道、落下点の予測、自分の走るスピード。それらの要素からボールがキャッチできるか出来ないかが予想できるように、アキラが車に撥ね飛ばされる映像が僕の脳裏に浮かんだ。ダメだ、そっちに行ったらダメだ。車はアキラの行動を捉えていない。絶対にブレーキは間に合わない。
「アキラ！危ない！」
　叫ぶしかなかった。が、結果は目に見えている。

「そうなんだ」
　さっきと同じように少女の声が耳元で囁く。

「わかった気がするわ」
　そう聞こえた気がする。そうじゃなかったかもしれない。僕はもういちど弟の名前を叫び、けたたましいブレーキ音と共にアキラは中を舞った。いや、何かにつかまれて空に吸い上げられたように見えた。いったい何が起きている？

「大丈夫よ。弟さん、仲良くしてあげてね」
　振り向くと少女の影のようなものが、僕の目の前を通りすぎていった。少女は右手を前に伸ばし、何かをつかむような格好をしているように見えたが、まるで僕の体をすり抜けるようにどこかに消えてしまった。

　弟は奇跡的にほんのかすり傷程度ですんだ。そのかすり傷も、車に当たったにしてはまるでおかしな傷であったが、誰もが弟の無事を奇跡だといい。それ以上追求はしなかった。

「あれは、いったい。何だったんだろうか？」
　僕がその話を終えると、妻はくすくすと笑い、そしてこう続けた。
「ちゃんと覚えていたのね？でもえらいわね。あのときの約束、ちゃんと今まで守ってたのね」
「ミサ？いったい何のことだい？」
「あなた、ちゃんとわたしとの約束を守ったってことよ。このことを誰にも話してはダメよって」
「あ、そうだ。そうだった。あのあと僕は、あの少女の話を親にしようとしたら、またあの少女が……いや、少女じゃない。あれは、あれは、ミサ、君だったのか」
「そうよ、あの少女は覚醒する前のわたし。あなたがわたしに覚醒するきっかけを与えてくれた」
「覚醒？」
「そうよ。覚醒。わたし魔法学校で成績が悪くてね。いつも最後の試験に合格できなくって。でもあなたが教えてくれた。人間は本音と建前があって、本当の望みは本人すら気づいていないことがあるってことを」
「ぼ、僕はすっかり忘れていた。いや、怖くて、怖くて、それで記憶を封印してしまったのか。あのとき君は、僕にこういった……」
「もしも、このことを、誰かに話したら……コ・ロ・スって言ったかしら？」
「あ、ああ、そうだ、それで、僕は怖くなってあの少女のことを誰にも……誰にも言わないできたのに」
「今日、言ってしまったわね」
「ぼ、僕は、僕は君を……」

「愛している？それは本音？建前？」

　そうか、僕にもわからなかったことがようやくわかったよ。あのとき少女が言っていた言葉を……

　みんなが望んでいるわけじゃない。
　平和になることも。
　この世から病気がなくなることも。

　だから、世界は変わらない。たとえ魔法がこの世に存在しても……
　たとえ、君への愛が偽りでないとしても……

おわり

# カサカサ　パート１

カサカサ　パート１

　妖怪といわれているほとんどの怪異のもとネタは、何かの気配だったり、よく耳にはするけど意味不明の物音だったりする。小豆洗いは、そんな妖怪の代表的な存在ではないだろうか。確かに水辺で耳を済ませると、水の流れる音に混じって、シャカシャカ、シャカシャカと小豆を洗うような音がきこえるような気がするときがある。試してみるかどうかは、あなた次第だ。

　大丈夫、小豆洗いは、地方によっては縁起の良い妖怪だと言われている。もちろん、そうでないのも、いるらしい。「小豆洗おか、人取って喰おか」と言いながら近づいてくるようなら……いや、今回のお話はその小豆洗いのはなしではない。もとネタの何かの気配、良く耳にするけど意味不明の音というのは、現代でもあるはずだ。きっとその音はカサカサカサっというレジ袋がすれるような音だったりするはず――そんな物音、しませんか？

　そのカサカサカサ、カサカサカサという音の正体――おかしい、何の音だろうと周りを見渡すと、白いレジ袋のようなものが目に入る。どうやら音はそこから聞こえてくるらしい。

「風もないのに……虫でも、入っているのかな？」

　別に気にしなければ、どうということはない。コンビニでビールを買ってきたときのレジ袋を、うっかりその辺に置きっぱなしにしたのかもしれない。

「ゴキブリでもいたらやだな。片付けるか」

　あなたがそう思うかどうか、或いはそう思わなくても、まるで何かにひきつけられるように、あなたは部屋の隅で、カサカサと物音を立てる、白いレジ袋のようなもののそばに近づく。するとね……風に吹かれたようにふわって、それが、浮き上がる。

「あれ？　なんでだろう？」

　そして次の瞬間、あなたの目の前は急に真っ白になる。

「どうなったんだ。なにが起きたんだ」って思って慌てて歩き出す。するとね……

「カサカサカサ」って音がする。それであなたは気付く。

「あれ？もしかして、自分が今いるのは……まさか、まさか、さっき見たレジ袋みたいなものの中だ！」って。

　そして、そのレジ袋のようなものの外から声がする。

「よかった、やっと出れた！」
　その声の主は、前にこの袋の中に閉じ込められた人物だということにあなたが気付くまで、それほど時間はかからないだろう。そしてあなたはーーそう、白い袋の中に閉じ込められたあなたは、次の誰かが、『あなた』の存在に気づくまで、

「カサカサカサ、カサカサカサ」と音を立てながら夜の街を彷徨う。

　次の、誰か、『あなた』にかわる誰かを探してね……

「カサカサ……カサカサ……カサカサカサ……」

　そんな音、聞こえませんか？

おわり

# カサカサ　パート２

「え？そんなに安いんですか？」
「そうよ、バス、トイレ別の１Ｋ。ちょっと古いけど管理費込みで４万を切る物件は、他にないね」
　同じサークルのひとつ上の島田先輩は、念願の一人暮らしを始めた。大学までは親元から２時間近くかけて通っていたが、大学３年の春、ついに親元を出ることを決心した。

　大学の校舎は横浜だったが、少し歩けば横須賀市だった。大学の周りというのは、安い物件が確かにある。しかし、大学のそばともなれば人気があり、結局相場的には少し高めになってしまう。島田先輩が見つけた物件は、大学まで歩いて２０分、駅にも遠く、周りの環境はちょっとした買い物をするにも不便な場所だった。それに、アパートの周りには小中の町工場があり、昼間は少し物音がうるさい。そして夜になると、街灯も少なく、とても女性が一人で歩けるような雰囲気の場所ではなかった。安い理由は、探せばいくらでもある。まぁ、それでも先輩は親元から出ることが出来ればなんでもよかった。

　僕は、大学から電車で一時間ほど――そう、わりと近くに住んでいた。この大学を選んだ理由も、近かったから、そして高校からエレベーター式で簡単に入れるからで、大学と名前が付きさえすれば、なんでもいいと思っていた。どういうわけか、島田先輩は、何かにつけて僕を呼びつけ、サークル仲間と遊ぶときは必ずといっていいほど一緒に行動していた。馬が合うというよりは、先輩が勝手に僕についてくるという感じだった。一度酒の席で、弟みたいだと言っていた。先輩は一人っ子で、ずっと親元で生活をしてきた。兄弟が欲しかったのだという。自分の部屋に電話の子機を引き込んでいた僕には、電話もしやすかったようで、一度など、ゲームソフトの攻略方法がわからないからと、夜中に電話をかけてきたこともあった。さすがに迷惑だとは思ったが、不思議と嫌だとは思わなかった。

　大学の夏休みがおわり、夜が肌寒く感じるようになったころ、その島田先輩から妙な話を聞いた。それはこうである。

「別に引っ越した形跡がないんだけど、隣とその隣、ほら、うちは１階の一番奥の角部屋なんだけど、入り口の２件の人の住んでいる気配がなくなったんだよな。夜逃げでもしたのかなぁ……」

「お隣さんって、どんな人が住んでたんでしたっけ？」
「たしか、隣は同じ大学の文学部の４年生だったかな、その隣はわかんないけど、でも多分学生だと思うけど、ほとんどあっても挨拶もしないような人だったからなぁ」
「４年なら、もう、就職も決まって、実家に帰ったとか？」
「いや、洗濯物が干しっぱなしなんだよ、２件とも」
「はぁ、洗濯物？」

「あんまり、よく覚えてないんだけど、もしかしたら、先に人の気配がなくなったのは隣の隣かもしれない。１０２号室」
「あれ、先輩のところ１０５じゃなかったでしたっけ？」
「そうだよ、１０１は管理人がもともと使ってたらしいんだけど、今はだれも住んでないらしい、で、１０３号室が隣で、１０４がなくて１０５がうちの部屋」
「１０４、ないんですね。それって縁起が悪いから、欠番にしているだけで、実質先輩の部屋が１０４なわけですね」
「それはほら、だって、２階なら２０４で「２」と「４」で縁起が悪いかもしれないけど、俺のところはどっちにしても関係ないだろ」

　先輩は少し怒ったような口調でいった。先輩はこの手の話が苦手なのだ。実は先輩の家に泊まりに行った何回かは、飲んで遅くなったこともあるが、先輩が暗い夜道を一人で帰るのが嫌だからというのも、少なからずあったのだ。もっともそのことをお互いに口に出したことはない。島田先輩が怖がりだという話を２つ上の先輩が冗談めかして話しているのを聞いたことがある。
多分、それは事実だと思う。

「でも、隣の部屋から、時々物音がするんだよ」
「またまた、先輩、そういうことを……」
「いや、ほら、レジ袋の中をガサガサ探すような音あるじゃん。あれがさ、夜中にするんだよね」
「でも、先輩の部屋って、隣の部屋とは構造上、すぐ隣って訳じゃないでしょう？」
「そう、だから、その音が聞こえるのは、俺が夜中にトイレに行ったときだけなんだ」
「あー、そういえばトイレは確かに隣の音、聞こえますよね。トイレットペーパーを巻き取る音とか、結構リアルに聞こえたりしてましたね」
「なんか、気味悪くてさ」
「ネズミとかじゃないですか？あっ、もしかしたらタヌキだったりして、この前、先輩を家まで送ったときの、アレ、絶対にタヌキですよ」
「そんなわけないだろう！」
「あれ？もしかしたら、あのときのタヌキに化かされてるんじゃないですか？」
「そんなこと、あるわけないだろう」

「そうえいば、こういう話知っています？たしか小泉八雲の書いたやつだっけな　むじなとか言う話……」

　僕は面白がって、先輩に少し怖い話を聞かせた。普通の人ならどうということはない、昔からあるのっぺらぼうの話だ。そして、むじなというのはタヌキだったり、アナグマのことで、昔から人を化かすという話をした。先輩は笑って話を聞いていたが、その夜、先輩から電話が来た。

「ごめん、また、あの音が、カサカサって音がしてさ、ちょっと来てくれないかな？さすがに、怖くて」
　最初は断ったものの、元はといえば、僕が先輩をからかって、怖い話でビビらせたせいなのだ。僕はしかたなく、親から車のキーを借りて、先輩の部屋に向けてカローラⅡを走らせた。

　先輩のアパートへは昼間なら一時間ほどだが、夜も１１時を過ぎれば４０分くらいでいける。先輩を心配して急いだわけではないが、つまらない用事は早く済ませたいとの思いから自然、車のスピードは上がった。車中ふと、ある日の出来事を思い出した。それは、サークル仲間とドライブをした帰り、先輩を車で送る途中の道で、ちょっとした事故を起こしてしまった。事故といっても、相手は人や車ではない。なにか獣を引いてしまったようなのである。道路上に白い影のようなものが浮かび上がり、危ないと思ったときにはもう遅かった。僕は下手にハンドルを切ったり急ブレーキを踏んだりせずに、出来る限りそれをよけようとした。

　ドン！と何かがバンパーに当たる手ごたえがした。少し先で車を止め、バンパーを確認すると、向かって右側、助手席側のバンパーに少しへこみがあり、獣の毛のようなものが着いていたが、幸い血痕は見つからなかった。タイヤにもなにもない。運転していて何かを踏んだという感触はなかったから、多分跳ね飛ばしてしまったのだと思う。ゆっくりとバックでその現場に戻ったが、路上にはなんの痕跡も見当たらない。道路の左側、およそ跳ね飛ばしたであろう方向は草むらになっていて、その中を探して見つけることは困難だ。後味は悪かったが、それで現場をあとにした。

「猫か、野犬か」
「野犬はないでしょう。あるいはタヌキならありえますけど」
「タヌキか、タヌキだったら怖いな」
「なんでです」
「え、いや、なんでもない」
「先輩まさか、タヌキが化けて出るとか言わないでくださいよ」
「いや、むかし聞いたことがあるんだよ、そういう話」
「そういう話って？」
「あー、もう、忘れた。行こうぜ。もしかしたら助かっているかもしれないし」

「そうですね。行きましょうか」

　先輩もたいした怖がりである。いまどきタヌキが化けて出るなど、子供でも怖がりはしない。とはいえ一人で夜道を車で走らせていると、ふといろんなことを想像してしまう。僕はあの獣を引いてしまった道を迂回して先輩のアパートへ向かった。

　先輩のアパートに着いたのは日付が変わる少し前だった。

　ピンポーン

　何もないとわかっていても、このアパートは少しばかり不気味だ。妙に生活感というか、人の気配が希薄だ。かろうじて廊下の洗濯機やゴミの回収日に出し忘れたままの空き瓶、前の住人が置いていったのであろうすっかりさびきった三輪車が、かつて人が住んでいたことを物語っている。しかしそれが間違いであることに、いずれ僕は気づくことになる。何もないとわかっていたのではない。何もないと思っていただけだったのだ。

「あれ？先輩？市原です」
　返事がない。部屋の明かりがついていることは、車を止める前に確認している。どこかに買い物に行ったかそれとも寝たのか……或いはトイレや風呂かもしれない。ドアをノックする。

　コンコン

　やはり反応はない。ドアノブに手をかける。拍子抜けするくらい簡単に右に回る。

　カチャッ

　鍵はかかっていない。すでにそういうことを遠慮するような間柄ではなかった僕は、そのまま扉を開けた。
「先輩！いないんですか？入りますよ？」
　テレビの音が聞こえる。寝ているのか……玄関で靴を脱ぎ、ずたずたと部屋の中に押し入る。玄関口からキッチンに入り、くもりガラスの引き戸で仕切られて奥に８畳のリビングがある。相変わらず台所は使いっぱなしのままだ。僕は何度か台所を片付けたことがある。スープの少し残ったカップラーメンのゴミや惣菜のパックが放置されている。
「相変わらずだなぁ。先輩お邪魔しますよ」

　ガラガラ

　テレビの画面には深夜枠のバラエティー番組が流れている。若手芸人とグラビアアイドルがなにやら騒がしいが、ひとつも面白くない。いつもソファーベッドに横たわりながらテレビを見ている先輩の姿がそこにはなかった。僕に出すつもりだったのか、それとも片付けるのを忘れているだけなのか、コップが二つ並んでいる。コカコーラのペットボトルにはまだ半分コーラが残っている。今さっきまで、そこにいた形跡……読みかけの雑誌は占いのページが開かれている。案外と信心深い。いや、単に悪いことはすべて占いのせいにしたいだけなのかもしれない。

「トイレ……かな」
　そうつぶやいた瞬間、背後から耳障りな音が聞こえてくる。

　カサカサ……カサカサ

　一瞬腰を抜かしそうになる。そして次の瞬間頭に血が上りそうになった。
「先輩！担ぎましたね！そういう冗談は止めてくださいよ！シャレになってませんから」
　玄関のすぐ左手に扉があり、そこに脱衣所とトイレと風呂がある。ご丁寧にそこの電気は消しているようだ。

　カサカサ……カサカサ

　僕の声に反応するようにカサカサというビニール袋をこすり合わせるような耳障りな音が聞こえてくる。
「先輩！いい加減にしてくださいよ。子供でもそんなことしませんよ」
　強い足取りで、キッチンに戻り、脱衣所の扉を開ける。暗くガランとした脱衣所には選択物がたまっている。先輩は週に一回しか選択しないと言っていた。脱衣所の右手が風呂、左手がトイレ。迷わずにトイレのドアノブに手をかけて、一瞬躊躇する。この土壇場で、先輩がさらにドッキリを仕掛けてくる可能性。

　先にそれをつぶそう。

　振り返ってトイレ、脱衣所、風呂場の電気をつけ、先に風呂場を覗く。やはり誰もいない。

　カサカサ……カサカサ

　これ見よがしにトイレからカサカサという音がする。まだ続けるのか！
「先輩、ビールをおごってもらうだけじゃすまないですからね！」
　トイレのドアノブに手をかけ玄関と同じように右に回す。不意に体が反応する。

　この扉は開けちゃダメだ！

　しかし、頭で指令した体の動きは、すでに体が覚えた自然な動きとして、それを止めることは困難だった。

　まずい、なにかおかしい。これはやばいかもしれない。

　そう思う気持ちが腰だけを後ろに引かせる。なんとも不恰好な姿でトイレのドアを開けることになった。

　カサカサ……カサカサ

　そこに先輩の姿はあった。いや、先輩の姿をした別のもの……ちがう、ついさっきまで先輩だったもの？

　カサカサ……カサカサ

　様式のトイレの便座に腰掛けた先輩は、苦しそうにもがいていた。が、それもいまことときれようとしている。僕は医学の知識があるわけではないが、それは人間が別のものに変わる瞬間。死体になる瞬間だとすぐにわかった。先輩の手は顔や頭をかきむしっている。しかしそれはもはや力なく。最後の力を振り絞って首の辺りをかきむしっている。先輩の頭は白いビニール袋――スーパーのレジ袋のようなもので覆われ息が出来ない。普通ならなんなく取り除けるはずのそれは、まるで生き物のように先輩の顔にへばりつき、口の形や鼻の形が呼吸をするたびに膨らんだりへこんだりしている。

「せ、先輩！どうしたんですか！」
　慌てて先輩に近寄ろうとする僕を、先輩が制した。
「に……げ……お……は……や……う」
　先輩は自らが助かるためではなく、なんとか自分の声が僕に届くようにと、先輩を締め付けるレジ袋のようなものを摘み、最後の一息をそれに使い……糸の切れたマリオネットのように動かなくなった。

「あっ、あっ、あああっ！」
　悲鳴を上げながら、僕はトイレの扉をしめ、助けを呼ばなければと玄関をはだしで飛び出した。すぐとなりの１０３号室の玄関のドアを激しく叩く。

　ドンドンドン！ドンドンドン！

「だれか！だれかいませんか！」
　返事がない。隣の部屋に行きかけて、ふと、先輩の言葉を思い出す。

「た、たしか、隣の部屋からカサカサって音がするって……まさか！」
　非常事態である。僕は１０３号室の玄関のドアノブに手をかける。またしても嫌な予感がしたが、もはや自分をコントロールすることなど出来なかった。案の定、鍵はかかっていない。これはもしかしたら最悪の状況なのかもしれない。思い切って扉を開けて中の様子を窺う。暗がりになにやら人影のようなものを見つける。
「あ、あのー、すいません！実は大変なことが……」
　その人影がこっちに向かって歩いてくる。

　カサカサ……カサカサ……という音と共に。

　同じだ。先輩と同じでその人影も頭からレジ袋のようなものを被っている。それはゆらゆらと歩き、さながら生ける屍のようであった。戦慄が走る。僕は生まれて初めて命の危険を感じた。１０３号室の玄関から後ずさりする僕にさらに追い討ちをかけるよな音が耳に入ってくる。

　ガチャ

　１０５号室の玄関の扉が開き、ついさっきまで先輩だった『もの』が、ふらふらと、そしてゆらゆらとこっちに向かってくる。

　カサカサ……カサカサ……

　その姿は子供のころに見た妖怪の映画に出てきたのっぺらぼうのようでもあり、ゾンビのようでもあった。僕は逃げ出そうとして失敗し、その場に倒れこんでしまった。ひどくひざをコンクリートの床に打ち付けた。強烈な痛みは、それでも恐怖には勝てなかった。必死の思いで這うように廊下をアパートの出口に向かう。しかし、その行く手を１０２号室の玄関の扉が遮る。

　カサカサ……カサカサ……

　１０１号室からも誰か出てきたようだ。

　カサカサ……カサカサ……

　意識が遠ざかる。

カサカサ……カサカサ……

音だけがどんどん近づいてくる。

カサカサ……カサカサ……

苦しい。何も見えない。

カサカサ……カサカサ……

なんだ、案外ときもちがいいや。

カサカサ……カサカサ……
カサカサ……カサカサ……

次に僕が気がついたのは病院のベッドの上だった。先輩のアパートに行く途中に事故にあったらしい。僕はまったく思い出せなかった。ただ、僕が事故にあった場所を聞いたとき、僕はとても恐ろしくなり、後日その場所に行って周りを散策してみた。そこは僕が何か獣をひいてしまった場所。僕の記憶ではそこを迂回したはずなのだが、僕はハンドルを切り損ね、雑木林に突っ込んでしまったらしい。そのときに思いっきりひざを打ちうけた。幸い打撲程度で済んだ。

「あ、もしかして、これか」
僕が事故を起こした場所のすぐそばに、一体の獣の死体が転がっていた。獣の頭には白いレジ袋がかぶせてあった。そうなのだ。僕が車で引いてしまったのは、レジ袋の中の食べ物をとろうとしてその中に頭を突っ込み、それが取れなくて道路に飛び出した、一頭の獣だったのだ。それが狸（タヌキ）なのか、狢（ムジナ）なのかはわからない。僕は死骸のレジ袋を取ってあげ、その場に丁寧に埋葬し、手を合わせた。

２ヵ月後、先輩はアパートを引き払った。先輩の身に何が起きたかは、いまだに聞いていない。その頃から僕と先輩は一緒に行動しなくなった。あの日以来、僕はエコバックを常に携帯するようにしている。

おわり

# もしもＵＭＡが部屋にいたら　パート１

もしもＵＭＡが部屋にいたら　パート１。

　まず、この匂いだ。

　異臭。

　この場所にふさわしくない、湿気交じりの、土臭い匂いが、かすかに鼻をつく。

　そう……かすかに。

　ヤツの身体自体は、それほど大きくないのかもしれない。或いは、この部屋に侵入して、まだそれほど時間が経っていないのか……

　生き物が物陰に隠れるのは、自分の身を守るためか、或いは……

　或いは獲物を捕食するため。

「どうすればいい？」

　まず、今一番考えなければならないことーーそれはこの足。
　ジーンズから無防備にさらしているこの素足。もし、ヤツがこのベッドの下に潜んでいるとした場合。

「その場合は……」

　早く足をベッドの上に上げるんだ！

　畜生……動かねーよー

　畜生……怖えーよー

「落ち着け、落ち着くんだ！」

　そう、相手に隙を与えないように、足を上げようとするから、動かないんだ。

　ヒザを伸ばすようにすれば……

「う、動く……動くぞ、こ、これなら」

　シューーーー

　次の瞬間、それはまるでヘビが舌を出しながら相手を威嚇するような音が足元から聞こえた。

「ぐぁぁあ！」

　悲鳴を上げるつもりはなかったが、思わず口から漏れた声は、口からでたというよりかは、鼻からもれたという感じだった。

　間一髪

　ボクは両足をまっすぐ伸ばし、時計と反対周りに腰を回転させて、どうにか素足を「ヤツ」から救い出した。

「畜生！スリッパを履いて来るんだった！」

　だがボクのおかれている状況は、一向に改善されてない。

　なぜなら……

　「ヤツ」はボクの真下に潜んでいるのだから……

おわり……或いはつづく

# もしもＵＭＡが部屋にいたら　パート２

もしもＵＭＡが部屋にいたら　パート２

　ベッドの下――僅か１５センチほどの隙間の中にヤツ（ＵＭＡ）はいる。unidentified mysterious aminmal――いわゆる未確認生物、未確認生命体のことである。ヤツがこの町に現れたという話は一月ほど前からあった。ボクの知る限り最初の目撃情報は昼間人気の少ない公園で一人の少女がその生き物に噛み付かれたというものだった。少女は足に軽い怪我を負ったというのだ。その姿は蛇のようであり、トカゲのようであり、シュゥーーーーというヘビのような威嚇音が聞こえたと思ったら、いきなり草むらから飛び出してきたという。

　少女の怪我はヘビのような爬虫類が噛み付いたというものよりも、肉食の哺乳類に肉を食いちぎられたような状態だったという。いや、しかしその情報は正確ではない。あくまでもネットに上がっていた噂話でしかない。公式には、軽症としか発表されていない。その後は、ＵＭＡを一目見ようと集まった野次馬の目撃情報でこれはほとんど当てにならない。ツチノコなら懸賞金がいくらもらえるとか、そんな話題が持ち上がったりもした。

　テレビや新聞では取り上げられないようなアングラなこの話題が、世間の注目を浴びるようになったのは３日ほど前の話だ。中国の山間部の農村が全滅したとのニュースが流れた。住民は何者かにかみ殺され無残な状態で発見された。中国政府はこの事実を一月ほど隠蔽していたが、その情報がネットを通じて世界中に漏れ出し、ついに中国は非公式であるが、何かしらの事件が起きたことを認めたのである。

　何者か、未知の生物によって村人約７０名が死亡した。実際死体が全部確認できたわけではない。村人が全部で何人いたのか、行方不明者がいるのかはまだ調査中とのことである。しかし一部ネットの情報では中国政府はこの村と周囲の野原を徹底的に焼き尽くしたとの噂も流れていた。いったい何が起きたのか？そして、ボクのベッドの下にいる奴は、果たしてそれと同じなのか……いや、それは問題ではない。この情報がもたらされたその日のうちに、大きな川を挟んだ隣の町に家族全員が何者かによって惨殺されたという事件が流れた。しかもそれは１件ではなく、同時に６件もの事件が起きたのである。

　公式には詳しい内容は発表されていないが、中国の事件と結びつけて同一の犯人による犯行ではないかと、すでにネットでは大きな話題になっており、警察の機動隊やら、自衛隊が動いたという噂まで流れていた。一部動画投稿サイトに、被害にあった家の惨状が一時上がっていたという話もあるが、現在そのサイトは見ることができない。どうやら警察の検閲にあったらしい。

なんてこった！　ボクのベッドの下に潜んでいる奴は、そんな厄介な代物なのか！

考えれば考えるほど、絶望的なことしか頭に浮かばない。いつまでこうしていればいいのか、物音ひとつ建てることもできない。ヤツから身を守る術はないのか？周りを見渡しても凶暴な敵に退行できそうなものは何一つ見当たらない。たとえば髪をセットするスプレーや殺虫スプレーとライターがあれば、火炎放射器ができる。だが、あいにく自分は２年ほど前にタバコをやめてライターは全て処分してしまった。それに最近のスプレーは火がつかないものが多い。度数の高いウイスキーがあればたいまつのようなものが作れるかもしれないが、せいぜい冷蔵庫にビール――いや、発泡酒があるくらいで、強く引火するようなものはない。ガスが引いてあればそれも武器にできるかもしれないが、我が家はあいにくＩＨだ。火元になるようなものはない。

携帯で助けを呼ぼうにも畜生！なんでこんなときに！携帯は机の上で充電コードに繋がってる。わずか数メートルの距離なのにたどり着ける気がしない。どうする？どうすればボクは……ボクは助かるんだ！

大声で助けを呼ぶ――いや、だめだ。ボクは部屋を選ぶとき、隣近所の音が聞こえない物件を第一の条件にしたんだ。そう、前に済んでいた木造のアパートは隣に住んでいるバカカップルのおかげでろくに眠れやしなかったんだ。だから、だからこのマンションに引っ越してきたというのに！

そうだ！もしもあのクソみたいなアパートだったら、部屋も狭かったから携帯もすぐに手に取れたし、助けも呼べた。火も使えた。畜生！なんでこんなことに！なんでこんなことになるんだよ！

ボクは震えながら、ベッドの上で泣き出した。多分この部屋に引っ越してきて最初に流した涙。そして最後になるかもしれない涙だ。そう思うと何もかもが恨めしく、そして死という普段とても遠く現実感のなかったものに対して、正面から受け止めざるを得なくなったとき、不思議と心は落ち着きを取り戻し、思い出すことのなかった自分の家族や親戚、昔付き合っていた彼女、小学生のとき良く遊んだ３人組。唯一ボクが尊敬できた中学２年の時の担任の先生。懐かしい人たちに不義理をしていた自分を責めながらも、感謝の気持ちだけが心の闇から浮き上がってくるのを感じた。

みんな、ありがとう。ボクは、最後のチャンスにかけてみる。

ついにボクは決心をした。このまま死を黙って受け入れるよりかは、最後まで生きる希望を捨てたくない。生き残って、ボクは不義理をしていたみんなに会いに行くんだ。絶対に死なない。絶対に死ぬもんか。諦めるもんか。今までボクは行き詰まるとすぐに誰かのせいにしてきた。

でも、今は自分ひとりで戦わなければならないんだ。たとえ死んだとしても、最後まで抵抗した後を残したい。ボクが生きていた証。小さな小さな存在だけど、それでも一生懸命に生きようとした証を残して死にたい――いやっ！　絶対に生き残るんだ！

　ボクはベッドの上に立ち上がり、部屋の入り口まで一足飛びにジャンプする決心をした。薄手のタオルケットを首に巻き、急所を隠す。枕を左手に持ち、背後から襲われたときに備えて盾の代わりにする。扉まで４メートル。どうということはない。一気に飛べる。ヤツのスピードがどんなものなのか、ヤツの俊敏性がどんなものなのか、ヤツの攻撃性がどんなものなのか、そんなことは関係ない。

　全ては　ボク自身の問題だ。

　足元を確認する。シーツが足に絡んだり、踏み切った足が滑らないようによける。シーツを小さく手早くたたみ、ひも状に、その端に結び目を作り大きな釣り糸に餌をつけたような形にする。ドアと反対側に投げてヤツの注意を引く。勝負は一瞬。ヤツがこの餌に食いついてくれれば少しばかり時間が稼げる。生き残るための、コンマ何秒の時間稼ぎ――そう、今ボクはそうまでして生き残りたい。

　全神経を集中させる。

　呼吸を整える。

　静寂を飲み込む。

　空気は読むものじゃない――飲み込むものだ！

　ふっ、と一呼吸、肺にしっかりと酸素を入れ、ボクは……

　シーツを投げた。

　シュゥーーーーー　音が聞こえる。

　右、左と足をしっかりと踏み出し、ベッドの端っこを思いっきり踏み切る。

　ギィィイーーーー　ベッドのきしむ音。

　ふっ　部屋の空気を巻き上げながらボクは一瞬重力に逆らい、そして部屋に敷き詰められたカ

ーペットの上に素足が着地する。目の前に部屋のドア、手を伸ばせばドアノブまですぐの位置。右手を伸ばす。

　シュゥーーーーー　音が聞こえる。部屋の隅で何かが蠢く気配。ヤツは餌に釣られた。

　ガチャ　ドアノブに手をかけまわすと同時に内側に引っ張る。思いのほか空気の抵抗がある。自分のイメージよりも一瞬ドアを開けるタイミングが遅くなり、自分の勢いを止められず、あけようとしたドアにぶつかりそうになる。

　キィィシュゥウウウーーー　威嚇音の方向がボクの背中に向けられているのがわかる。全身の毛が逆立つのがわかる。

　ガサガサ　右手をドアに引っ掛けながら、右の肩から部屋の外にでる。肩、頭、右手、腰が部屋の外に出る。

　シュゥーーーーー　音が迫ってくる。左足に強烈な殺気を感じる。構わず身体をドアの外に逃がす。枕を持った左手を立てのようにドアの方に向けながらドアを閉める。

　シャァアアーーー　床を這うヘビのようなトカゲのような生き物がすぐそこまで迫っている。

　ドアを閉めろ！　クソッ！　空気抵抗がこんなに強いなんて！　間に合うのか！

　バタンッ！　ガチャッ！　ドォーンッ！

　三つの音がほぼ同時になる。

　クゥシャァアアアーーー！　獲物を逃し、怒り狂うヤツの叫び。

　ハァ、ハァ、ハハッ、クゥックゥックゥッ……

　激しい息遣いに混じり、笑い声ともなぎ声ともつかない、死への恐怖を克服した歓喜の嗚咽が喉を伝わって口から漏れる。涙が止まらない。手足が震えている。大丈夫。もう大丈夫だ。

　ヤツはすぐにおとなしくなった。しかし一刻たりともここにはいたくない。早くこの部屋を出て助けを呼ばなければ……

　ボクは靴を履き、玄関のカギを開けて外へ飛び出した。

「こ、これは……」
　ボクのマンションは１０階建ての１階の角部屋だ。マンションの廊下の突き当たりが玄関になっている。そこから非常階段からすぐに駐輪場へ出れるし、通常は廊下をまっすぐ歩いてマンションの表玄関に出る。その廊下は、見るも無残な光景になっていた。

　血だ。どこかで誰かの叫び声が聞こえる。何かが水溜りの上をのた打ち回るような音と主に、ヘビが威嚇をするような音、獣が餌にむしゃぶりつく音。骨が砕ける音。

　ヤツラは全てを食いつくそうとっしてる。

　諦めるものか！　ここまで来て諦めるものか！　絶対に生き延びてみせるさ！

　気がつくとボクは無我夢中で走り出していた。肺の中の空気がある限り、体中に血液が酸素を運べる限り……

　そう、ボクは会いに行くんだ。

　ボクは、生きてあなたに会いに行くんだ。

　たとえ、左腕を失っても……

　たとえ、何を失っても……

　ボクは　もう　諦めはしない。

おわり

# もしもカサカサがＵＭＡだったら　前編

　お風呂。入浴中に怖いことを想像してしまうと、どうしようもなく後悔する。

「なんでこんな怖いこと想像しちゃったんだ」

　頭を洗う時は、大概、人は目を瞑る。当たり前だけど、実は眠るという行為意外で、長時間目を開けないでいることは日常生活で少ないはず。どうだろうか？僕は怖がりだから、目を瞑っている時間をなるべく短くするための努力をする。みんなも気付いていると思うけど、目を瞑っている間は、何も見えない。そして、その分別の感覚、聴覚だったり、触覚だったり、嗅覚もそうかもしれない。あるいはもっと別の特別な感覚――視線や気配を感じる感覚が研ぎ澄まされる。

　それは別に特別なことじゃない。僕等の遺伝子は、原始の時代から現代まで、たゆまなく引き継がれているとされている――諸説あるとしても、それはこの際問題じゃない。僕ら人間は捕食する側のよな錯覚でいるけど、原始においては、他の野生動物の餌になることはとても多かったんじゃないかな？だから、身を守るために、そういった自分を襲おうとする気配に敏感になる。いや、敏感になれたものだけが生き残れたんだ。だから、元来、僕らの遺伝子には、そういった能力が先天的に備わっている。

　普段使われていない能力は眠っている。しかし、それを呼び起こすのは、そういった、捕食されるかもしれないという恐怖だったり、目が見えないといった窮地だったりする。それはわかるよね。だからなんだ。だからシャワーを浴びているとき、あなたはどうしても誰かの視線を感じてしまう。それは気のせい。そう気配のせいだって、そういうお話。

　疲れた。できることなら、このままベッドに横になりたいところだが、明日も朝から慌しい。今のうちにシャワーを浴びておかないと、いつ風呂に入れるかわからない。藤崎信二は、あるゲーム開発のプロジェクトのメインプログラマーである。このプロジェクトにはもともと乗り気ではなかった。相次ぐクライアントからの仕様変更、スタッフも疲弊し、現場は一時期崩壊状態になっていた。そのたびに藤崎は持ち前のリーダーシップを発揮し、苦難を乗り越えてきた。

　藤崎は大学に入学するまではサッカーをやっていた。プロを目指すといったこともなかったが、それでも試合では常にレギュラーを張っていた不動の１０番だった。藤崎がサッカーを始めたきっかけ。それは小学生の頃に兄と良く遊んだサッカーゲームの影響が大きかった。しかし、自分がプロで通用するレベルかどうかについては懐疑的だった。そして、何より藤崎はサッカー

よりもサッカーゲームが好きだということに気付いた。そして彼は大学に進学すると、コンピューターを独学で学び、ゲーム開発会社に就職することができた。今回のプロジェクトが終わったあと
藤崎は念願のサッカーゲームの開発プロジェクトに参加する事が決まっていた。そのためにも、この仕事はしっかりと終わらせたい。そして、もう終わりは見えている。今日は３日ぶりに自分の部屋に帰ってきた。

　独身で２８歳。交際している女性はいない。そんな暇はなかった。部屋はお世辞にもきれいだとはいえない。サッカー関係雑誌やＤＶＤ、そしてお気に入りのヨーロッパのクラブチームのユニフォーム、日本代表のユニフォームが壁一面に飾ってある。興味がない人間にとってはゴミの山かもしれないが、藤崎と藤崎と趣味を共有する仲間にとっては、最高の部屋だった。しかし、そんな部屋に、変化が現れたのは、１月ほど前くらいからだ。

　藤崎が寝ていたり、或いは深夜のサッカー中継を夢中で見ているとき、ふと、視線のようなもの、或いは気配を感じる。そのうちの数回はあの黒くて光る嫌な虫だった。子供の頃は平気だったものが、大人にななったとたんに急に触れなくなるし、スリッパや新聞紙で叩くのも後始末が嫌なので躊躇するようになる。殺虫剤での駆除、死骸は掃除機で吸い取るといった具合である。しかし、何度かは音の方向がいささか不自然だと感じていた。カサカサと音がするからには、あの黒く光る嫌な虫なら、ビニールや紙の上を歩くことによって、カサカサと音がするはずである。つまりは床より高いところで音がするとすれば、せいぜいがテーブルの上ぐらいのものである。キッチンにはカサカサと音がするようなものは置いていないし、むしろ音は天井に近いところでしているような気がしたのである。おかしいと思いながらも、音の反響や、それこそ気のせい、疲れているせいだと理由をつけて基本的には無視していた。別にそれで困ることはなかったし、今後も困ることはないと考えていた。

　いったんはベッドに横になりながら、藤崎は強い精神力でプラスチック製の収納箱から着替えとタオルを取り出し、浴室へと向かった。ダイニングキッチンから扉ひとつ隔てて洗面所があり、洗濯機がおいてある。脱いだ服を洗濯機に放り込み、浴室の扉を開ける。ふと、浴室の反対側。トイレの中からカサカサと言う音が聞こえたような気がした。疲れていたせいなのか、藤崎は反射的にトイレの扉を開けた。普通なら少し躊躇したかもしれないし、慎重になっていたはずだが、このときの藤崎にはそんな余裕はなかった。トイレには窓がない。当然に電気をつけなければ真っ暗だが、洗面所の灯りで中を見渡すのには十分だった。たとえ、黒く光る嫌な虫がそこにいようとも藤崎にはそれを駆除するつもりはなかった。その程度にしか考えていなかった。

「なんだ、なんかいるのか？」

　がらんとしたトイレ。何もいるはずもない。あたりまえだ。そのままトイレの扉を閉める。閉

めようとしたその瞬間、今度は藤崎の頭の上でカサカサという音が聞こえた気がした。別に何かが居るという気配はないが、一瞬なにかの羽音ではないかと思い、思わず少しだけ身をかがめた。

「へんだなぁ」

　しかし、天井には当たり前のように裸の電灯があるだけである。虫の類であれば灯りの周りに集まる習性があるが、そういったものは目に入らない。不気味というよりは不快感、そして自分が相当に疲れているに違いないという、あきらめとも嫌悪感ともいえない負の感情が藤崎を憂鬱にさせた。

「おいおい、大丈夫か？俺」

　気を取り直して、藤崎は浴室の電気のスイッチのすぐ横にある給湯器の操作パネルのボタンを押し、いつもより少し熱めの温度設定にした。

「いったん目を覚ますか。ぬるい温度だとそのまま寝ちゃうかもしれないからな」

　いつもは４１度くらいなのだが、４４度に設定した。少し熱いがやけどするほどではないし、目を覚ますにはちょうどいい。浴室に入りドアを閉める瞬間にまた、あのカサカサという音が聞こえたような気がしたが、藤崎は無視することにした。きっと疲れて寝ぼけているだけなのだ。藤崎にはそれだけの心当たりがある。ここ数日は本当に疲れた。

　蛇口をひねり、シャワーから冷たい水が出る。ボッっという湯沸かし器が点火する音がする。お湯になるまで３～５秒。勢いよくシャワーの網の目から水が噴出する。水圧でシャワーを持つ手が押される。冷たい水が足にかかる。それはそれで心地いい。冷たい水から一気に熱いお湯になる。一瞬温度が高すぎたかと思ったが、躊躇せずに一気に熱いシャワーを体にかける。

「ふーっ」

　思わず悲鳴のような声を上げる。気持ちがいい。一気に目が覚める感じだ。浴室に湯気が立ち込める。腕、足、お腹、肩とシャワーを浴びかける。五感が刺激され、それまでボーっとしていた感覚が少しずつ鋭さを増してくる。目が覚めた。

「ふーっ」

　一気に頭にシャワーをかけ、そのままシャワーを壁にかけて顔を両手で洗う。気持ちがいい。

床においてあるトニック入りのシャンプーを少し多めに手に取り、頭を両手で激しくかきむしる。一気に泡が立つと同時に、トニックのすーすーとした感じがさらに脳を活性化させる。泡は頭から顔中に流れ落ちてくる。それもまた心地いい。が、ふと、おかしな感覚にとらわれる。そのきっかけはやはり、あのカサカサという音だった。

　おかしい、視線を感じる。それもまるで蛇に睨まれているかのような嫌な感じ。子供のころに原っぱで虫取りをしているときに、カサカサ、カサカサ、という音とともに草群れが揺れて、その揺れる波がまっすぐこちらに向かってすべるように押し寄せてきた。見ると足元に一匹の蛇。マムシだ。やられる。自分は毒蛇に噛まれる。死んでしまうかもしれない。

　あのときは、身動きをしないようにじっとして、そして蛇を睨みつけたんだ。そしたら蛇は方向を変えて、来たほうに引き返していった。そのあと、泣きながら家に帰ったっけ。あのときの感覚に似ている。なんだ、やはりなにかいるのか？

　藤崎は考えた。ここ最近のカサカサという物音、あれはもしかしたら本当に何か得体の知れない生き物がいたのかもしれない。そして自分を捕食しようと虎視眈々と狙っていたのか、或いは、自らの成長を待っていたのか。いままでこんなに執拗に付回すようなことはなかった。もしかしたらヤツは、この部屋に侵入してからというもの、ダニや蚊やハエ、そしてあの黒く光る嫌な虫を捕食して大きくなった。そして今、自分を捕食しようとしているのではないか。いや、捕食以外にも可能性はある。もしかしたら……そう、たとえばアシナガバチや一部の昆虫は、毛虫に自分の卵を産みつけて、幼虫を他の生き物に寄生させて育てるやつもいる。裸になったこのタイミングで、ヤツはそれを狙っているのではないか。

　藤崎は常に自分の立てた仮説を同時に反証し、もっとも可能性のあることと、最大リスクの両方を導き出し、ことの問題にあたることにしていた。今回、自分の置かれている立場、ひとつは自分はあまりにも疲れすぎ、神経が参って、幻聴に惑わされ、おかしな仮設を立てている可能性がもっとも高い。しかし、これがもし、本当に事実だとしたら、自分は生命の危機に瀕しているのかもしれない。

　幻聴なら別にそれでいい。ともかく今は最大のリスクを回避する方法をなるべく早く考えよう。まず、ヤツがもし、自分に危害を加えようとしているとする。こちらは今、多分ヤツに背を向けて、しかも丸裸で目が見えないという状況だ。ヤツは最大限にこの状況を利用しようと考えているに違いない。すぐに攻撃を仕掛けてこなかったのは、きっとこのシャワーのせいだろう。ヤツは多分、シャワーに戸惑っているのではないか。だとすれば、今こうしてシャワーの中はセイフティゾーンということになるのか。しかし、体全部が入っているわけではないし、シャワーが自分にとってたいした危害を加えるものではないと判断したら、すぐにでも攻撃に移るだろう。その危険性は……高い。

　ならばどうする。ここから逃げるか？　だがしかし、ヤツがどんな姿をしているかもわからない。ここでヤツから逃げたとして、そのあとどうする。むしろここは、ヤツを撃退することを考えたほうが得策ではないか。どの道リスクはあるのだ。問題は、どうやって駆除するかだが……

　シャンプーの泡で目が見えない状況の中で、神経がどんどん研ぎ澄まされていく。身の危険を感じたことで、藤崎の五感は最大限まで高められ、自分を狙う謎の生き物が、どのあたりにいるのか、なんとなくわかるような気がしてきた。あとは武器だ。おそらくヤツは普通の人間の目には見えない、光学迷彩のような機能を持っているのではないか。その能力は、一般に地球上の生物では存在しない。カメレオンや一部の魚、昆虫は周りの景色に自分の模様を合わせたりすることで、敵の目を欺き身を守るし、捕食すべき敵に近づく。やつの能力は防衛のためなのか、それとも攻撃のためなのか。

　攻撃だ。しかし、攻撃力が高くないことを補うための能力。カサカサと音を立てなければ移動できない。そして、近くまで来て、姿を消し、相手の隙を窺う。一瞬で相手に致命傷を負わせることはできない。きっと針のような触手で一瞬のうちに相手を刺すのか。その部位は生殖器官となっていて、卵を植えつける。考えるだけでもぞっとする。問題は自分のどの部位を狙っているのかということ。音は常に上の方から聞こえてきた。まさか頭か。ということは、シャンプーが邪魔で今は攻撃を仕掛けてきていないのかもしれない。或いはもう少ししたか、いずれにしても脳に近いところを狙っている。あまり想像したくはないが、目や耳、鼻の穴、そして口が危険だ。

　目か。目の可能性が一番高い。つまり目を開ける瞬間を狙っていやがる。そうだ。そうに違いない。だとすれば……

　藤崎はプランを立てた。反撃を試みるプランを。

パート２につづく

# もしもカサカサがＵＭＡだったら　後編

　意識を集中し、計画の第一段階を実行する。この作業がもっとも困難であり、ほかに手立てが見つからない。こちらの仮設が間違っているとしたなら、かなり危険だ。だが不思議と体は落ち着いている。鼓動に乱れはない。試合前の心地のよい緊張感に似ている。まったく。命に関わるかもしれないというのに、案外と人間は肝が据わるとなんでもできる。なによりも今やろうとしていることは、滑稽で荒唐無稽。とても人に話して信じてはもらえそうにない話である。もしこれが成功し、無事に風呂場を出ることが出来たら、そうだな。サッカーゲームを作ったあとに、怪物退治のゲームでも作ってみるか。

　覚悟は決まった。プランはこうである。まず相手の気配を確認し、その位置を特定すること。そこに向けてシャワーを少しかけてみる。それでヤツの気配が位置を変えるかどうか確認する。それでヤツがシャワーを嫌がること、そしてより正確な位置が確認できる。次は勝負だ。ヤツのいる場所に向けて目を瞑ったままシャワーを浴びせかける。ある程度の大きさのものにシャワーがあたれば、水圧で手ごたえがわかるはずだ。或いは何らかの異音が聞こえるはず。その場所に向けてシャワーを浴びせ続けながら、視界を確保する。ヤツが見えるかどうかはわからないが、視界を確保できたら、床に置いてある桶をやつにかぶせて閉じ込める。それを足で押さえ、給湯器の操作パネルで温度を最高に上げる。確か７０度まで上がるはず。大概の生き物はその温度のお湯を浴びせかけられて無事ではすまないだろう。温度を上げたら、熱湯を桶の中のヤツに浴びせかけて駆除する。

　頭の中で何度も反芻する。大丈夫、そしてこれしかない。まずは視界を確保する準備、顔の泡を出来るだけ洗い流す。決して目を開けない。大丈夫、簡単だ。問題はそれまでヤツがおとなしくしているかどうかだ。集中しろ、意識をヤツに集中するんだ。

　不思議なもので、こういうときに似たようなシチュエーションが記憶のインディクスに引っかかり思い起こされる。あれは高校２年の秋、地区大会で１対１で迎えた後半ロスタイム。ＰＫ戦はどうしてもやりたくない。そんな場面で得た、ゴール前でのフリーキックのチャンス。直接狙うか、トリックプレイでいったん右サイドに出すか。相手のキーパーは当たっている。まともに行っては止められる可能性が高い。ゴール左隅にカーブをかけて直接決める自信はあった。しかし、相手ゴールキーパーもこちらの意図は見抜いている気がした。ギャンブル。思い切って壁の下を狙うか？いや、確率はかなり下がるだろう。どうする。キックフェイント。一瞬ゴール右墨を狙うようなそぶりをして、キックを止める。壁の位置に文句をつける。やはりそうだ。キ

ーパーはゴール右墨をケアーして重心が動いた。ならば……

　藤崎は相手の気配を感じた位置よりも、少しだけ上をめがけて手に取ったシャワーを向けた。一瞬の判断だった。手ごたえがある。ちょうどタオルにシャワーを浴びせかけたと同じような手ごたえとともに、キィィィイイ！　というおぞましい泣き声とも悲鳴ともいえない――しかし、その音の大きさは実際に耳で聞いたというよりは、肌で感じたような機械的な高い周波数の音だった。

　藤崎はプランどおりに視界を確保する。浴室の扉のすぐ前に１０センチほどの白い影が見えたような気がした。まだ、お湯が目に入ってはっきりとは見えない。足元にあった風呂桶を左手で持つとそれをひっくり返し、その異形な生き物に多いかぶせる。カサカサ、カサカサ。中で何かがこすれるような音がする。だがそれは極めて非力だった。桶をひっくり返して出てくるような力はないように思えた。それでも藤崎は油断することなく、さかさまになった桶に右足を乗せ、給湯器の操作パネルの温度設定ボタンを連打する。デジタルの数字が５０度までは一度ずつあがり、５０度からは５度ずつあがる。７０という数字が表示されたとき、足元のカサカサと言う音はさらに激しくなっていた。

　どうする。プランどおりにやるか？　桶を空けた瞬間に逃げ出すんじゃないか？　さっきも姿はちゃんと見えてないし……

　シャワーの水圧は先ほどの半分以下になっている。もしもヤツが高温に対して耐性がある場合、かなりまずいことになるかもしれない。そう、あの時も、あのフリーキックもコースを変えたことでキックの勢いは落ちてしまったのだ。相手の意表をついても、対応されてしまってはどうしようもない。キーパーはいったん右にかけた重心を必死で逆サイドに戻そうとする。ボールは見事に壁の下を通ったが、ボールの行方は藤崎の位置からは壁が邪魔で見えない。コースは甘くなかったか？

　熱湯によってよく室内は湯気で視界がよく見えなくなっている。大丈夫。絶対にいける！

　藤崎はあの試合のロスタイムと同じように、自らの決断を信じて行動に移した。桶から体をできるだけ離し、右足で桶を蹴っ飛ばし、すかさずその場所に向けて熱湯のシャワーを浴びせかける。

　ピピィィィィィ！

　審判の笛はゴールを宣言した。ゴール前、フィールドに横たわるゴールキーパー。ひざから崩れ落ちる相手ディフェンダー。歓喜に沸き立つ応援団と、手洗い見方の祝福……これだからサ

ッカーは面白い。

　風呂場の床には白い蛇の抜け殻のようなものがあるだけだったが、それもどろどろと溶けて排水溝へと流れていってしまった。念入りに排水溝に熱湯をかけ、最後に温度を下げて勢いよくシャワーを浴びせかけてすべて排水に流してしまった。あれが一体なんだったのか、藤崎には検討も着かなかった。その日以来、カサカサと言う音は聞こえなくなった。藤崎はその日のうちにバルサンを炊き、カサカサと音をさせる黒く光る嫌な虫を駆除したからである。

　それから３年後に発売されたサッカーゲームの開発に藤崎は携わった。藤崎が提案した新システム。ゴール前のフリーキックの駆け引きを再現したシステムは非常に高い評価を得て、ゲームは爆発的に売れた。そして藤崎は新たなゲーム開発の企画を立ち上げた。

　そのタイトルは『もしもＵＭＡが部屋にいたら』というものだった。

おわり

# ゆめのつづき

ゆめのつづき

　僕はとても怖がりな子供だったと思う。夜怖くてトイレにいけず、もらしてしまったこともある。カレンダーの女優さんの視線が気になるからと言って、カレンダーの位置を親に言って変えさせたのは、たしか小学５年生の頃だった。そのくせに、怖い話には興味があった。とりわけ古い怪談話がとても好きだった。

　雪女、番町皿屋敷、おいてけ堀、やまんば。

　そして、そんな話を聞いた夜は、決まって眠れないのだ。いや、眠れなかったときのことしか覚えてないから、そう思えるだけなのかもしれない。

　二人の子を持つ親となったいま、どういうわけか自分で怖い話を書くようになった。いくつかのきっかけ、いくつかの偶然がそうさせたのだが、その中の一つに、こんな出来事があった。

　僕は、ゾンビが嫌いだ。

　感染者よりもリビングデッドがきらい。でも、どちらもきらいにかわりはない。あの映画の存在を知ってからというもの、僕は定期的にゾンビに襲われる夢男見るようになった。あの映画というのはジョージ・Ａ・ロメロの最初のゾンビ『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』である。しかし僕はこの作品を最初から最後まで見たことがない。僕が小学生の頃オカルトブームがあって、そのときに各局のテレビ番組は恐怖映画の特集などを組んで紹介していた。そのなかに出てくるフランケンシュタインやドラキュラの話にわくわくさせられながらも、ゾンビの話だけは怖くて仕方がなかった。

　そしてそれは１９７９年の『ゾンビ』の日本公開で決定的なものになる。

　僕の夢はパターンが決まっている。ゾンビが現れ逃げ惑い、ようやく隠れる場所、それはトイレだったり、物置だったりするんだけど、そこの扉の鍵が壊れていてきちんと閉められない。仕方がなく手でドアノブや取っ手を押さえるわけなんだけれども、最後には扉が壊され、あるいは気を抜いた隙にゾンビの侵入を許し、ゾンビたちに囲まれてしまう。

　そこで目が覚める。本当に嫌な汗をびっしょりかいて目が覚めるのである。

　だから、というわけでもないのだが、子供の目の触れるところにゾンビはない。僕がトマトが嫌いで、食卓にトマトが上がらないのと同じように、ゾンビはないのである。

　ところが、ある夜のこと……

「パパァ、パパァ……」
　気がつくと娘が布団から起き上がり、真っ赤に目にして泣いている。
「どうした？　どこか、痛いところでもあるの？」
「ううん……こわいの。こわいゆめを、みたの……」

「怖い夢？　どんな夢だい？　話してごらん？」
　そういいながら僕は時計を見た――２時１０分を回っていた。

「あー、ちょっと待ってて、牛乳飲むかい？」
　娘はこっくりとうなずいた。

　台所にいく。電気はつけない。子供たちがいつも使っているプラスチック製のカップ――娘がキャラクターもののピンク「はつね」と黒い油性のペンで書いたもので、弟のはもちろん青だ。ところがどこに置いたのか娘のカップを見つけることができず、しかたなく自分がいつも使っているマグカップにミルクを注ぎ込み、寝室に戻った。

「ほら、飲んで」
　娘は、差し出されたカップを両手で大事そうに持つと、少し牛乳をクチに含み、それを飲み込むと、もう一度マグカップにクチをつけた。

　ゴク、ゴク、ゴク

　半分くらいを一気に飲み干すと、もういらないという風に私にマグカップを差し出した。
「もういいのかい？」
「うん」

　どうやら少し落ち着いたようだ。

「話してごらん、どんな夢だったか、わかるところだけでいいから。悪い夢はね、人に話すと、もうその日は見なくなるんだよ」
　私は嘘をついた。が、同じ夢を見る確率などそれほどないと思った。

少なくとも大人になってからは夢の続きなど見た覚えがない。子供のころは、どうだったのか思い出せないくらいなのだから、やはり確率は少ない。ともかく根拠などなくていい。うまくいけばそれでよし、うまくいかなければ、その時は、その時だ。

そして娘はたどたどしく、こわいゆめの話を始めた。それはこのような内容だった。

今住んでいるところの隣駅――東京メトロ東西線の葛西あたりから怖い夢は始まる。

そこはそれほど頻繁に遊びにいくところではない。最寄り駅の西葛西駅から葛西駅の間には、少し大きめの公園やせんべいを焼いている店、それに駄菓子や古本屋などが点在している。なにかの用事につけて――或いは駄菓子屋に行くことを目的として、家族で散歩がてらに歩いていくことがある。そのあたりは家の周りがマンションだらけなのに対して、どちらかといえば閑静な住宅街といったところ。

娘はそこで街の異変に気付く。町のあちこちにゾンビがうろうろしているのだ。娘は早く家に帰らなければと、一生懸命に走る。道はあまりよく覚えていないけど、それでもいつも立ち寄る店を目印に、ゾンビを避けながら、時に物陰に隠れてゾンビをやり過ごしながら逃げる。西葛西の駅の近くまで来たところで、娘は恐ろしい光景に出会う。

それは、ゾンビになっていない普通のタクシーの運転手が、刃物（たぶん大きな包丁）を片手に、車を走らせながらゾンビであろうが、人間だろうが近づいてくる者を次々と切りつけていく姿を目撃したのである。

早く家に帰らないと殺される。ゾンビだけじゃない。みんなおかしくなってる。娘にとってはゾンビよりもその運転手が怖かったそうだ。

やっとの思いで西葛西駅から自分の家にたどり着く。だが、そこで待っていたのは……

パパはすでにゾンビとなり「ゆらゆら」していたそうだ。

ママは……寝ている。

でも、起きるとゾンビになってしまうと思い、起こさないようにするらしい。

家の周りはゾンビで囲まれ、ドアをドンドン叩いている。

　すると弟が「誰か来た！」といって玄関のドアを開けようとする。

「開けちゃダメ！」

　娘は止めようとするが弟は笑いながらドアのカギを開け、玄関を開けてしまう。

　家を取り囲んでいたゾンビはいっせいになだれ込みんできて……

　そこで目が覚めたそうだ。

「そうかい。そんな怖いことがあったのかい？」
「うん……」
「でも、もう大丈夫。パパがはつねの夢の話を聞いたから、今度はパパのところにゾンビがやってくるよ」
「パパは、怖くないの？」
「そりゃ、こわいさ、でもね、パパはもう、何年もゾンビと戦ってるんだ。だから大丈夫なんだよ」
「ふーん……そうなの？」
「あー、だから、もう寝なさい。もしまた怖い夢を見そうだったら、パパが助けてくれると思えば、きっと大丈夫だよ」

「うん、わかった」
　それから３分もしないうちに娘は深い眠りについた。

　そう、パパは、もう、何十年も戦っているんだよ。

　一度も勝ったことは、ないんだけどね。

おわり

# 風邪

風邪

　喉が痛い、身体がだるい。

　朝、ベッドから目覚めると、明らかに体調がおかしい。台所まで行き、冷蔵庫を開ける。牛乳パックを手に取り、そのまま喉に流し込む。

「まじー」

　食欲がない。めまいがする。
「あー、どーする、今日は、まずいだろう。行かないわけには……」
　冷蔵庫の扉ーー野菜の形を模したマグネットで貼り付けられた小さなカレンダーには、９月６日月曜のところに赤いペンで丸が書かれている。

「うーん、行くしかないか」
　時計は朝の１１時。ここから渋谷までは１時間ほどで着く。今日は定期集会の日。だが、仲間に風邪を移したら大変だ。

「えーと、マスク、マスクは……おー、これこれ」
　着古して右の後ろのポケットに穴の開いたジーンズをはき、シャツを着る。洗面台の鏡に映る自分の顔を見て驚く。

「おいおい、こいつはひでーな。」
　洗面台の鏡に写った男の顔は赤くはれ上がり、赤い斑点が無数に浮き上がっている。

「こりゃ、だめだなぁ」

　男は身なりを整えるのをやめて、テーブルの上に置いた携帯電話を手に取ると、『本部』と書かれたアドレスに電話をかけた。

「あー、オレだ、識別番号Ｖ００３８　あー、そうだ」
「あー、ちょっと風邪をこじらせちまって、そのー、どーにも、ダメっぽい」

　電話の相手は女性オペレーターらしかった。

「識別番号Ｖ００３８　居住地区：品川区　利用地球人名：スズキ　トモヤスですね」

「今朝起きたら、その一、あれだ、風邪か、ちょっぴり厄介なものらしくて、たぶんこのままだと長くない……死んでしまうかもしれない」
　男の顔は赤くただれ、血が滲み出てきている。

「かしこまりました。それでは、別のボディーを用意いたします。データを確認します。性別：男性　年齢：２０歳から３５歳　身長１６５センチ以上　体重６０キロから８０キロ　ご希望のサイズ等は、以前と変更ありませんか？」

「あー、ただ……そーだな、もう少し頑丈なボディーがいいな」
「大変申し訳ございません。最近は状態のよいものが入手できませんので、なかなかご希望には添えないかと……」

「うーん、例の協定が結ばれてから、生きた人間への寄生は禁止されたからなぁ」

「今からですと、３０分以内でお届けできると思います」
「あー、わかったわかった、で、今日の集会なんだが……」
「こちらから関係各位に連絡を入れておきます。重要事項は、後ほど連絡が行くかと思いますので、そちらで待機願います」
「あー、御手数かけるね」

「では、後ほど係りの者がうかがいますので、それまでにもし、今お使いのボディーが持たないようでしたら、今からご案内する番号におかけください」
「了解、じゃ、あとよろしく」

　男は電話番号を控えると、玄関のカギを開けて、寝室のベッドに横たわった。
「まったく、不便になりやがった。まぁ、共存共栄できる最良の道ではあるが、巷じゃ、勝手やってる連中も、結構いるらしいじゃんかよ、めんどくせー」

　２０分後、サングラスをかけた二人組みの男が鍵の開いたドアを開け、依頼主の寝室を空けると、体中から血を流した男がベッドに横たわっていた。依頼主の変わり果てたボディーだ。

「Ｖ００３８様ですか？身体換装サービスです」
「おー、きたかぁー、とっとと、すまそーぜー、もうあと１時間ももたねぇよ」
「こちらの商品になります。」
　そういうと１人の男が連れの男のサングラスをはずした。その男は、うつろで目の焦点があっ

ていない。
「１週間前、熱中症で倒れ、そのまま息を引き取った　シマザキ　トシオ　という男です」
「熱中症？で、リペアの方は完璧なのか？」
「それはもちろん」
「ちぃっ！本当かよ、このボディーだって、原因不明の高熱で倒れたとか、こいつ、なんかやばい病気にかかってたんじゃねーのか？」
「それにつきましては、誠に申し訳ございません。確かに、とある軍事施設にて、研究されていた細菌兵器の実験中に事故がございまして、まぁ、身元不明の処理としては、かなりよい品だったのですが、検査段階で発見されなかったウイルスがあったようでございまして、実は何軒か同じ障害がでております」
「おいおい、本当に大丈夫なのか？それで、オレへの影響はないんだろうな」
「お客様の安全は、当社の最新の技術によって保証されております。ご安心を」
「まぁ、まかせるしかないからよー、早いところすまそうぜ」

男はベッドから起き上がり、シマザキ　トシオに抱きついた
スズキ　トモヤスの口から識別番号Ｖ００３８が触手を伸ばし、シマザキ　トシオの口の中へと入っていく。

「おー、こいつはなかなかしっかりしてる」
　シマザキ　トシオは言った。まだ、目の焦点はあっていない。右目は右を、左目は左を見ているようだ。
「では、お客様、シマザキ　トシオの家までお送りします」

「あー、こいつは、このまま、放置しておいていいのか」
「はい、そちらはのちほど処理班が参ります、では参りましょう」

　男たちが出て行った後、識別番号Ｖ００３８が置き去りにしたスズキ　トモヤスは、やっと一人になれた。彼の記憶が最後に途絶えたのは、研究所での事故。
『試験体』が暴れだし、一人の研究員が犠牲になった。

「主任、こいつは、まずいぞ。」
「これは……助かりませんね」
「仕方がない。研究に事故はつき物だ。特にこのような研究には……」
「どうします所長。おそらく症状が発症するまで、６時間か、或いは５時間か……」
「死体を欲しがっている連中がいる。奴らなら、なんとかするだろう」
「死体を欲しがっているって、まさか？」
「そうだ。この場合うってつけだとは思わないか？」

「まぁ、ある意味、彼も生きられるというか……いや、しかし、どんな影響があるかわかりませんよ」
「彼らの能力は半端じゃない。現に末期がんや凶悪な伝染病の患者を何人も救っている」
「救ってるって言ったて、あれは生きているとは」
「どうしてだ。寄生というのは別に特別なことじゃない。人間、誰だって――」
「そりゃ、わかってますけど、それとこれとでは――」
「もういい。早く連絡を取りたまえ、事故があったこと、今の時期、上層部に知られたくないのは、お前もわかるだろう」

　スズキ　トモヤスは朦朧とする意識の中で、所長と主任の話し声を聞いていた。
　ひどく気分が悪い。
　自分は死ぬ。
　なんせ、このウイルスには治療法がない。それは自分が一番よくわかっている。
　でも、所長は何を言ってるんだろう？
　死体を欲しがっている？
　彼ら？
　寄生？

　まぁ、生きながらえたとしても、二度とここから出ることは……僕は、感染者……

　ここでスズキ　トモヤスの意識は途切れてしまった。

　次に気がついたとき、スズキ　トモヤスは一人、ベッドの上に横たわっていた。
　変わり果てた姿になって。

「あー、やっと一人になれたんだ。今までずっと、ボクの中に誰かいた。」
「あれは、いったい、なんなんだ」

　スズキ　トモヤスは起き上がった。

「腹が減った。食べたい」
　何か食べたイ……食べタイ……タベタイ……

　やっと一人の時間を取り戻した彼であったが、脳の中枢を突き抜けるような強烈な空腹感が、彼を一人でいることを許さなかった。

スズキ　トモヤスはカギの開いた玄関を開けて、マンションの廊下をさまよい始めた。

空腹を満たしてくれる誰かを探して……

まるで生ける屍のように。

おわり

# 部屋探し

部屋探し。

　パーン！

「あれぇ？おかしいな。」
　とあるアパートの一室、僕は手を叩いた音を聞いて違和感を覚えていた。

　今の会社に入社して１年が経過したあと、僕は一人暮らしを始めることにした。土曜日の朝からなじみの不動産屋と一緒に物件めぐりをしていた。当時は親元から会社に通っていた。１時間の電車通勤は、それほど苦になっていなかった。だが、同僚と飲んだ後に終電を気にするのは、どうにも性に合わない。かといって、毎度のように同僚の部屋に厄介になるのも気が引けた。

　アパートを探す作業は、それほど手間はかからなかった。ソフト開発会社の総務課に配属された僕は、地方から会社の近所に引っ越してくる従業員のアパートの手配をすることもあり、会社近辺の不動産事情には詳しかった。不動産屋の評判や、物件の相場、それにどの道が車や人通りが少なくて静かなのか、どのエリアが買い物に便利なのか、そういった物件選びの条件付けとして必要な情報は頭に入っていた。

　不動産屋から条件にあった物件のＦＡＸを６枚もらい、その中から３件に絞り込んだ。その３件目、最後の物件でのことである。
「鈴木さん、その手を叩くのは、何か意味があるんですか？」
「いや、そのぉお、たいしたことじゃないんです。ちょっとした、まじないみたいなもので……。」
「まじない…ですか？」
「えー、まぁ、あまりそういうことを信じるタイプじゃないんですが、一応、念のためにと思って。」
「はぁあ、今ので、なにか、わかるんですか？」
「えー、実は僕もよくわからないんですが、なんていうんですか、知り合いに霊感が強いっていうか、詳しい人がいて、その人に聞いたことがあるんです。アパートを借りるときに、部屋に入ってこういうふうにパーンって。」

　パーン！

「こんな感じで手を叩くんです。そうすると、まぁ、霊がいる部屋って言うのは、音の響き方が

違うって言うんですけどね。」
「はぁあ、それで、なにか気になることでも？」
「この部屋、この部屋だけ、音の反響が微妙に違うというか……まぁ、構造とか、湿気とか、いろいろあるんでしょうけど。」
「そうですか？」

　パーン！

　顔なじみの不動産屋は、おそらくこの道一筋でやってきた人物。物件のいろいろな陰の噂も知っている。どんなによさそうな物件でも、たとえば物騒な人や、面倒な人が住んでいたりすると、そういう情報を教えてくれる。しかし、そんな彼でも幽霊のたぐいのことは、一度も経験がないという。

　パーン！パーン！

　玄関からダイニングキッチン、風呂場、トイレ、そして奥の部屋で手を叩く。確かに、奥の部屋だけ、反響がおかしい気がする。家具の置いていない部屋は大概、手を叩いた反射音がまっすぐ帰ってくるものだが、この部屋では、すでに家具が置いてあるかのように、音が壁や床、天井に吸い込まれたかのように返ってこない。いや、これは構造上の問題なのだろうか。

「日当たりもいいし、別にそんな嫌な感じはしないですけどね。ほら、まぁ私もこの仕事を長くやっていると、見たことはないですが、確かに、なんか嫌な感じがする部屋というのはありますけど。この部屋はそんないやな感じは、しないと思いますけどねぇ。」
「えぇ、確かに、嫌な感じは全然しないですよね。」

「鈴木さん、どうです？もう少し見ますか？」
「いえ、ここはもう、これで。じゃあ今日、見せていただいた３件の中で検討しますので、明後日にはこちらからご連絡します。」
「宜しくお願いします。」

　そのアパートを出るとき、僕は気になってドアが閉まるぎりぎりまで部屋の中を覗いていた。

　ガチャ！

　と、ドアが閉まる瞬間。

「チィっ！」

　と誰かが舌打ちをするようなな音がしたような気がした。

「あれ？」
「どうかしましたか？」
　不動産屋の彼は、客の前で舌打ちをするような失礼なことをするような男ではない。それは間違いない。だとしたら、今の音は一体誰の……。

　結局僕は、その３件目のアパートを借りることはなかった。

　それから５年の月日が経ち、そんなこともすっかり忘れた頃に、不動産屋の彼とばったり近所のバーであった。彼はこの町を離れ、独立して別のエリアで店舗を任されたという。僕も部署が変わり、不動産屋との付き合いは３年以上なかった。

「今でも、あのアパートに御住まいなんですか？」
「えー、とても気に入ってます。独身貴族とは行かないまでも、まぁ、快適な暮らしができていますよ。あの時はお世話になりました。」
「いえいえ、こちらこそ、あー、そういえば、あの時の候補だった……。たしか最後に見た物件、覚えてますか？」
「えー、あの、僕が手を叩いて……。」

　パーン！
　僕はあのときのように、手を叩いてみせた。

「おかしいって言って、やめたやつですよね。」
「もう、時効なんで、お話ししますけどね。」
「え？やっぱり、なんか出たんですか？」
「いえ、そういう話は聞いてません。幽霊が出たとかおかしな噂とかは聞いていないのですが……。」
「どうしました？」
「私、聞こえたんです。」
「聞こえた？何が？」
「あの部屋を出るときに確かに聞こえたんです。ドアを閉めて、カギを掛けようとしたとき……。実は聞こえたんです。」

「チィっ！」
　僕は、舌打ちをして見せた。

　不動産屋は目を丸くして、僕を見つめた。
「え？もしかして、鈴木さん、舌打ちしたみたいな音が聞こえましたか？」
「えー、僕はあなたが舌打ちをしたのかと……。でも、そんなはずはないとも思ったんですが。」
「私も聞こえたんです。で、鈴木さんが舌打ちをするはずもないとは、思ったんですが、実はずっと引っかかってたんです。」

　二人は、あの当時のことを頭の中で思い浮かべた。そして、どちらからともなく身を寄り添い、小さな声で話した。
「でも、なにもなかったんでしょう？あの物件。」
「えー、実は気になって、他の業者にも聞いてみたんですがね。そういう話は全然なくて。」
「本当ですか？」
「本当です。少なくとも、私は嘘を言っていません。ですが、ほかの事はわかりません。」
「そうですか。」
「そうです。そういうものです。」

　パーン！

　不動産屋の男が手を叩く。人や家具が置いてある部屋は、そう、こんなふうに音がぬけて行く。

「これ、なかなか、いいですね。わたしも自分の部屋を選ぶ時は、やってみることにします。」
「お客さんには勧めないんですね。」
「えぇ、勧めません。」
「そうですか。」
　不動産屋はにんまりと笑いながら言った。
「えぇ、そうです。そういうものです。」

　それから３０分ほど他愛もない話をして、不動産屋は店を出ていった。

　パーン！

　店の外で、もう一度、手を叩く音がした。

おわり

# 舌打ち

チィッ！

『お部屋探し』というお話を書いたとき、僕はふと、ある話を思い出した。それは、結局僕の中で大きくなり、作品の内容を変えてしまうほどのインパクトをもっていた。

　人はどんなときに舌打ちをするのだろう。
「しまった！」と思ったときや「畜生、期待が外れた！」と思ったときか、いずれにしても不愉快なときに、ついうっかり、発してしまうのが、舌鼓である。これからお話しする内容は、僕がとある雑誌に掲載された、ほんの小さな投稿記事に書いてあったことをもとにしたもので、今となっては、その詳細なディティールは覚えていないし、どんな雑誌だったのか、どんな主旨の投稿だったのか――たぶん、恐怖体験募集とか、そういった類のもの――覚えていない。もし、「この話は、昔からよく言われている話だ」とか「〇〇〇という雑誌に同じような話が載っていた」という事があれば、何らかの形でご連絡いただければと思う。ただ、一つだけはっきりしていること、それは僕がこの話を知ったのは、中学生のときだった。なぜなら、僕は一度だけ、友人にこの話をした事がある。それは中学の修学旅行のときで、みんなにとても怖がられたのを覚えている。以後、この話を誰かにしたことはない。覚えている限りのオリジナルの話の原型を残しつつ、僕なりにアレンジした内容をお楽しみください。

　話は、こうである。それは二人の姉妹の物語。

　それは、私が高校受験を控えて、毎晩遅くまで受験勉強をしていたときのことでした。その時は、寝ぼけていたのだと、それほど気にしていなかったのですが、先日、ちょっとしたことで、あの夜のことを思い出し、ぞっとして……それで、どうしたらいいか、わからなくてこの手紙を書きました。

　まずは、その夜のことをお話します。私には二つ上の姉がいます。以前は同じ部屋だったのですが、私が受験を控えて少し神経質になり、事あるごとに姉と喧嘩をしていました。「死んでしまえばいい。いなくなればいい」そんなことを、考えるようなことが、しばしばありました。ところがある日を境に、急に姉が私に優しくなり、喧嘩をすることもほとんどなくなりました。不思議には思ったのですが、きっと姉が受験を控えた私に気を使ってくれたのだと、そう思っていました。

　受験を一週間前に控えたある夜のことです。時計は夜中の２時を回っていました。数学の問題

がうまく解けずに、少し横になるつもりが、そのままうとうととしてしまったようです。私と姉のいた部屋は２段ベッドに勉強机が二つ並べてあり、スタンドの明かりがまぶしくないように姉が２階に寝ていました。受験勉強を始める前までは逆だったのですすが、実は喧嘩の発端は、このベッドの位置でした。私は受験の間だけでも下のベッドを使わせて欲しいと姉にお願いしたのですが、姉はそれを断固として拒否したのです。

　そのとき、私が横になったのはベッドではなく、ベッドと机の間の通路になっているスペース。私は勉強に行き詰まると、こうやって、通路に横になり頭を冷やしていました。そこはちょうど部屋の真ん中の位置となり、二つ並んだ机と２段ベッドにはさまれた谷のような状態で、床に寝転んで見上げる風景は、なんとなく私を落ち着かせてくれました。そのまま寝てしまうこともしばしばあったのですが、たいがいは、寒くて目が覚め、勉強を再開するか、それともベッドに倒れこむかするのですが……

　そのとき、私の薄れて行く意識の中で、誰かの話し声が聞こえました。
「おい、どうだ、そっちは」
「まだだ、もう少し、もう少しかかる」
「早くしろ、今がチャンスだよ」
「ほんとうにやるのか？」
「やるさ」
「そうとも、やってしまえ！」

　いったい、誰だろう？なにをやるとか、やらないとか言ってるんだろうーーすっかり寝ぼけてしまっているんだと思いながら、体が思うように動かず、夢の中とも、現実ともつかない中で、私はただ、ぼーっと、そのやり取りを聞いていました。声の主は４～５人のようですが、性別や年齢がわかるようなはっきりした声ではありません。ひそひそ話というわけでもなく、ただ、声そのものが小さい。そう、まるで小人が話をしているような感じでした。

「グチャグチャだな」
「あー、グチャグチャだとも」
「無残だな」
「あー、無残だ」
「仕方ないよ」
「そうだ、仕方がない」
「あの子が悪いんだ」
「そうとも、あの子がいけない」
「始めるか」
「始めよう」

「終わりだな」
「そうとも、終わりさ」

　なんとなく、恐ろしくなりました。
　グチャグチャって何が？
　無残って？
　始まるの？
　終わるの？

　私の意識が少しずつはっきりしてきました。これは、夢じゃない。本当に聞こえている声？誰？誰かいるの？

　私はとてつもない不安にかられ、その場から飛び起きました。その次の瞬間――

　ガシャーン！

　信じられないことに、私が寝ていたその場所に、部屋の電灯が落ちてきたのです。驚いて声も出せずにいる私に、ベッドの上から姉が、大声で叫びました。

「大丈夫！何、何があったの！チーちゃん、チーちゃん！」
　姉は２段ベッドから飛び降りるような勢いで、私のところに駆け寄りました。床には割れた蛍光灯が飛散しています。親も何事かと飛び起きてきました。幸い、私にも姉にも怪我はありませんでした。私が何が起きたのかを考えられるようになったのは、翌日のことでした。あの声、あの時聞こえたあの声は一体誰だったのか、もし、あの声を聞いていなかったら、私は今頃……そう考えると受験勉強どころではありませんでした。

　勉強に集中できずに、ふと姉の机の上を見てみると、そこには３～４センチほどの身を丈をしたアニメのキャラクターの人形がおいてあります。それはガチャガチャでよくあるゴム製の人形だったのですが、おかしなことにその人形がまるで何か打ち合わせでもしているかのように円陣を組むような並び方をしているのです。

「あれ、これって、前からこんなふうになってたっけ？」
　しばらく、その人形を眺めていた私の中にある考えが浮かんできました。もしかしたら、姉の人形が私に危険を知らせようとして……それで、声が聞こえたり、したのかしら？　それとも、あの人形たちが私に電灯を落とそうとしたのかしら？

　私は迷うことなく、前者の解釈を取りました。そうするしかなかったのかもしれません。もし、後者だとしたら、私は、私は恐ろしくて夜も眠れません。でも、それ以来、何一つ恐ろしいことは起きませんでした。その人形も、受験が終わることには、姉はどこかに片付けてしまいました。或いは捨ててしまったのかもしれません。そう、思っていたのですが……

　私は、希望していた高校に進学でき、姉は高校を卒業して大学に進みました。姉は念願の一人暮らしをはじめ、私は一人で部屋を使えるようになりました。その歳の暮れに勉強机や二段ベッドを処分する事が決まり、姉も自分の荷物を整理しに、実家に帰って来ていました。懐かしいもの見つけては、無駄話をするものだから、なかなか片付けは進みません。父がいい加減にしないと、日が暮れるぞと様子を見に来たあとは、黙々と荷物の整理をしていました。ふと、姉の様子を見ていると姉の荷物の中から、あの時の人形が出てきました。姉はその人形たちをみた瞬間「チィッ！」と呟き、ゴミ袋に捨てたのです。

　その「チィッ！」という音、めったに姉は舌打ちをしたりはしないのですが、そうえいば、あの時、あの夜、私はその音を聞いたような気がして……ちがう、私のことを呼ぼうとして、チーちゃんって呼ぼうとして……でも、もしかしたら、姉があの人形たちを使ってわたしのことを……

　私は前者の解釈を取りました。そうするしかなかったのかもしれません。だって、今の姉はとても私に優しいんです。とても、とても……

　でも、私は今、もっと大きな問題を抱えてます。
　それは、そんな姉の今付き合っている彼氏のこと、私、好きになってしまったのです。
　私はどうすればいいでしょうか？

　どうかご相談に乗っていただけることを切に願います。

と、話はここまで。
彼女がこの手紙を誰宛に送ったのか、それはわかりません。
精神カウンセラーなのか、友人なのか、恩師なのか、はたまた、特殊な力を持つ……そう、たとえば呪術師なのか？

　僕は、前者だと信じたい。たとえ、あなたが、どう考えようとも……

おわり

# 這う女

這う女

「疲れた。疲れたわ」
　夜道を一人の女が歩いている。人通りは少なく、街灯もポツリポツリとしかない。

　静寂。

　そして、その中にコツ、コツ、コツ、とヒールの音が響く。

「冗談じゃないわ。今日は、ずっと立ちっぱなしだったわ」
　女は、夜道を歩きながら、なにやらブツブツと恨み言をつぶやいている。黒のヒールはやや高めで、そこから白くすらっとした長い足がスカートの中へと伸びている。足首の細さに比べて、膝から太股にかけての肉付きは意外なほどいい。その割りに腰まわりはややこぶりではあるが、しっかりとした筋肉が備わっており、ふくよかさよりも健康的なたくましさがかえって妖艶といえなくもない。

「はやく部屋に戻って横になりたいわ」
　しっかりと鍛え上げられた足腰でも、一日中立ちっぱなしでの労働は流石にこたえる。彼女の歩く姿は、下半身だけでも男を十分に魅了する。腰から背中へまるで背骨がしっかりとわかるほどに彼女の姿勢は凛としている。歩くときの歩幅、足の運び方、腰の動き、しなやかな腕の振り。それらは見事なまでに調和がとれて無駄がない。薄手の黒いジャケットの襟元から白いブラウスが見え隠れする。髪の毛は頭の上のほうで束ねられ、首筋があらわになっている。異様に首が長く見える。

「物騒ね。このあたり、少し暗すぎるわ。ひとけもあまりない。早く帰らなきゃ」
　女の唇はやや薄い。口紅はそれほど派手なものをつけてはいないのだが、真紅と表現するのが一番ふさわしい。やや半開きの口元は、常にある一定以上の湿度を保っている。暗がりの中では、どことなく卑猥に見えてしまう。すっと徹った鼻筋は女の顔の中で一番目立たない。目元はどちらかといえば切れ長だが、細いという印象はない。瞳の白い部分と黒い部分が不自然なくらいにはっきりしている。じっと見つめられると思わず吸い込まれてしまうような印象がある。瞬きは極端に早く、ともすれば、ずっと瞳を閉じていないように見えてしまう。

　耳にはピアスの穴が右に一つ、左に二つ開いているが、今は何もつけていない。形のいい小さ

なその耳が、何の物音を捕らえた。女の背後から、別の足音が聞こえてくる。路面の砂をすりつぶすような音。女のヒールの音とは明らかに違う。男物の革靴。重量感がある。およそ女の体重の倍はありそうである。

「いやね。こんなところで……」
　女の足音が少し早まる。男の歩くテンポは変わらない。変わらないが、明らかに女に近づいている。歩幅が大きいのだ。

「もうすぐ、もうすぐ家なのに……」
　女は、少しあせり始めている。こんな夜道で背後から男が近づいてくる。出来ることなら追いつかれる前に家に着きたい。でも、露骨に走り出すのも気が引ける。いや、それ以上に長時間立ったままでの労働に、足が言うことを利かなくなっている。うっかりすれば、自分で自分の足に躓きそうである。

「もう、こんなときに……もう少し、もう少しなのに」
　女は必死で重い足を前へ、前へと運ぶ。さっきまでの小気味のいいコツコツという音はどこか不安定で引っかかるような不快なリズムを刻みだした。女の呼吸が乱れる。どんなに女が急いでも、足音はどんどん背後に迫ってくる。抗いようのない恐怖。でも、アパートは目の前だ。あと１００メートルいや８０メートルもない。暗くて距離感がつかめない。不意に女の足音が止まる。

　バタッ！

　とうとう女は路面に倒れこんでしまった。右足で左足を引っ掛けてしまったのだ。女の視界には少しくたびれたアスファルトの道路――そこから自分のアパートまで３０メートルと言う距離――昼間の熱がまだ残り、気持ちがいいくらいに生暖かい。手には少し砂がついている。どうにかうまく受身を取った。怪我はないが、着ている物を汚してしまった。いや、そんなことよりも――女が振り向くとそこにはひとりのサラリーマン風の男が立っていた。年は３０手前といった感じだ。まだ若い。

「大丈夫ですか？」
　言葉だけは優しいが、どことなく信頼が置けない。男は好奇心と警戒心を隠しながら、そして女の足の先から腰の辺りまでを嘗め回すような露骨な視線を送りながら、口だけは心配しているかのようなことを言う。

「だ、大丈夫です、アパートはもう、すぐそこですから」

「あー、すぐそこですか。なら、私があなたをアパートまでお送りしましょう。こんな夜道で倒れこんだりして……どこか怪我をしているかもしれませんよ。ほら、骨折とかって、案外と本人はすぐには気付かなかったりするものですから……どうぞ私に捕まってください。大丈夫です。何もしませんから」

　男の言っていることはわかる。そしてそれ以上に男が自分に何をしようとしているのか、何を考えているのかは、もっとわかる。だから、断らなければならない。だけど、女にはその術がなかった。

「じゃあ、すいませんけど、肩を貸していただけますか？」
　女は観念し、男の申し入れを受けることにした。もし、断ろうものなら、こんな場所で辱めを受けるのは耐えられない。

　男は女の手をとり、女の肩を抱えた。女の手は汗でしっとりと濡れており、それだけでも若い男は興奮を抑えられそうになかった。後ろから見た姿から想像していたそれよりも、女の身体はふくよかだったことは、更に男を喜ばせた。

　男は必要以上に女を強く抱きかかえ、女はそれをよしとした。
「どこか痛いところはありませんか？」
「えー、少し肘と膝の辺りを打ち付けたようで……」
「あー、それは大変ですね。私は多少なりとも応急処置とかの心得はあるんです。良かったら看て差し上げましょうか？」
「いえ、そんな、ここまでしていただいて、それ以上は申し訳ないです」
「いえいえ、お気になさらずに」

　女は杓子行儀に接し、男は押し付けがましく女に近づいていった。１８０以上あるがっちりとした男である。やや、小柄の女を抱えるのには、少しばかり屈んだ姿勢をとらなければならない。その分、男の体が女の身体に必要以上に密着している。

　男の興奮が欲情の限界を超えるためには３０メートルの道のりは、十分な距離ではなかった。男はどうにか自分を制御できたし、それは女の思惑通りでもあった。
「ここで、もう、結構ですから」
「いえいえ、そうは行きません。私はあなたが心配なのです。どうか、気になさらずに、さぁ、行きましょう」
「ですが、これ以上、ご迷惑をかけることは……」
「いえいえ、このままでは私の気がおさまりません。いえいえ、おかしな意味ではなく、心配でと言う意味ですよ。ほら、こんなところで押し問答していると、他の住人の方の迷惑になりま

すよ」

　一瞬男は怯んだ。それまでどこか控えめだった女の態度が急に変わった――いや、態度というよりは目つきだ。やや切れ長の目の奥にある瞳が、まるで爬虫類のそれのように男を睨みつけたように感じだのである。

「じゃ、わかりました。その代わり、あなたも決して大きな声を出さないでくださいね。他の住人の迷惑になりますから……そうなったら、きっとあなたも困ると思うの。ここの人たちは、なかなか気難しいのよ」

「あ、ああ、わかった。大きな声は出さないよ。騒がない」
「こっちよ」
　男は再びドキッとした。「こっちよ」といった女の口から、何か妙な音が聞こえた気がした。いや、そのことよりも、男を誘ったときの女の妖艶さは、まるで男をベッドに誘い込むときのそれのようで、男は背中を指で摩られたような気分に興奮した。

　３階建ての鉄筋のアパートの２階の角部屋が女の部屋だった。女は持っていたバッグから鍵を取り出し、玄関の鍵を開ける。鉄製のしっかりとしたドアは、決して部屋の中の音を外に漏らさないような頑丈さが、どことなく不気味である。いや、男にとっては都合が良いのか。

「どうぞ、静かにね」
「はい、御邪魔します」
「うっ」
　一瞬男はたじろいだ。外の空気とはあまりにも異質な湿気……カビ臭かったりはしないのだが、まるでミストサウナのような質量の感じることのできる湿気に思わず声を上げそうになったが、女の視線がそれを制した。

　女は真っ赤に染め上がった唇――なぜか、先ほどよりも赤が強くなっている気がする――に白く細い指を当てて、静かにという合図を男に送った。男はこの時点で、自らの意思で動く事ができなくなっている。だが、そのことに男が気付くのは、ほんの少し先のことである。

「ドアを閉めて。静かに。そして鍵をかけるの」
　男は女の言われるがままにドアを静かに閉め、そしてドアノブの上にある鍵を回した。
「そう、あとチェーンロックも忘れずにね。このあたりは物騒だから」
　言われるがままに男はチェーンをかけようとする。しかっし、うまくいかない。体が思うように動かない。男は気付いた。自分の手が震えている。体が何かに怯えているが、男はそれがどういうことだか、理解できなかった。

「あら、あら、そんなんじゃダメよ。ほら、ちゃんとこうやって、鍵をかけるのよ」
　男の手を女が握り、ゆっくりとチェーンをドアにかける。女の手は妙に冷たいのにじっとりとした湿気に包まれている。この部屋のせいなのか。いや、自分の腕から大量の汗が噴出している。毛穴が開き、激しく呼吸をしようとしている。体中の毛穴が開き、悲鳴をあげている。

　女が男の首に手を回し、真紅に染まった真っ赤な唇を男に耳元に寄せて囁く。
「だめ、もう、立っていられないわ。今日はずっと立ちっぱなしで、もう足が限界よ。早く、横にならなきゃ……」

「痛っ！」
　女は離れざまに男の耳に噛み付いた。それはピアスの穴を開けるような痛みであったが、その痛みがそういうふうに表現されるのがもっとも適当であることを男は知らなかった。

　男の耳を噛んだ女は突然男の視界から消えた。女は玄関口でヒールも脱がずにそのままうつぶせに倒れこんでしまったのだった。うつ伏せに横たわる女の体は恐ろしいほどに艶かしく、男は恐怖に身を震えさせながらも、己の欲情を止めることはできない。いや、ちがう。これはある種の生存本能なのか？死を目の前にして、遺伝子が己の子孫を残そうと、機械的に生殖機能のスイッチを押したに過ぎないのかもしれない――死を目の前に？いったい誰の？

「死？」
　男は自由な意思でその言葉を口にしたのではない。或いは意味のある「死」ではなくただの「si」という音しか出せなかったのかもしれない。

「かぁ、かぁ」
　男は初めて気がつく。口が自由に動かない。声が出せない。体が言うことを利かない。まるで何かに縛られているような……ちがう。しびれている。そう、女に噛まれた瞬間から、男の神経は麻痺してしまっていたのである。

「気持ちいい。やっぱり、横になるのが一番よ。立って歩くなんて、慣れない事は申したくないわ」
　女はそういいながら、うつ伏せのままくねくねと動きだした。まるで床の感触を確かめるように、愉しむようにのた打ち回る。女の腰の動きは激しく、スカートがまくれ上がり、白い太ももが付け根まであらわになっている。

「シューーーーー」
　それは、聞くものを硬直させるような威圧的な音である。その音は部屋の中の湿気の中に吸い

込まれ、くぐもって聞こえる。それほどまでにこの部屋の湿度は異常に高い。

「シューーーーー」
　男は瞬きすることもできずにその光景を見つめている。もし、男の体が自由になったら……鍵を開けて逃げ出すか、女に馬乗りになるのか。いや、おそらくはそのどちらもままならないだろう。男にはこの女に背を向ける勇気もなければ、女がどんな顔でこの異様な奇声を発しているのかを見る勇気もない。

「シューーーーー」
　ついに女は這い出した。両手両足をばたつかせながら、身体を不自然にくねらせながら部屋中の床の上を這い始めた。

「シューーーーー」
　部屋の中は暗くてどうなっているのかよく見えないが、所々に死角がある。どこにいても女の白い肌は闇の中ではっきりと見て取れるし、女の口元もすぐにわかる。頭の上で結わいていた髪の毛は解け、女の目元は髪の毛で覆われてしまっちる。印象の薄かった鼻筋は、もはや見て取ることはできない。半開きの真紅の唇から、時々何かが蠢いているのがわかる。恐ろしく長い女の舌だとわかったとき、男は初めて自分の置かれている立場を理解した。

　部屋の奥には二つ部屋があるようだ。ベッドのよなものが見える。女は今、その上にいる。散々部屋の中を這いずり回り、気がつけは女は全裸になってベッドの上に横たわっている。そして不自然に身体をくねらせながら、長い首を伸ばし、男の方を見ている。ゆらゆらと揺れながら、女の髪の毛が左右に振られ、女の顔があらわになる。薄明かりのなか、女の目は細く切れ長で、その瞳はどこか表情がない。鼻と呼ばれるものはもはや小さな穴が二つ見える程度しかわからない。唇は薄いのに、半開きになると真っ赤な花が咲いたかのように見える。そしてそこから空気の漏れるような音とともに、長い舌が、小刻みに出たり入ったりを繰り返している。

　首からへその辺りまでは、人間のそれであるが、肌の質感が人間とは全く違うということは、少し離れた場所からでもわかる。そして、下腹部にいたっては、異常な状態に変形している。腰から下というものがない。腹から下は、同心円の胴体となり、本来足の先の部分は一本の……そう、一本の尻尾。

「シューーーーー」
　運のいい事に男の意識はそこで途切れてしまった。毒が体中を回り、神経が麻痺し、男には幻覚しか見えていない。だが、それはどこまでが幻覚で、どこまでが現実なのか。

「シューーーーー」

「クワァァ」
「カァ……」
「グビッ……」
「バキ、バキバキ」

「バキ、バキバキ」
「バキバキ」
「シューーーーー」

　頑丈に閉ざしたその扉は、あらゆる者の侵入をかたくなに拒み、そして、どんな者も外には出さない。例えそれが、何かを締め上げ、砕き、飲み込むような音でも……そして、あなたの断末魔の悲鳴ですら、何者かに飲み込まれてしまうだろう。

おわり

# Smile Face Book

Smile Face Book

　通勤電車。

　毎日ほぼ同じ時間の、同じ電車、同じ車両に乗り込む。特に意味はない。変えるのが面倒なだけだ。いわゆるラッシュの時間からは少しずれている。あまり気にしたことはないが、およそ半分くらいは同じ顔ぶれがそろう。いや。もしかしたら、もっと多いのかもしれないが、あまり気にしたことはない。

　席に座れるときもあれば、そうではない時もある。そうではない時でも、二駅も乗っていれば、大体座れる。誰がどこで降りるのか、およそ検討がつく。会社の最寄り駅までは、およそ４０分。駅前は３年ほど前に整備され、有料の駐輪場が出来てから、本当にすっきりした。会社まではゆっくり歩いても、１０分かからない。途中にコンビニが、３軒ほどあり、その日の気分によって、おにぎりやパンを買う。遅い朝食だ。

　自分のデスクは事務所の入り口からは少し奥まったところの壁際で、衝立で区切られている。仕事が始まると、時には誰とも会話もしないこともある。ずっとデスクの上のパソコンに向かい合い、いつ終わるともわからないシステムをくみ上げる基本的には一日２回ミーティングがある。作業に問題点や仕様変更があった場合の説明などなのだが、特に何か発言を求められることがなければ、誰かと話をすることもない。

　このフロアには１００人ほどが勤めている。そのうち８０名ほどは私と同じような作業をしている。時々人の入れ替わりがあるが、やめていった人の中で、顔と名前が一致する人はいない。イントラネット上にグループウェアがあり、社内の人間とはチャットやメールでやり取りが出来るようになっている。そこには顔写真が掲載されている。そのうち半分は笑っている。あとの半分は、自分と同じように、無表情であった。

「気持ち悪いなぁ」

　私には、どうして無理に笑った写真を、人前にさらせられるのか、まるで気が知れなかった。あまり仏頂面もよくないが、わざとらしい笑顔、特に歯を見せるような笑顔にはどうにも好感が持てずにいた。

昼食は社員食堂で食べる。なるべく時間をずらし、四人がけのテーブルに一人で座って食べるのがいい。誰かに食事をするところを見られたくない。いや、それ以上に食事中の会話は苦手だ。相手から『面白いだろう？』と得意げにふられた話が面白かったためしがないし、『なにか面白い話はないか？』と聞かれれば、愛想笑いをしながら『ぜんぜんないね』と答えるしかない。そして次には誰かの悪口、不平不満が始まる。

そんなことを私に話しかけられても、困惑するだけだ。相槌を打っただけで、同じ考えだと思われるのは嫌だから、なるべく反応しないようにしている。しかし、それがかえってよくないのかもしれない。『こいつになら何を話しても大丈夫だ』と、いいストレスのはけ口だと思われているのかもしれない。

冗談じゃない！　俺は便器じゃないぞ！

もちろん、そんなことは思っても口に出さない。

それにしても食堂の店員は愛想が悪い。いや、特に私にだけ無愛想だ。或いはごく一部には愛想がいい。それはおかしいと、一度だけ言った事があるが、誰も相手にしてくれなかった。サービスは公平にするべきなのだ。なぜ、誰も文句を言わないのか。

食堂へはエレベーターを使う。

１３階建てのビルのちょうど真ん中が食堂になっている。まぁ、確かに上からも下からの同じ位置に公共の施設があるのは公平だ。そこは認めるが、どちらにしてもエレベーターで誰かと一緒になるのは苦手だ。大勢いるならまだしも２～３人の場合、挨拶をしないわけにもいかない。

大体が誰が誰だかわかっていないのだ。

社員証があるから、名前はわかるが顔は覚えていない。『この前はどうも』とか、『あれからどうしました？』などと聞かれても、答えられっこない。ともかく、エレベーターは苦手だ。そんな、窮屈で、退屈で、それでも、居心地は悪くない生活が、ある日を境に、一変することになる。

それは、珍しく夏風邪を引き、会社の医療施設で治療を受けた翌日からのことだった。処方された薬のせいなのか、朝から妙に気分がいい。

ある種の副作用なのか？

まぁ、最近はうつになる社員も多いと聞く。予めそういった成分が入っていたとしても、この会社ならやりかねない。取引先には大手の製薬会社や医療施設がある。

通勤電車、運良く、乗ってすぐに座れた。電車が走り出してすぐに、前の座席に座っている中年の男がこちらを見ながらニヤニヤと笑っていることに気づいた。

なんとも気持ちが悪い。

しかし妙だ。普段の私ならとっくに目を伏せて寝たふりをするのだろうが、妙にその男の事が気になった。

どこかであった事があるのか？

ニヤニヤした中年男は、何やら時々ブツブツと呟いている。呟くというよりも、そうハンズフリーの携帯電話で話をしているような、確実に話相手がいるような話方なのだ。結局、私はその男が何を言っているのかは一言も聞き取ることはできなかった。気にはなるが、妙なことに嫌な感じはしない。

これはいったい、どういうことなのだろう。

やはり処方された薬には何かおかしな成分が含まれているのだろうか。

そして不思議なことに、その現象は電車を降りてからも続いた。３件のコンビニのうち、一番愛想が悪いアルバイトの店員が気持ち悪いほどの笑顔で接客してくれた。

「お待たせしました。飲み物とこちらの商品、一緒の袋でよろしかったでしょうカァ」

言葉の頭と尻が少し聞きづらいのは相変わらずだが、ファーストフードなみの笑顔だ。あんなに目じりが下がるものなのか。

会社に着く。朝のエレベーターの中、見知らぬ男が……。いや、総務課の田中と社員証には書いてある。たぶん初めて会う男だ。その男が私を見ながらニヤニヤと笑っているのである。そして電車であった妙な中年男と同じように、なにやら口を動かしているのだが声は一切聞こえない。

「あっ、あのぉ〜、何か、私にご用でしょうか？」

　総務課の田中は、驚いた顔をして、そしてまたニヤニヤ笑いながら、今度ははっきりとした口調で挨拶をしてきた。

「いやぁ、始めまして。そしてようこそ、こちらの世界へ」

「はぁ？　なっ、なんですか？　こちらの世界って……」

　エレベーターが止まる。さっきまでニヤニヤしていた、総務課の田中は急にすまし顔になり、エレベーターを降りてしまった。

　そして社員食堂でも、いままで無愛想だった店員が、やけに愛想よく、振舞う。

　一体どうしたというのだ。急に世界が変わったようだ。

　いや、待て。

　世界が変わったのでなく、私自身が変わったという可能性があるのではないか。

　いや、その仮説はあまりにも突拍子もない発想だ。いやいや、そうじゃない。そんなことを考えること自体、私自身の変化ではないのか？

　いったい私は、ワタシはどうしたというのダ。

「そうダ。総務課の田中…….。彼には、前にあった事がないはずだが、一応調べてみるカァ」

　ワタシは、グループウェアで総務課の田中を調べた。

　確かにこの男ダ。

　このニヤニヤした顔。

　まったく、何でこんな顔を……。うん？

　ニヤニヤした顔？

もしかしたラ……。そうか、そういうことなのカ！

ワタシは次から次へとグループウェアで社員の顔を確認していっタ。

どこかであった覚えのある顔がやたらと増えていル。

そんなはずはないと思いながらも、ワタシはあるひとつの核心めいたものにたどり着いた気がしタ。

そう、それはまったく突拍子もない発想、しかし、それこそが答えダ！

あとは確かめるだけダ。

ワタシは、端末を操作し、携帯電話のカメラで自分の顔を撮影し、グループウェアに新しい画像ファイルをアップロードしタ。

数分後、システムからの承認がおり、ワタシの新しい顔がグループウェアにアップされタ。

そこにはニヤニヤと笑っているワレワレノ　カオガ　ウツッテイタ。

イヤ、イマナラ　ワカル。

ワラッテイルノデハナイ。

コレガ　ワレワレノ　カオナノデアル。

ワタシワ……、イヤ、ワレワレワ……。

それから数年後。

世界中を席巻するソーシャルネットワークの写真には、ニヤニヤと笑った顔が並び、人類はすべて、笑顔になった。

ようこそ。Smile Face Bookの世界へ

おわり

# ゆめのあと

ゆめのあと

夢から覚めない少女

少女は、夢の中で、遊んでいる

その遊びをやめない限り、現実の世界に戻ることは、出来ない

だから僕は、少女の夢の中に入り込み、少女に呼びかける

その声は、届いているのか。届いていないのか

少女は、振り返らない

夢の中で　足をかすみとられる

少女に近づくことも出来ない

夢の中で僕の行動は、制限される

見るものすべてがぼんやりしている

耳にする音も、本当に聞こえているのか、或いは僕の頭の中で鳴り響いているだけなのか区別もつかない

すべてが儚げで、現実感がない

記憶も断片的にしか、たどることが出来ない

時系列が、でたらめで、何一つ確かなものなどないように思える

夢の中で唱えた呪文は、夢の中で解かなければならない

精神と肉体の不一致

死と隣りあわせとは思えないほどにアンニュイな感覚

生に対して不誠実で、死に対して、無防備に思えた

僕は、たくさんの蟻たちに運ばれてゆく、コガネムシの屍のようだ

彼らが生きてゆくために、僕の骸が役立つというのなら、それもいい

巡るめく(環のなかで:ﾜﾉﾅｶﾃﾞ)、繰り返し、繰り返し行われてきた摂理

でも、少女はそんな蟻の巣穴を、小さな小石で埋めてしまう

僕は、僕の役割を、(果せずに:ﾊﾀｾｽﾞﾆ)いる

ねぇ、お願いだから、お母さんのところへ。ママのところへお帰り

僕は少女に、どう接すればいいのかがわからず、思いつくままに言葉を選ぶ作業を繰り返す

時々その言葉は、僕の胸に強烈な衝撃を与える

その感覚はとても痛くて、つらくて、悲して、せつなくて

なのに少女を見ていると、痛みも、つらさも、悲しみも、せつなさも、少しずつ和らいでいく

だけど、もうゲームは、おしまいにしよう

そろそろ、時間だ

さぁあ、僕と一緒に帰ろう

君は、狂ったように、首をふる

何度も何度も首をふる

勢い余って、君の首はそのまま地面に転げ落ちてしまう

蟻たちは、仕方がないので君の首を担いで、どこかに持ち去ろうとする

僕は、どうすることもできずに、君の首を見送る

置き去りにされた、コガネムシの骸

それが僕

ならば君は、一体、誰なんだい

君は……、君は……

激しく体をゆすぶられて、僕は目を覚ました。
「あなた、大丈夫？」
「ああ、大丈夫だ……、心配ない」
「泣いているの？」
「えっ？　そうか……、少し嫌な夢を見ていたようだ」
「そう。そうなの……、冷たいお水、持ってくるわね」
「すまない」
「なぁあ」
「えっ？　どうしたの？」
「俺は、寝言で何か言っていたか？」
「よく、聞き取れなかったけど。確かゲームがどうのって……」
「そうか、ならいい」
「本当に、大丈夫？　最近、あまり良く眠れていないのではなくて？」
「そんなことはないさ。眠らなきゃ、夢は見られないだろう」
「それはそうでしょうけど……」

妻は、心配そうに僕の顔を見ていた。すると何か思い出したという顔をして、すっと立ち上がり、私の肩にそっと手をあてがいながら言った。
「怖い夢をみたときはね。その夢のことを誰かに話せば、もう続きは見ないし、たとえ見たとしても、話を聞いてくれた人が助けに来てくれるそうよ」
「あれ？　なぁー、今の話……、前にも話してくれたっけ？」
「どうだったかしら。子供の頃、怖い夢を見て泣きながら目を覚ますとね。そうやってパパが言

い聞かせてくれたの。不思議とそのあと、同じ怖い夢は見なくなるのよ。本当よ」
「そうか。うん、ありがとう」

　妻は、もう一度私の顔を覗き込むと、安心したような顔をして台所へ水を汲みにいってくれた。
「あんな変な夢の話。どこから話したらいいものだか……」
　ふと、視線を移すと、充電中の携帯電話の横にメモ用紙が置いてあった。仕事関係のメモが殴り書いてある。私はそのメモを破り捨て、新しい紙に覚えている夢の内容を書き始めた。

　こうして、僕の物語を書く旅は、始まった。

おわり

# 蝉時雨①～下駄の男シリーズ

## 蝉時雨①

　今年は蝉の鳴き声が聞こえない。そんな話が巷で話題になっていた８月のある日……

　６月のうちに真夏日を観測するような暑い夏。この暑さにふさわしい蝉の鳴き声が今年はまだ聞こえない。去年の夏はアレほどまでにけたたましく鳴り響いていた蝉の鳴き声――去年はとくにその印象が強い。初めて子供と虫かごをもって蝉を採りに行ったから、なおさらその記憶は鮮明だ。ともすれば手が届くような背の低い木にも蝉が止まっていることもある。３０分もしないうちに虫かごは蝉で一杯になった。物足りないという表情で私を見上げる子供の表情を愛しく見つめた。

「今年はいつ会えるかなぁ……」
「後藤さん、どうかしましたか？」
「あ、あぁ、いやなに、今年は去年ほど蝉が鳴かないなぁとか、そんなことを考えていたのが嘘みたいだなって、思いふけってたわけよ」
「しかし、こんなことってあるんですか？」
「ねぇよ」
「あ、ねぇよはないでしょう」
「他にどう答える？お前なら報告書になんて書くつもりだ？」
「あ、それは……原因不明の蝉の異常発生」
「ふん。そんなことはきいちゃいないよ。どんな人間にせよ、この法治国家では人が死ぬには理由が必要なんだ。老死、病死、事故死、自殺、殺人。どうしたって死因というのが手続き上必要だ。こいつはなんだ？事故死か？自殺か？」
　後藤の口調はイラついてはいたが、それは部下の鳴門刑事に対してではなかった。

「まるで傘の事件と同じですね。事故死としか、報告書には書けません」
「まったくだ。あの老人と関わるようになってから、こんな話ばかりだ」
「別に、あの老人が、あの尾上弥太郎っていう男が関わっているわけではないでしょう？」
「ああ、そうだ。俺が不機嫌なのは、関わりがないとわかっていても、あの下駄の男の力を借りなければ、真実がわからなかったってことさ」
「しかも、それを公にはできない」
「ああ、まったくだ。気持ちが悪いとは思わないか？」
「今回の事件……蝉が……ですか？」
「ちがう。すっきりしないってことさ。法律という枠で処理できないことはこの世の中には山ほ

どある。俺はそういうものをたくさん見てきたし、やっても来た。だがこれは……これはなんというか、俺の領分じゃない」
「まったくです。不思議というか、なんと言うか」

２体の死体がある。ひとつは、つい２日ほど前に死んだ男の死体。権田　聡　４５歳。聡笠井町のとはるアパートに一人で住んでいる。もと暴力団組員。恐喝、暴行、詐欺などのいくつかの事件の容疑者ではあるが、これといった証拠もなく、また被害者からの被害届けが取り消されたりで、逮捕には至っていない。これといって組織的な犯罪の重要参考人ではなかったので、江戸川南警察署の捜査線上からは消えていた。

しかし、後藤はこの男のことを覚えていた。それは７年前。まだ鳴門刑事と組む前のこと。ある人物の捜索願が出された。笠井町に住む、ある一人暮らしのＯＬが行方不明になったのだと、その妹から捜索願だがされたが、これといって捜査が進展する前に、捜索願が取り消された。後藤の管轄ではないこの事件に関わるようになったのは、その妹が、ある男が姉の行方を知っているに違いないと訴えたからである。その男が、権田聡である。行方不明になったのは、都内勤務のＯＬ　坂口　浩子当事２６歳　独身。妹の由紀子によれば、数年前、姉の浩子がホステスのアルバイトをしていたとき、権田と知り合い、それから深い関係になたのだという。そのことは裏が取れている。たしかに、そういう事実はあったようだ。そして、よくある話だが、権田は浩子のヒモ同然の暮らしをしていたらしい。

７年前、とうとう嫌気がさした浩子が、権田の下を飛び出し、会社を辞めて地方に逃げした。という話なのだがそれっきり浩子の行方はわからないままだ。当然、権田に事情聴取が行われたが、浩子失踪に関わるものはなにも出てこなかった。そして、何度かの無言電話。浩子と思われる手紙や電話が横浜、名古屋、大阪からあり、それ以来、音信不通になたことから、事件性はないと判断されたのだ。後藤は別件で権田をマークしていたので、それも合わせて捜査に加わったのだが、結局組織ぐるみの犯罪に権田が関与していないことがわかると、後藤は捜査から手を引かざるを得なかった。

２体の遺体のうちのもう１体は、その坂口浩子のものである可能性が高いのだ。腐乱がひどく、鑑定してみなければわからないが、遺留品からその可能性は非常に高い。権田の遺体は、アパートの前。階段から転げ落ちて首の骨を折り死亡した。形の上では事故死である。坂口浩子の遺体は、その権田のアパートのすぐ近くにある公園から見つかった。都会の死角である。

「権田という男、定職に着かずに、組織からも足を洗ってどうやって食ってたんでしょね」
「ゆすりたかりの類、おおかたそんなところだろう。今回の件、死体遺棄の容疑が権田が殺してあそこに埋めたとして、とてもひとりでそれをやったとは思えん。まず、組織の誰かを個人的に使ったんだろうが」

「それで組を出たと？」
「まぁ、権田には敵も多かったと聞いている。なにせ権田がへまをするたびに、誰かが後始末をしていたらしいからな」
「そんな人間、それまでよく組織においておきましたね」
「そこが権田のいやらしいところさ。相手の弱みを握って骨までしゃぶる。根っからのワルだよ。あいつは」
「根っからのワル……ですか？」

　後藤にとって組織の、それも中枢に行け行くほど、管理体制がしっかりしていて、プロ集団として行動原理が当てはまり、何かあっても組織と警察との間の妥協点と言うものがあるというのだ。鳴門刑事には今ひとつ納得の行かないこともあるが、少なくともこの街の――笠井町の安全がそれで保たれるのなら、そういうこともあるのだと自分を納得させることに少しなれた頃だった。後藤はそれを最大限に使い、もっとも最良の妥協点を見つける。だが、末端に行け行くほど、より個人的な要因による犯罪が増えてくる。ことが組織的な怨恨や経済的な問題に根がある場合は組織の論理で何とかなるが、こと個人的な問題になれば、そういう制御が及ばない。権田はそういう男である。

「それにしても、権田が再び捜査線上に上がったこのタイミングでっていうのはどうなんです？単なる偶然でしょうか？」
　鳴門刑事は後藤の返事を待ったが後藤は何も答えない。後藤自信、その疑問を誰かにぶつけたいと思っていたからである。そしてそれに答えられそうな男はあの男、下駄の男しか思いつかなかった。

　下駄の男――尾上弥太郎。江戸川南警察署の組織犯罪対策部、いわゆるマル暴の後藤刑事と鳴門刑事は５日ほど前、ある交通事故を追いかけているうちにこの男と接触した。その交通事故とは暴力団関係者が次々と雨の日に笠井町で交通事故で死亡するというものだった。拝み屋の自称
　尾上弥太郎の協力で事件の真相に迫ることが出来た。しかしそれは、警察が処理できるような内容ではなかったのである。そして今回の事件も、結果的に後藤たちの手に負える事件ではなかった。その事件が始まったのは２日ほど前のことである。

つづく

# 蝉時雨②～下駄の男シリーズ

蝉時雨②

「ちぃ、なんて暑さだ。こう暑くちゃ、ぼとぼち昼寝も知れられてねぇ」
　笠井町の北。古池公園という大きな公園がある。公園は噴水、大きなコンクリート製のタコの形をした滑り台にはいつも子供たちの笑い声が耐えない。公園の敷地内に小さな古い池があり、子供がザリガニを取って遊んだりしている。夏休みだというのに公園に人の姿はない。暑すぎるのである。コンクリート製の滑り台は肌が触れようものなら火傷するような熱さだし、木陰ならまだしも直接日光が当たるところにいては、あっという間に汗でシャツがびっしょり濡れてしまう。いくら水分を補給しようとも追いつかない。

　権田聡は、冷蔵庫を開けて頭をその中に突っ込んだ。中には３５０mlの缶ビールが２本――発泡酒である。権田はこれといった定職に就かず、笠井町でぶらぶらとしながら暮らしている。ある暴力団組織に属していたこともあるが、分け合って組織からは抜けている。７年前のことである。組織から抜けたからといって権田の生活が何一つ変わるわけでもない。ゆすりたかりの類でわずかな稼ぎを得ている。少しばかりやばい仕事もするが、権田は要領がいい。用心深く、執念深い。誰かの弱みに付け込み、常に有利な交渉材料――ゆすりたかりのネタを持っている。抜け目がない。

　だが、最近はすっかり笠井町も住みにくくなってきた。権田にとって都合のいい連中が次々と排除され、笠井町の勢力はあるひとつの組織によって牛耳られようとしている。あいにく権田にはそっちの筋にコネクションはなかった。いや、なくなってしまったのというのが正しい。

「まったく、加藤があんなことになっちまうなんて、ついてねぇぜ」
　加藤三治は加賀組に所属していながら競合相手である白鷺組に情報を横流しし、小遣い稼ぎをしていた小悪党だが、そもそもその道先案内をしたのが権田である。権田は加藤をそそのかし、白鷺組のスパイのようなことをさせていたのだ。当然権田もその恩恵を授かる。しかし、その加藤が数日前、不可解な交通事故でこの世を去り、権田は大事な食い扶持を失くしたまでか、身の危険もあるという状況なのだ。加藤が死んだことで、それとわかるような証拠が出ないとも限らない。そうとなれば、自分の身も危ない。そもそも加藤の死は、単なる交通事故だとは思えない。これはきっと誰かの差し金、加賀組の切れ者、７代目組長、榊原は油断ならない男である。白鷺組の組長は自殺した。自殺は自殺だが、それは死因が自殺であって、中身はおそらく……

「消されたに違いない。だが、いったい誰なんだ？組長を消すほどの実力者がいるというなら、あの噂は本当だったのか？」

「あの噂」というのは、政界、経済界、警察、暴力団に対して裏で大きな影響力を持つ人物がいるという噂である。昨今、この人物が精力的に世の中に影響を与えるようになり、政治経済におけるパワーバランスが大きく変わろうとしているというのだ。

「こういうときは、動かないほうが利口だ。下手に動けば目をつけられる。それに俺みたいな小物を相手にしている暇は、今はないだろうからな。まずは刺激しないことだ。それにしても、この暑さだけはどうにもならんなぁ」

　手の甲で首筋の汗をぬぐう。シーンと静まった平日の昼間。ぎらぎらと照りつける太陽。風がない。窓を開ければ外の熱気が洪水のように部屋になだれ込む。ふと権田は口にした。

「そういえば、今年は蝉が鳴かねぇえな。いつもならうるさくて仕方がないのにな。まぁ、静かでいいや」
　権田は再び万年床に横になり、転寝を始めた。そして権田は夢を見た。それは７年前、権田が組をやめるきっかけになった事件。一人の女を殺めたときの夢だった。

「ねぇ、私のお金、あれは私のお金なのよ。返して、返してよ！」
「うるせえなぁ、そんなに返してほしけりゃ、競艇場にいくんだな。まぁ、返してはもらえねぇけどな」
「どうして、どうしてあなたはそうやって、人様のものを」
「なんだと、このアマ！自分のスケの銭使って何が悪いんだよ」
「訴えてやる」
「警察にか？無駄だ、無駄だ。そんなこととりあっちゃもらえねぇよ。こうして、一緒に住んでいるんだ。そんなことにいちいちかまってられるほど、ここの警察は暇じゃないんでね」
「警察じゃないわ。組の人によ。あんたがどれだけ、やばいことしてるかってこと、みんなバラしてやる」

　権田はキレた。自分が誰かの弱みに付け込んでどれだけのことをしようが、微塵も後ろめたい気持ちにはならない。だが、自分の弱みを握られるのは、何よりも許せない。地味でまじめ、働いても金の使い道を知らない女。そんな女を権田は何人も食い物にしてきた。この坂口浩子という女も、そうだった。ちょっとした演出とまじめな女があまり関わることのないようなワルの魅力を見せるだけで、大体はうまくことが運ぶ。あとは相手があきれていなくなる直前までしゃぶりつくす。それだけだった。

「てめぇ、ふざけたことぬかしてんじゃねーぞ、コラァ！」
　平手で３発殴った後、勢いあまって突き飛ばした。それで女はおとなしくなった。

「おい、いつまで寝てるんだ」
　２０分か３０分たってもピクリとも動かない女に声をかける。反応はない。
「いい加減……」
　権田が女をゆすったとき、女はすでに息をしていなかった。運が悪かった。そして打ち所が悪かった。坂口浩子が倒れたところに３キロの鉄アレーが置いてあった。権田がさも、自分が普段から鍛えているところを見せるための小道具だ。実際権田はほとんどこれを使ったことがない。

「あー、あ。面倒なことになっちまった。こりゃ、始末書じゃすまないな」
　権田はすぐさま弱みを握っている幹部クラスの人間に電話をした。死体を片付ける段取りと、自分が組織に迷惑をかけないように責任をとるという形をとり、権田は組を抜けた。死体は権田のアパートから運び出され、どこかに埋められた。権田はその場所を知らない。権田は死体を引き渡す際に、わざと女の顔を判別がつかないようにぐちゃぐちゃにした。こうすることで、お互いに誰が誰を殺し、どこに埋めたかをわからなくする。女の身元がわかるようなものは、焼却処分した。あとは女がここを飛び出して、地方から家族宛に携帯から通話記録を残したり、葉書を出す工作をする。それらは全部違う人間がやる。権田はこれまで、この手の仕事を何件も請け負ってきた。

「どーってことねー。いつものことだ。いつもの……」
　ひどい寝汗だった。シーツは人型に汗の跡がついている。いや、それ以上に怖気のするような感覚。三半規管がおかしくなりそうだ。まるで自分の空間的な居場所がつかめないような不愉快な浮遊感。

「音……何の音？」
　権田が目覚めたそのとき、いっせいに何かの音が権田の三半規管を直撃して感覚をおかしくしたのである。

「蝉？蝉か？」
　最初、まったくなの音なのかわからなかった。耳をふさいで始めてそれがわかった。あまりにも大きすぎて……いや、音源が多すぎて、何の音だかわからなかったのである。
「いったいどこでーー」
　権田が窓を開けて外を確かめよとしたそのとき、最初はカーテンが閉まって、部屋に明かりが差さないのだと思った。しかしそれはそうではなかった。権田のアパートのベランダの窓は、すべて大量の蝉に覆われていたのである。

「な、な、なんなんだ。これは！」

　権田はカーテンを閉めた。それでも音は少しも衰えない。窓がジンジンと共鳴している。
「ふ、ふざけるな。いったい、誰のいたずらなんだ」
　権田は玄関から外の様子を伺おうとしたが、やはり玄関横のキチンの窓にもびっしり蝉が張り付いていいる。
「やばい、もしや……トイレの窓」
　権田のアパートのトイレは小さな窓があり、普段はそこを開けっ放しにしている。窓が閉まっているのに蝉の音が少しも遠くに感じない理由がようやくわかった。
「ち、畜生。誰だ！誰の仕業だ！」

　蝉時雨――夏の日、林や森の中で蝉が大量に鳴くとまるで雨のように聞こえる。権田の部屋は局地的な蝉時雨によって洪水状態になっていた。

「こ、こんなところにいられるか」
　権田は意を決して外に出ようと玄関のドアノブに手をかけた。

「なんでだ！なぜ開かない！」
　権田がいくらドアノブをまわしても鉄製のアパートのドアはビクともしない。そんなことはありえない。ありえないが、今こうして、事実権田は自分のアパートに閉じ込められているのだ。ドアを叩く。助けを呼ぶ。蝉の鳴き声がまた一段と激しくなる。権田の声は、外の誰にも聞こえなかった。

「こんなことありえない。いったい何だって言うんだ！誰も助けに来ないのか？」
　当然騒ぎになってもおかしくない状況だ。アパートが蝉に囲まれているのだ。周りの住民だって気づくはず――周りの住民？

「そうか、もしかしたら、今日、このアパートには俺だけしかいないのか」
　このアパートはいわくつきのアパートで、権田を始め、不法に入国した人間や、一時的に身を隠すために住んでいる人間が多い。権田も普段からここにずっと住んでいるわけではない。何もやることがないときに横になるだけの場所である。しかもすぐそばには大きな公園があり、普段であれば蝉がずっと鳴いている。たまたま今年は蝉が鳴き始めるのが遅かっただけで、蝉の音自体は異常ではない。暑さのあまり、人通りも少ない。外からの助けは、当てにできないかもしれない。

「くっそう。なんだっていうんだ。気が狂いそうだ……この音、この音」
　否応なしに蝉の鳴き声が権田の耳を攻め立てる。ミンミンという音もあれば、ジージーと言う音もある。ヒグラシいるようだ。しばらくすると、その音はまるで何かの意味を持ったような不協和音のシンフォニーを奏で始めた。

「女、女のうめき声、泣き声か、こ、これは、こいつは、あの女か……」

　キキキキキキ

　ギーギーギーギー

　ぐ～る～じーい～じーい～

　キキキキキキ

　ギーギーギーギー

　ぐ～る～じーい～じーい～

　それは悲痛な女の叫び。あるいはうめき声。鳴き声。うらみつらみを訴えるうめき声。

　５分もしないうちに、権田は嘔吐した。しかしトイレにはいけない。洗い物がそのままになっている台所に嘔吐した。嘔吐した目の前のガラス戸には蝉がびっしりと張り付いている。それを見てまた吐き気を催す。

「助けて……助けてくれ」
　携帯電話を手に取り、片っ端から電話をするが、通じはするものの会話ができない。蝉の音がうるさくて、相手の声も、たぶん、こちらの声も聞こえないのだ。

「メール、メールなら」
　しかし、まともに文書が作れない。蝉の音に神経がすっかり麻痺してしまっている。散文的な文章しか書けず、意味不明なメールを片っ端から送りつけるも誰からも返事が来ない。

　権田はどん詰まりの窮地に追い込まれた。

つづく

# 蝉時雨③～下駄の男シリーズ

蝉時雨③

「おー、団十郎。どうした、蝉なんぞくわえて、蝉じゃご褒美はあげられんぞい」
　団十郎とは荒川の河川敷に住み着いている野良猫のことである。といっても誰もがその猫のことを団十郎と呼んでいるわけではない。黒い毛と白い毛がバランスよく生えた、一見どこにでもいそうな野良猫だが、この猫を正面から見て、その異常さに気づく。顔の模様が白と黒、左右にきっちりと分かれているのである。

　ミャーウォン

　くわえていた蝉を地面に置き、少し低いうなるような声で団十郎は鳴いた。かわいいというよりは、気品と妖しさを含んだ、妙に耳に残る鳴き声である。

「どれどれ、うん、こいつは……ちょっとした変わりダネだな。わずかながら瘴気が残っておる。ちょっとした呪詛じゃな……団十郎、こいつをどこで手に入れた？」

　ミャーウォン

　団十郎はゴロゴロとのどを鳴らし、男の足に顔を擦り付けると、ふっと背中を向け歩き出した。
「おー、案内してくれるのか。賢いのぉ、団十郎は」
　そういって男は歩き出す。

　カラン、コロン、カラン、コロン

　下駄の音、下駄の男は団十郎の跡を追いかけ、荒川の土手を歩き始めた。紺色の作務衣からのぞく手足は程よく夏の日差しで焼けている。５０歳か６０歳か、遠目にはそう見えるがそばで見ると肌つやがよく、何よりも活力にあふれている。まるで年齢がつかめないが、その顔つきにはあらゆることを経験してきたような風格がある。

　拝み屋――原因不明の病や不幸な事故が続くなどといった人身の不安を解決する職業。祈祷師、占い師、陰陽師などとも言われる。この下駄の男は時に拝み屋と称し、名を尾上弥太郎と名乗る。どのような目的でこの街――笠井町に現れたのかは、まだ一部の人間しか知るところではない。

「まったく、あの塔のおかげで毎日退屈しないわい。このようなものが出てくるのも、あの塔の影響よ」
　下駄の男は荒川の土手の江戸川区側から反対側を眺める。そこにはまだ建設途中の巨大な塔――東京スカイツリーが禍々しくそびえ立っている。下駄の男はそれを『あの塔』と呼び、ある男は『闇の塔』と呼ぶ。『闇の塔』と呼ぶ男と下駄の男とは少なからず、因縁があるようである。

「そういえば今年はまだ蝉の声を聞いてなかったのう。と、いうことは７年前は冷夏じゃったかのう？」下駄の男は作務衣の袂から端末を取り出した。iPhonである。下駄の男はネットに接続し、検索サイトで冷夏に関する過去の記録を検索した。「なるほど２００３年か。確かに冷夏じゃ。７月中は蝉は活動してなかったということじゃな」その風貌に似合わず、いまどきの電子機器を難なく使いこなす。下駄の男は公の機関にハッキングを仕掛けるほどの実力の持ち主であることを知るものは少ない。その中に江戸川南警察署の後藤刑事がいる。後藤と下駄の男とは、つい数日前に起きたある事件で知り合うことになった。

　ミャーウォン

　団十郎は、少し歩いては後ろを振り返り、下駄の男を催促するように鳴いた。
「ワシもさすがにこの暑さにはかなわんわい」
　下駄の男の頭は見事に禿げ上がっている。拝み屋を生業とする下駄の男にとって、髪の毛のようなものは、己に下手な術をかけられないための予防策である。下駄の男は持っていた手ぬぐいを頭にかぶせて縛り付けた。

　団十郎は暑いコンクリートの上を避けて日陰の中を歩いていた。やけに涼しげな団十郎は、どこのとなし浮世離れした生き物のように見えた。団十郎は人や車の通りの少ない道を歩いていった。下駄の男は時々iPhonを操作しながら、団十郎のあとをついていった。程なくして古池公園に差し掛かったところで、下駄の男の足が止まった。

「蝉時雨じゃな」
　蝉の声が、音の塊となって空から、いや四方八方から降りかかってくる。地中深くに７年もの月日を暮らしてきた蝉が、この日いっせいに地表に現れた。それも大量に、局地的に。

「しかも泣いておる。叫んでおる。恨んでおる。怨念か執念か、これは間違いない。女じゃな」
　団十郎は公園には入らずに、公園の横の通りをぐるりと回る形で公園の反対側へ向かっていた。尻尾を太くし、激しく耳とひげを動かしながら、確かな足取りで歩いてゆく。

「団十郎はたくましいのぉ。さすがじゃわい」

　ふと団十郎が歩みを止め、すっと公園の中に消えていった。自分の役目はここまで。あとは任せたという感じなのか。

「良くぞここまで案内してくれた。あとは大丈夫じゃ。礼はちゃんとするでの」
　団十郎の後姿にそう話しかけると、下駄の男も戦闘態勢に入った。あたりに気を配り、耳を澄ませ、匂いをかぎ分ける。あたりに人はいない。それはまるで蝉時雨が結界のような役割をしているようだった。そう、ここは異界である。

「さて、こいつは人のなせる業なのか、それとも妖鬼かの」
　道端に弱った蝉が落ちている。まだ息絶えてはいないが、あと数分も持たない様子だ。何が蝉たちをここまで駆り立てているのか。やはり、蝉には少しばかりの瘴気が残っている。

　瘴気――簡単に言えば悪い空気である。古代から病気は「悪い土地」「悪い水」「悪い空気」などにより発生すると考えられていた。それを医学的に真剣に治療に取り入れていた時代もある。あるいは呪いや祟りといったものという考え方をする地域もある。一般にそれを大量に長期間、体に吸い込めば悪い病気になり、体の弱い者なら死にいたることもあると考えられている。

　瘴気の強いところをたどる。その方法が手っ取り早いが、それは同時に身を危険にさらすことになりかねない。下駄の男にはこれといって準備がない。まずはこれが何者かが誰かに危害を加えようとしている人為的なものであるのか、あるいは偶発的、自然発生的なものであるかを見極めるための手がかりでもつかめれば、ひとまずは十分である。

「さて、どうやらここのようじゃが。どうしたものかのぉ」
　５分もしないうちに下駄の男は、一見のアパートにたどり着いた。そこは人目につきづらい、死角になった建物。木造あるいは軽鉄骨の小さな２階建てのアパートである。

「どうやら２階の角部屋じゃな。どれどれ、住んでおるのは……」
　下駄の男は郵便受けで名前を確認しようとしたが、書いていない。郵便物を勝手に見るのは犯罪である。チラシや不要な郵便物を捨てるためのゴミ箱がおいてあった。下駄の男はその中から、難無くその部屋の住人の名前を突き止めた。

「ややこしいことをしてなければ、この部屋には権田聡という人間が住んでいるのか。ふむ、念のため調べてみるかのぉ」
　下駄の男はiPhonを取り出し、自宅のPCをリモート操作し始めた。いくつかの手順を手早くこなし、あるデータベースで権田聡という名前を検索した。

「ビンゴじゃ。こりゃ、あの男に動いてもらうかのぉ」

　こうして下駄の男は再び後藤と接触することになる。しかしそれは、後藤の都合もあって、翌日の朝ということになった。下駄の男は、仕方がなく、その場を後にした。それは権田にとっての不幸だったのかもしれない。いや、坂口浩子の執念が勝ったのだと、後に下駄の男は口にすることになる。

　江戸川南警察署　組織犯罪対策課――

「確かに権田は以前捜査線上に上がっていた人物ですが、だからといって何でもかんでも私が動けるわけでは……わかりました。まぁ、はたけば埃はいくらでも出てくる男です。これまでは何度か逃げられてますが、案外こういう何もないタイミングで踏み込めば、何か出るかもしれません。この前の借りもありますし、明日の朝までにこちらも何か材料をそろえて起きます。えー、では、明日１０時に現地で。はい、はい。それじゃぁ」
　電話を切ると後藤は鳴門刑事を呼び出した。
「なるとー！鳴門いるかぁー！」
「はい、何でしょう」
　鳴門刑事はちょうど外から帰ってきたところだった。手にはハンバーガーショップの袋を持っている。
「なんんだ。昼飯、まだだったのか？」
「えー、食べます？」
「いらねーよ。よく冷めたハンバーガーとか食えるなぁ」
「あれ、なんでわかりました？」
「じゃなきゃ、お前が俺に勧めるかよ。自分で食っちまうだろう？」
「あらら、バレバレですね。買ったいいけど食べ損ないまして」
「それ食ってからでいいから、ちょっと調べてほしいことがあるんだが」
「なんです？」
「権田聡ってしっているか？」
「権田聡……ちょっと記憶には……」
「あー、そうだろう。この男はお前がこっちに赴任する前に組をやめているし、その組ももうないからな」
「その男がどうかしたんですか？」
「いや、ちょっと頼まれごとでね。この男のこと調べてくれないかって、お前の知っている男からさ」
「僕の知っているって、誰です？」
「拝み屋のおっさんさ」
「ああー、あの下駄の男ですか。たしか尾上弥太郎でしたっけ？」
「あーそうだ。その尾上弥太郎から電話があってさ。調べてくれって。ちょっとその男にあい

た言って言うんだ」
「何かの事件……ですかね」
「さぁ、ちょっと急いでいる様子だったんだが、ほら、こっちもいろいろとあるだろう？」
「えぇ、まぁ、そうですけど。あの老人がわざわざ電話をしてくるってことは……」
「あー、あまり無碍にもできないし、なんていうの、いやな感じ……するよな」
「後藤さんをして、無視できない男ってわけですか」
「おいおい、なんだよそれ」
「いや、後藤さんがほかの誰かを、そんなふうに評価することは珍しいなぁって思っただけで」
「フン！なにつまらないこと言ってやがる！さっさと冷めたフィレオフィッシュ食って、仕事しろ！」
「はーい」

　自分のデスクに戻りかけた鳴門刑事が袋からフィレオフィッシュを取り出したとき、ある疑問がわきあがった。
「あ、あのー、後藤さん。どうしてハンバーガーじゃなく、フィレオフィッシュだって、わかりました」
「フン！、今なら平日特別割引だろうが！」
　ふと見ると、後藤のデスクのゴミ箱には鳴門刑事と同じハンバーガーショップの袋が捨ててあった。

　デスクに戻った鳴門刑事は、冷めたフィレオフィッシュを食べながら、権田についての過去の資料に目を通した。その中で気になる名前を発見するのにさほど時間を要さなかった。
「後藤さん、この名前、これってあの加藤三治ですよ。権田は少なからず、加藤と関わりがあったようです。いくつかの恐喝未遂事件やそのほかの容疑者の中に二人の名前が」
「なるほど。権田と加藤はもともと同じく組で、そこが解体になった後、それぞれ別の組に入り、後藤はその後組もやめている。しかし、その後も二人に何らかの関係があったということは考えられる。加藤の遺留品の携帯に権田の番号あるか？」
「ちょっと待ってください。そいつは、ちょっとすぐには……ちょっと時間かかりますね」
「どう思う？鳴門」
「急がば回れということわざがあります」
「回れっていうのは、俺たちの世界じゃ動けってことだろう？」
「そうですね。あの老人に連絡して、今夜にも行くってことにしてはどうです？」
「そうだな。しかしあの老人への連絡の仕方がわからん」
「あー、それなら、大丈夫です。つぶやけって、言ってましたよね」
「ああ、確かそんなこと、言ってたな」
「そっちは僕に任せてください。多分連絡取れると思います」
「ああ、すまんが頼む。おれは、ちっと一足先に現場に行って来るわ」

「えー、また単独で動くつもりですか」
「これはまだ捜査じゃないだろう？」
「それは理屈です。それも下手な理屈ですよ」
「下手でも何でも理屈は理屈だ。お前もそんなに時間はかからないだろう」
「わかりました。でも絶対に一人で踏み込んだりしないでくださいよ」
「ああ、わかってるって。ルールは守るさ。できる限りな」

　後藤は鳴門刑事の肩を叩き、警察署を後にした。鳴門刑事はすぐさまパソコンの画面に向かい、ツイッターにアカウント登録をした。いくつかの考えられるキーワード。拝み屋、尾上弥太郎、下駄の男といった言葉を盛り込んだ文章と「予定変更　連絡されたし」と入力した。

　しばらくすると、尾上弥太郎という男から電話がかかってきた。
「鳴門です。はい。その節は。で、実は予定を早めて……えぇ、すでに後藤は現場に向かっています。僕もすぐに向かいます。はい。じゃぁ、現地で」

　後藤が出た３０分後、鳴門刑事は後藤を追いかけて警察署をでた。こうして再び、下駄の男と後藤、鳴門刑事が会うことないなる。ひとりの男の死体の前で。

つづく

# 蝉時雨④～下駄の男シリーズ

蝉時雨④

　江戸川南警察署は、笠井町の中心地からは少し離れている。離れているといっても車で１0分程度の距離だ。笠井町ーー東京方面は荒川、千葉方面は江戸川に挟まれたいわゆる海抜ゼロメートル地帯である。後藤が下駄の男と約束した場所、古池公園は警察署から街の中心地を挟んで反対側に位置する。それても３０分もかからない。

「蝉が……鳴き始めたか」
　後藤が警察署を車で出て、最初の信号待ちをしたとき、道路沿いの植え込みの木から蝉の鳴き声が聞こえた。
「そういえば、今年はまだ蝉の鳴き声を聞いていなかったっけな？去年に比べると随分遅かったなぁ」

　ジージージージー……

　後藤の感傷的な気持ちをあざ笑うかのように、蝉は鳴いている。いや、蝉も泣いているのか。昨年の夏ーー確か、今年以上の猛暑だったと後藤は思い出していた。
「墓参りにいかないとなぁ」
　信号が変わる。後藤は蝉の鳴き声から逃げるようにアクセルを踏み切る。だが、いくら車を飛ばしても蝉の鳴き声は後藤を追い回す。まるで夜空に浮かぶ月ようにーー

「どうしてお月さんは、僕の跡をついてくるの？」
　後藤は少年のその質問に答えることが出来なかった？
「さぁ、なんでかなぁ？」
「おじさん何にも知らないんだね。パパならちゃんと教えてくれるよ。ねぇ、パパはまだ帰ってこないの」

「ちぃっ！これから毎年、蝉の鳴き声を聞くたびに思い出しちまうのか。まったく！」
　去年の夏、後藤の同僚　鈴森一郎が病に倒れたーー骨髄性急性白血病。後藤と組んだパートナーは過去３人が死んでいる。事故死、殉職、そして病死である。いつしか後藤の周りに噂が立つ。後藤と組むと長くはないと……
　後藤は、病に倒れた同僚の家族とは生前から親しくいた。後藤の意に反して同僚の一人息子にひどく気に入られていた後藤は、不器用ながらも同僚の遺族ーー妻　純子と一人息子　亮太と付き合っていた。

　最初は感傷的だった後藤の気分は、笠井町の中心地を走り抜けることには、すっかり別なものになっていた。
「おいおい、いくら出足が遅いからって、この数は異常だな」
　街中いたるところで蝉が鳴いている。道路の植え込みの木に２～３匹。いや、あるいはもっとかもしれない。いたるところで蝉の鳴き声が聞こえる。しかし、街行く人は、そのことに気づかないフリをしているかのように、まったく蝉に関心を持たない――暑すぎるのだ。

　目的地に近づくにつれて、蝉の鳴き声は激しくなる。緑の多い公園に向かっているのだから当たり前といえばそうなのだが、後藤は妙な不安を覚えていた。後藤の悪い予感は、本人の期待にそぐわずよく当たるのだった。
「このあたりのはずだが」
　後藤は車を道路わきに止め、車を降りた。夏の暑い日ざしと蝉の鳴き声がいっせいに降り注ぐ。思わず後藤はよろけそうになる。息苦しいほどの熱波と音の塊が後藤の頭上に降り注ぎ、一瞬、前後左右の感覚を失いそうになる。「なんて――」後藤は口に出して何かを言おうとしたが、自分の声が自分の耳に入ってこない。まるで、蝉が何者も近づけまいとするかのように激しい怒りのエネルギーの塊が後藤に襲い掛かっているかのようであった。

「こいつはただ事じゃないな」
　後藤の悪い予感はまたしても的中しようとしていた。

「開けてくれ！頼む！開けてくれ！」
　その声が後藤に届くことはなかった。権田がドアを叩くたびに、蝉がザワザワと蠢く。蝉はまるで何かに引き寄せられるように権田のアパートの玄関のドアにへばりつく。力尽きた蝉の屍骸が廊下中に散乱している。しかし、その有様も外からは死角になっている。完全な死角ではないが、見ようと思わなければそこに目は行かない。権田の精神状態はすでに限界点をすぎていた。ドアを叩く手は紫色にはれ上がり、爪の先からは血がにじみ出ている。権田には人間としての権利は何一つ許されていなかった。この状況を打破すべき手立てを冷静に考える事ができない。蝉の鳴き声は権田が３０秒以上一つのことを考えるのを許さない。窓から覗く数万を越える蝉の視線が、権田の平常心を奪う。しかもトイレにはすでに蝉が侵入している。権田は追い込まれていた。

「助けて、助けてくれー！」
　権田は頭をドアに打ち付け、床にのた打ち回る。どんなに耳をふさいでも、蝉の鳴き声は止まらない。いや、すでに権田の耳には蝉の鳴き声には聞こえていたない。

ユ～ル～サ～ナ～イ
　　ユ～ル～サ～ナ～イ

シー、シー、シネー～
　　シー、シー、シネー～

ニ～ガ～サ～ナ～イ
　　ニ～ガ～サ～ナ～イ

ク～ル～シ～メ～
　　ク～ル～シ～メ～

それは権田が命を奪った女ーー坂口浩子の呪詛のうめき声。権田はすでに１２時間以上経つ

立ちくらみや目眩など平衡感覚が失われ、吐き気がする。頭部のダメージは深刻で、耳鳴りが止まず、頭痛や帽子をきつく被ったような圧迫感が襲う。やがれ、全身に震えが始まり、胸の圧迫感が酷くなり息苦しくなる。いっそう気を失えばそれで楽になれるのかもしれないが、蝉がそれを……坂口浩子がそれを許さなかった。

気を失えばそこには悪夢が待っている。目を瞑れば、無数の蝉が四方から権田を囲む。やがてその中から腐乱した髪の長い屍骸が現れ権田に迫ってくる。権田が逃げようにも足が動かない。何者かに足を掴まれて動けない。足元をみるとそこには地中から生えた二本の白い女の腕が権田を足首をしっかりと掴んでいる。無理に引き離そうとすると、地面が盛り上がり、人間の頭が地中から現れる。頭から血を流し、血に染まった目で権田を睨みつけるその表情は、まさに鬼の有様である。

恐怖のあまりに権田が意識を取り戻すと、そこは当たり前のように権田の部屋だ。そして一斉に激しく鳴り響く蝉の鳴き声ーー蝉時雨が権田を更なる絶望の深淵へと引き込む。もはや権田に逃げる術はない。

後藤は、思わずたじろぎ、そして車の中へ戻った。車の中であれば普通にしていられる。エンジンをかけ、エアコンを最大にし、ラジオをかける。これで蝉の鳴き声はあまり気にならなくなった。タバコをくわえ、外の様子を車内から伺う。これといってかわったことはないように思えた。
「さて、どうする？　相変わらずの嫌な予感はしているが、どうやらこれも俺たちの領分じゃな

さそうだな」
　結局後藤は、その場で鳴門と下駄の男を待つことにした。鳴門刑事は既に署を出て車を拾い後藤を追いかけていた。鳴門刑事から連絡を受けた下駄の男は、古池公園中を散策していた。後藤とは目と鼻の距離にいたものの、下駄の男は瘴気の発生している場所を突き止めようとしていた。権田のアパートで起きていることは現象に過ぎない。瘴気の発生源は近いが別の場所にある。そこに何があるのか？そこに誰がいるのかをつきとめよとしていた。

「どうにもおかしなことじゃ。こんなところにあるはずがないものがある。これはまさしく、死臭じゃな」
　東京江戸川区には６０万人以上の人間が住んでいる。そんな街の公園に死臭――それも人の死体の匂いがするはずがない。だが、無数に大発生している蝉からは確かに死臭がする。つまり、この公園のどこかに人の屍骸が埋まっており、そこからこの蝉は発生したのではないか？　下駄の男はそう睨んで公園の人目のつかない場所を中心に「何か」を探していた。そしてついにそれは見つかった。

「これか！ここじゃな！」
　下駄の男は公園の池の周りを歩き、樹木が生い茂る人の死角に鳴る場所で、それを見つけた。
「凄い数よのぉ～。そして凄い瘴気じゃ」
　下駄の男の目の前の大きなブナの木がありえない色で埋め尽くされている。それは大量のガニ――蝉の幼虫の抜け殻である。
「７年、ここに埋まり、地中深くから男を呪い、それを成就させたか。まさに女の執念よ」
　下駄の男は女と言い切った。そうと確信するに足りる物証や論理的に推測される何物もそこにはない。ただ、直感でそれは女であると感じたのである。あえてその理由を挙げるとすれば、ブナの木にしがみついた大量のガニの抜け殻が、女の姿を象っているように見えたことくらいである。

「まだ、そこにおるのか？」
　下駄の男は、ガニの抜け殻の固まりに語りかけた。
「悲しいのぉ。しかし、鬼を撃つのに、自らが鬼になっては何も浮かばれまい。そなた、そこに埋まっている者の縁者か？」

　しゅ～～～～～

　それは普通の人の目には映らない無味無臭のガスのようなものである。しかし、それを大量に吸い込めば、健康に自身のある若者でも吐き気くらいはするだろう。体力のないものならおそらく、立っていられなくなるような悪い気の集まり――瘴気がブナの木に折り重なったガニの抜け殻の隙間から噴出す。

「そのような外法、いかにして手に入れたのじゃ」
　外法――代表的なものに死者の魂を蘇らせたり不老不死の力を得るものがある。一般にそれは伝説、或いは作り話と言われている。しかし、呪詛の世界には、様々な方法があり、その数だけ外法と呼ばれるすさまじい方法がある。呪いとは普通、呪う相手を苦しめ、時に死に至らしめるとも、呪いをかけた人間は、何かを犠牲――生贄に捧げることはあっても、自らの命を絶つことはない。しかし、呪詛の中には自らの命を賭して、呪う相手に大きなダメージを与える禁断の法――外法が存在する。

「ワ・タ・シ・ハ　ア・ネ・ノ　ム・ネ・ン・ヲ……　ム・ネ・ン……　ム・ネ・ン……」
　下駄の男が身構える。作務衣の袂からなにやら取り出す。
「邪魔をするヤツは、コ・ロ・ス　死〜〜」
　ブナの木がガサガサと音を立てる。公園の林で泣いていた蝉たちが一斉に羽ばたく。カサカサと羽音を立て、四方八方に飛び回る。
「これでは、分が悪いかよ」
　下駄の男は、一歩下がり、周りをけん制する。そしてまた一歩下がる。
「ひとまず退散じゃな」
　下駄の男は振り向き一気に駆け出す。その後ろを瘴気を帯びた蝉の群れが追いかける。下駄の男は一瞬振り向くと、蝉の群れに向かって右手で何かを投げつけた。砂のようなそれは群れの先頭に当たり、群れは何かに驚いたかのように四散する。下駄の男の投げつけたもの――それは清めの塩であった。
「しかし、この量では、これが精一杯じゃ。とてもじゃないが、全部は防ぎきれん」

　蝉の群れは下駄の男の追跡を諦めたようだ。
「まずは、あの男と合流じゃな。まったく。ワシが誰かの手を借りねばならんとわな！」
　そういいながらも下駄の男は後藤との再会を決して嫌なものには感じていなかった。そしてその事が、更に下駄の男を不機嫌にさせた。そして何よりも事態が最悪の状況であることに、激しい憤りを感じていた。

「まったく、罪なことをしおるわい。いったい誰がこんなことを……確か、妹とか言っておったな」
　下駄の男は、公園の池を離れ、約束の場所へと急いだ。陽射しは激しく地面に照りつけ、蝉は一層激しく鳴き始めた。

つづく

# 蝉時雨⑤～下駄の男シリーズ

蝉時雨⑤

　鳴門刑事は同僚の車に同乗し現地に到着したのは夕方３時半になろうとしていた。そこには既に下駄の男と後藤がなにやら話をしてた。鳴門刑事はまず、蝉の鳴き声に驚き、まるで気温が下がらない暑さに不快感を表した。同僚の車がいくのを見送ると二人に大きな声で挨拶をしたが、まるで届かない。蝉の鳴き声にかき消されてしまう。鳴門刑事は自分の声が相手に届き、相手の声が自分に届く位置まで近寄ろうとしたが、下駄の男と後藤は鳴門刑事に顔で合図をして、行くべき方向を促した。権田のアパートの方向である。

「すごいですね。なんなんです？この蝉の鳴き声――これは尋常じゃありまっせんよ」
　鳴門刑事は後藤のすぐ横に駆け寄り、大きな声で怒鳴った。
「あー、おもかく権田の様子を見に行こう。どうやら『ただ事』じゃあなさそうだ」
「元気にしておったか？鳴門刑事」
　こんな酷い雑音の中でも、下駄の男――尾上弥太郎の声は、妙にきれいに通る。
「はい。おかげさまで。というか、あの事件の事後処理がいろいろ大変で……」
　『あの事件』とは、ほんの数日前、笠井町で連続して起きていた謎の交通事故――後藤や鳴門刑事がマークしていた暴力団関係者が次々と雨の日、車にはねられて死亡するという事件のことを指す。この事件をきっかけに、後藤と鳴門刑事は、拝み屋――尾上弥太郎と名乗る謎の人物、下駄の男に出会ったのであった。

「そもそもあの事件に関わらなければ、権田という男は、僕たちの捜査線上に上がることはなかったでしょうね」
「拝み屋のおっさん、これはどちらかといえば、我々れの借りではなく、貸しですからね」
「ぬかせ！権田の尻尾もつかめないお主らに、そんなこと言われる筋合いがあるかよ」
「しかし、法治国家では、勝手に他人の住居の中には入れません。今回はやはり貸しですからね」
「ふん！それは事件が解決してから言うんじゃな」

　車を止めてある場所から、権田のアパートへは、ほんの数分である。公園脇の通りから、一本細い道を入り、左に曲がったところにある。人通りからは完全に死角になっている。新聞配達や郵便配達でもなければ、こんな場所にアパートがあることを知る人はいないだろう。しかも外からは、ほとんど生活感がうかがえない。

　一歩近づくたびに、蝉のざわめきは一層激しくなり、鳴門刑事は思わず耳をふさいだ。権田の

アパートが見える曲がり角に差し掛かったとき、急に蝉の鳴き声が止んだ。三人はその場に足を止め、顔を見合す。下駄の男が叫ぶ。「しまった！まずいぞい！」下駄の音が鳴り響く。後藤がそれに反応し、鳴門刑事は二人が曲がり角に姿を消したところでようやく動き出す――出遅れた。

　うわぁぁぁぁあああー

　悲鳴。

　助けて、助けてくれー！

　懇願。

　やだー、来るな！来るなぁああ！

　狂気。

　ガタン、ガタン、ドドドドド……

　何かが転げ落ちる音。階段から？

　沈黙。

「権田！権田！大丈夫か！」
　後藤が叫ぶ。
「ご、後藤さん！」
　鳴門刑事は呆然とする。
「むごいことをしおるわい」
　下駄の男が嘆く。

　権田は自分の部屋から飛び出し、何かに怯えるように後ろを振り返りながら、必死で逃げようとした。アパートの２階から１階へ、階段を駆け下りようとして足元をすくわれる。まるで糸の切れた操り人形のようにぐしゃりと身体を階段に投げ出し、ゴロゴロと転がり落ちる。権田の体が地表に投げ出されたとき、すでに権田の首はあらぬ方向に曲がっており、とても助かるようには見えなかった。

　激しく痙攣する体――後藤は権田に駆け寄ったが、手の施しようがない。胸から携帯電話を取

り出し、すぐさま江戸川南警察に電話をする。あとは、向こうで手配してくれるだろう。しかし――これはいったいどういうことなのか？

「おい！　鳴門！　なにいつまでもぼけっと突っ立ってる！　手当てを！　」
「ご、後藤さん、あれ、あれっていったい？」
　鳴門刑事は後藤の頭上を指差す。後藤からは状況が見えない。が、鳴門刑事の表情からなにか尋常でない事が起きているのはすぐにわかった。
「なんだ！　おい！　どうした。なにが……」
　後藤は立ち上がり、鳴門刑事が指差す方向を見上げる。
「こ、こいつは……」
　権田のアパートから大量の蝉が飛び立つ。まるで黒い塊が獲物を探して彷徨うかのように権田のアパートの上空を旋回する。数千匹、いや、数万匹か。権田の部屋から最後の一匹が飛び立ち、それが群れに合流するとなにか獲物を見つけたかのように、その黒い塊はアパートの屋根の向こう側へと――公園の方角に飛び立っていってしまった。

「おっさん！　拝み屋のおっさん！　こいつはいったい全体、どういうことなんですか！」
　後藤は下駄の男を睨みつける。下駄の男はゆっくりと後藤――いや、権田のそばにより、折れ曲がった権田の首の先にある頭を撫でた。すると権田の痙攣は止まり、恐怖に満ちた表情は一瞬和らぎ、権田は絶命した。
「因果律はときに恐ろしい勢いで――そう、歯車にかけていた一つの滑車がはまったとき、急激に動き出すことがある。そしていったん動き出した因果律は、もう、誰にもとめることはできんのじゃ」

「因果律？　なにわけわからないことを――目の前で人がひとり死んでいるんですよ！　拝み屋のおっさん！　これは、これは先のあの蝉の大群の仕業なのか？　そしてあの蝉の化物は、いったいなんの目的で？　やつは、やつは今どこに？」
　後藤がまくし立てる。下駄の男は、ごとうに諭すように放し始める。
「そう、なんでもかんでもいっぺんに聞かれたら話せることも説明できなくなるぞい。そうじゃな。まずはお主たちのやり方にしたがって順序だてて話をしよう。権田の部屋――見る必要があるじゃろう？」

「おい、鳴門！　ここを頼む。あー、その前にここまで車を回してきたほうがいいか。ともかく、目隠しが必要だ」
　鳴門刑事は、後藤からキーを預るとすぐに車をアパートの前に移動させた。これで権田の遺体は外からはみえない。後藤と下駄の男は、アパートの階段を慎重に上った。後藤は胸のポケットから手袋を取り出し、手にはめた。階段は権田の転がり落ちた後、おそらく頭を打ち付けた場所にしっかりと血痕がついている。そこをよけるように歩くのもそうだが、何よりも注意を払った

のが蝉の屍骸だ。

「こ、この屍骸に足をとられて、ヤツは階段から転がり落ちたってことですか？」
　階段の下から鳴門刑事が声をかける。
「どうやらそうらしい。鳴門、さきにおっさんと部屋の中の様子を見てくる。そこで仏を見ておいてくれ」
　鳴門刑事はなにやら不満を言おうとしたが、そうそうにあきらめた。これはもう、自分たちの領分ではない。専門家に任せるしかない。しかし、自分だって――
「わかりました。その、あとで、僕にも教えてくださいよ。なにがあったのか」

　後藤は軽く右手を上げて鳴門刑事に合図をした。アパートはそこらじゅう蝉の屍骸だらけである。開け放たれた権田の部屋まで、廊下には蝉の屍骸が散乱している。そしてそれは権田の部屋の中へと続いている。
「あ、あれだけの数の蝉が、権田の部屋に実際に入っていたってことですか？」
「最初からいたわけではあるまい。おそらく、権田が招きいれたんじゃ」
「招き入れたって？」
「おそらくは、ベランダの戸が開いているか、割れているにちがいない」
　権田の部屋を廊下から眺める。暑さによるものではない、いやな汗が後藤の頬を流れ、あごから滴れる。
「気をつけろ。まだ微量じゃが瘴気が残っておる。あまり吸い込むと身体にいい事はないからのぉ」
　それが果たして効果があるかどうかはわからないが後藤はハンカチを口に押し付けた。下駄の男は作務衣の袂から塩を取り出し、自分と後藤に振り掛ける。後藤が怪訝な顔をする。
「気休めじゃが、何もせんよりは、ましということもある」

　権田の部屋の玄関。ドアの内側は激しく傷つき、血痕らしきものが見える。まるで権田がここにしばらく軟禁され、ドアを何度も叩いたかのように見える。扉には、権田のそうした怨念がまだ残っているようだ。いや、怨念というよりは、権田自身の恐怖に怯える魂の叫びのようなものか。部屋の中は誰かに荒らされたようにめちゃくちゃになっている。もともと整理されている部屋ではなさそうだが、それにしてもまるで、人と人が争ったような後である。

「いったい、ここで何があったんです？」
　下駄の男が言っていたようにベランダのサッシは開け放たれていた。風でカーテンがゆらゆらと揺れている。しかし、そのカーテンもところどころ止め具がちぎられている。時間の経過に従い、部屋の中の空気が浄化されていくのがわかる。それだけ、この部屋の中には、何か陰鬱な思念のようなものがさっきまで漂っていたようだ。

「すべて終わったあとじゃよ。あの蝉の大群はおそらく権田の部屋を取り囲み、権田を逃がすまいとここに閉じ込めていたのだろう。そして、権田はその恐怖に耐え切れなくなり、自らの破滅を選んだんじゃ。もう少し待っておれば、ワシらが駆けつけて、最悪の事態は避けられたかもしれんが、そんなことを考えてもしかたのないことじゃ。すでに歯車は回り始めておる。もう、誰にも止められん」

「これは誰かの仕業――つまり権田を恨んだ人間が、蝉を使って権田を殺させたということですか？」
　後藤は、下駄の男を睨みつける。その迫力は鬼気迫るものがあった。たとえそれが後藤の領分ではないことであっても、誰かが誰かの命を脅かし、死に至らしめるような事がこの街で起きていると、後藤には絶対に許せなかった。たとえそれが、権田のような人間であっても。

「お主、知っておるかの？　その昔、江戸の頃にはの。親の敵討ちは法律で認められていたんじゃよ」
　後藤は、まゆをひそめ、いぶかしげに下駄の男を見つめた。
「だからといって、現代にそれをやっていいという法はありませんよ」
「そうじゃな。お主の言う通りじゃ。詰まらんことを言った。許せ」
　あまりにあっけなく下駄の男が折れたので、後藤はかえって言葉を失ってしまった。
「い、いやぁ、そりゃ、私だって、法律が全てと思っているわけではありません。現に権田は法律の網の目をかいくぐって、悪さを繰り返してきた男です。人に恨まれることはたくさんあるでしょし、もしそういう人間が、権田を後ろから一発二発殴っても、見てみぬフリはするかもしれません。しかし、その手に凶器を持っていれば、話は別です」
「復讐をしようとする人間を撃つか？」
「人は撃ちません。凶器を撃ちます。当たればですが」
「なるほど。そうじゃな。ワシも同じじゃ。呪う人間、呪われる人間。事情はそれぞれじゃ。だが、使っていい方法と悪い方法があるとワシも思う。呪術も同じよ。まぁ、人のためになる呪術というのは、そんなものはありやせん。それを使おうとするものが目の前にいれば、ワシはそれをなんとしてでも止めるじゃろうな。しかし……」

「放たれた弾丸を、打ち落とす術はない」
　後藤がボソリと言った。
　下駄の男は、後藤が背負った十字架のようなものを見た気がした。
「主も、それを知る者か……」
　二人の間に、過去の記憶が交差する。同じよな過去を持つ者として、互いを認め合うようになるには、まだ、後藤も下駄の男も、お互いを知りはしなかった。知りすぎることをためらっていた。

まだ、この時は……。

つづく

# 蝉時雨⑥～下駄の男シリーズ

蝉時雨⑥

　蝉時雨――蝉が一斉に鳴き出し、雨が地面を叩くが如く激しく鳴る様。今年は蝉が鳴かない。そう思っていた矢先に、８月のある日、今まで眠っていた蝉が、地面から追い出されるかのように一斉に地中から現れ、街中で鳴き始めた。今から７年前――記録的な冷夏であった事がわかったのは、事件があってから数日後、鳴門刑事の報告で後藤はそのことを知る。

「まぁ、つまり、特別ではあるが、理屈は通る。７年前、７月の気温が上がらなかったから、蝉が活動を始めたのが遅かったってことなんだな」
「えぇ、まぁそういうことになります。もちろん、蝉の種類によって、地中にいる期間は違うんでしょうが、まぁ、一般的な話、蝉は地中の中で木の根の汁を吸いながら育つといわれています。そして７年たって、気温や湿度がある程度の水準に達すると地中から出てきて、求愛のために鳴くのだそうです。蝉の寿命は短いもので１週間から２週間とか……まぁ、これにも諸説あるようですが」
「確かに虫かごに入れるとあっという間に死んでしまうからな。身近な昆虫ほど、実のところ生態はよくわかっていないって、そういうこともあるんだろうな」
「でも、やっぱりあれは異常です」
「あぁ、異常だ。しかし、あれもまた、人のなせる業だそうだ。あの男に言わせれば」
「あの男――下駄の男、尾上弥太郎ですか」

　そう、あの日。蝉時雨の中でひとりの男がアパートの階段から滑り落ち、命を落とした。その現場に後藤、鳴門刑事、そして下駄の男が居合わせたのである。そしてその『事故』の裏側には、更に恐ろしい事実が隠されていたのであった。後藤と下駄の男は、事故死した男――権田聡の部屋を後にし、アパートのすぐそばにある古池公園へと向かった。そこで、世にも奇妙なものを目にすることになる。

「いったい、誰の仕業なんです。これは法律では裁けないが、立派な殺人じゃないですか」
「呪いで人を殺す。昔はそれを禁じる法律があったんじゃよ。陰陽の時代――今から１２００～１３００年前の話じゃがな」
「そんな古い話をしてるんじゃないんです。今、目の前で人がひとり殺されたているんですよ」
「その犯人を許せんか？　なら、会って捕まえるか？」
「会うって、この先に犯人が……権田を呪い殺した犯人がいると？」
「おるはずじゃ。たぶん、まだ、間に合うじゃろう」
「し、しかし、我々には、その人物を捕まえて罪を償わせる法を持っていません」

「まぁ、そのことでいえば、心配はいらんというか、いや、心配だから行くのじゃが、たぶん、もう手遅れじゃ」

　後藤は下駄の男のはぐらかすような言い回しに、ほとほと困惑した。自分は冷静でいるつもりが、いつになく興奮してしまっている。いや、もっと単純にイライラしているのだ。鳴門刑事を権田の遺体に張り付かせたのも、半分はそんな自分を見せたくなかったからかもしれない。

「いや、職務の判断としては、何一つまちがっちゃいないはずだが、なんだ、この不快感は……」
「その感覚は大事じゃよ。お主は長生きでる」
「そんなふうにいわれても、全然うれしくないですがね」
「当たり前じゃ。別に褒めてなんぞおらんわい」
「喰えないジジだ」
「あん？なんか言うたか？坊主？」
「クッ……」

　クソジジと言いそうになる自分を抑えられてこをと、後藤は誰かに褒めて欲しいと思った。

「このあたりじゃ。瘴気がある。気をつけろよ」
「気をつけろって言われても……」
「そう。だからワシの言うことを聞くんじゃな。死にたくなければ」
「コッ……」

　もう、どうでもいい。一言、言ってやりたいと後藤が思ったとき、目の前にそれは突然現れた。

「アノ　オトコ……アノ　オトコハ……シ・ン・ダ・カ」
「おう！　さっき階段から転がり落ちて死におった。首の骨を折っての。惨いことをする」
「ソ、ソウカァ……シンダカ……アノ　オトコ」
「あぁ、権田聡は死んだ。じゃがたったそれだけのことぞい。それだけのことのためになんと惨いことを」

　下駄の男が話している相手――それはまるで怪物のような姿、全身に蝉の抜け殻をまとい、人の形はあるものの、それはもう人ではないようにみえた。古池公園の池のまわり、雑草や木が生い茂り、歩道から死角になる場所。ブナの木に寄りかかるようにして『それ』は立っていた。声は聞きづらいが、どうやら女のようである。良く見ると体のラインも女性のそれであり、『それ』は全裸を何か刃物のようなもので切り刻み、血がにじんでいるところに、蝉の抜け殻が爪を

立て、しっかりとしがみついた『異形の塊』となっていた。

　後藤は最初、下駄の男が死んだ権田のことを指して『惨い』と言っているのだと思ったが、すぐにそうではないことに気がついた。下駄の男はこの女を哀れんで、『惨い』と言っているのである。

「そのような外法をどこでどうやって手に入れたのかは知らん。じゃが、ワシにはわからん。己の命を懸けてまで呪い殺すことに比べれば、自らナイフで相手を刺し殺すほうが、よほど利にかなっていると思うがのぉ」

『異形の塊』はガサガサと音を立てながら、身を震わせながら叫んだ。
「そんなことでは、この恨み、晴らせるものか！」
　その声は、さっきよりもはっきりと聞いて取れるようになったが、しかし――それは女の声でもなく、また人の声でもなかった。

「鬼……」
　後藤が思わず口にした。
「おう、そうよ。鬼よ。だがわからん。お主、確か先ほど姉の恨みとか言っておったな？」
「姉？　先ほどって……」
　後藤は悟った。下駄の男は、この『異形の鬼』に会っている。それもおそらく後藤と合流する直前にだ。

「姉さん。姉さんは、あの男に殺された。そして、惨いことに、こんな場所に埋められて……」
　鬼女はすすり泣きながら、そう言った。ヒグラシが悲しげに鳴き始める。先ほどまでの憤怒に満ちた蝉の鳴き声とは明らかに違う、悲しく、せつなく、悲嘆に満ちた鳴き声……

「おっさん、こいつはいったい誰――」
　後藤は記憶の中で、その女が名乗るより一瞬は早くある人物の顔を思い出していた。
「浩子姉さん。私は、とうとうカタキを討ったわ」
「浩子……坂口浩子か！たしか、７年前、行方不明になった」
「そう、わたしは、妹の由紀子。行方不明になった浩子姉さんをずっと探していた。でもどうしても見つからなかった。そして、ある占い師に姉の居場所を探してもらったの。占い師は権田に近い人間が、姉のことを知っていると教えてくれた」
「ふん、その占い師はたぶん、あてずっぽでいったんじゃろう。しかし、あんたはそれを信じて、実際に権田に近しい人間に会い、情報を聞き出した……無茶なことをしおる」
「浩子姉さんのためなら何でもできる。あとでわかったのよ。権田が両親を脅し、捜索願を取り消させたこと。そのことを知った私は、家を飛び出して、姉の行方を探したわ。そして権田から

依頼を受けて、女の死体を処分したという男に会った。私はその男から情報を聞き出すために、その男と寝たわ。そして、その話を聞いたあと……」

「おい、まさか、その男を殺したんじゃ……」
　女は沈黙によって答えた。後藤は首を振り、下駄の男は呟いた。

「人を呪わば穴二つじゃ……お主、そのことはわかるな」
「ええ。すべて覚悟の上のことよ。これで浩子姉さんの魂も救われる。街の真ん中に地中深く埋められ、まるで蝉のように７年間も……これでやっと外に出られる。あの男の呪縛から解き放たれる。そして私も……」
「もう、語り合う時間はないか。最後に何か言い残したこと。望みはあるか」
「なにも望まない。何も望めない。それが闇の力を求めたものの宿命。でも、できることならば、姉のそばにいさせて欲しい……」

「おそらく、その願いはかなえられるじゃろう。心配せんでいい。旅立つがいい」
「た、旅立つって……」

　ヒグラシがけたたましく泣き叫ぶ、その鳴き声はやがて、別の者の騒音によってかき消される。生き物の鳴き声、それは蝉ではない――鳥、大量のムクドリがどこからともなく表れ、後藤と下駄の男がいるブナの木の周りに集まりだす。

「お、おい、おっさん。いったいなにが――」
「心配は要らんよ。天からの……いや、暗闇からの出迎えじゃ」
「出迎えって……」
「人を呪わば穴二つじゃ。人を呪えば、自分も呪われて死ぬ覚悟が必要じゃ。あの鬼は、その覚悟によって術を成功させる『外法』を使った者の悲しい姿よ」

　下駄の男がそう言うと、ブナの木に集まったムクドリが一斉に『異形の鬼』に向かって集まりだした。良く見るとムクドリは、『異形の鬼』の身体をついばみ始めた。何千というムクドリが次から次へと集まり、その中から苦悶に満ちた唸り声が聞こえてくる。それを地獄絵図といえば、まさにそうである。人を呪い、呪い殺した女の末路。闇の力を使い、己の欲するものを手に入れし者の末路である。『異形の鬼』は『異形の塊』へと姿を変えてゆく。

　後藤はなす術もなく、ただその光景を眺めていた。常人なら気を失いかねない凄惨な光景である。
「惨いのぉ。女が使った外法――蠱毒厭魅の両方を使い、強力な呪詛をかける。まさに鬼女のやりようよ」

「こどくえんみ？　なんですかそれ」
「厭魅とは、そうじゃな。代表的なものはわら人形を使った丑の刻参りよ。ようするに「ひとがた」を使って人を呪う呪術じゃ。蠱毒は蟲。器の中にカエル、ヘビ、ムカデ、クモといった虫を入れて互いに食い合わせ、最後に生き残った最も生命力の強い一匹を用いて人を呪う呪術じゃ。この女は蝉を用いて蠱毒とし、自らの身体を用いて厭魅とした」
「なぜ、蝉なんです？」
「わからんか？この地中深く、姉の屍骸が埋まっているとすればそれは……」
「あぁ、蝉の幼虫は、坂口浩子とともに、７年間地中で生きていたということですか！坂口浩子の無念とともに……」

　数分後、そこには大量の鳥の羽と、蝉の抜け殻、そして女の髪の毛だけが残された。
「き、消えた。こんなことって……」
　後藤は唖然としてブナの木を眺めた。ムクドリはなにもなかったかのように笠井町の空に飛び立ち、もう姿は見えない。下駄の男はその髪を拾い、何やら右手で印をきり、呪文のようなものを唱えた。
「あれはすでに、この世のものではなかったんじゃ。だから消えたのではなく、そうじゃな。強いて言えばもとに戻ったということじゃ」
「つ、つまり、妹の坂口由紀子も、すでにこの世にいない。死んでいると」
　下駄の男は沈黙によって後藤に答えた。

「さて、ここからは、お主の仕事じゃ。ここに坂口浩子の遺体が埋まっていることは確かじゃが、ここを掘るには理由がいるじゃろう。この髪の毛を使うんじゃな。公園の土がついた髪の毛が、権田の部屋から出てくる。そして、公園を調べてみると、何やら不自然な場所を発見し、そこを調べたところ……というシナリオでどうじゃ」

「あ、あぁ。ちょ、ちょっと待ってください。そんな簡単には……」
　下駄の男は作務衣の袂からビニール袋を取り出し、女の髪を入れて後藤に手渡した。
「まぁ、お主の好きにするがいい。ここから先はお主の領分じゃ。ワシはここにいなかった。そういうことだけ、きちんとしておいてくれれば、後は任せる」
「それはともかく、私には今ひとつわかりません。こんなことが、この街でおきるなんて。誰でも人を呪い殺す事ができるだなんて、そんなことがあるんですか？」

「ない」
　下駄の男の表情は険しくなり、後藤は空気が張り詰めるのを感じた。下駄の男は怒っている。
「じゃぁ、いったいどうして」
　それでも後藤は下駄の男に食い下がった。
「ない。説明できることなど、ひとつもない。じゃが、よかろう。お主を納得させられるかどう

かわからんが、わしの考えを教えてやる。それをどう考え、どう思うのかは、お主の次第じゃ。自分で結論を出すんじゃな」

つづく

# 蝉時雨⑦～下駄の男シリーズ

蝉時雨⑦

　古池公園にある池から、権田のアパートまだは歩いて５分。あたりは夏の風景を取り戻し、けたたましくも、そこにあるべき姿で蝉の鳴き声がする。生暖かい夕方の夏の風は、先ほどまで漂っていた瘴気を一掃し、少しだけ息苦しさが解消された気がする。街の雑踏の中にパトカーや救急車のサイレンの音が聞こえる。後藤はすぐに現場に――権田の遺体がある場所に戻らなくてはならず、下駄の男は現場から離れなければならない。
　下駄の男――拝み屋　尾上弥太郎は、そんな状況を図ったかのように少しばかり、早足で権田のアパートへ向かう最短ルートではなく、その反対側の出入り口に向かいながら話を始めた。

「普通であれば、そう。せいぜいが、蝉が数日大合唱をする程度のものよ。権田もおそらく知らないことだったのじゃろうが、坂口浩子の遺体が、まさかあんなそばにあるとはな。離れた場所では、蝉を遠くへ飛ばすことも、強い怨念を含ませることも出来まい。そして、その蝉じゃ。こどく＝蠱の毒と書いて蠱毒というのじゃが、普通毒虫、サソリやムカデ、トカゲやヘビを使うのがスタンダードじゃが、それほど長い期間呪詛をかけることは出来ん。蝉には攻撃力は無いが、７年近い年月を重ねることで、毒虫に匹敵する力を得たのじゃろうが、まぁ、尋常ではないわい」

「尋常ではない……。私にとっては呪いとかそういうものが、すでに尋常じゃないんですがね」
　後藤は胸のポケットからタバコを取り出し、口にくわえる。ライターを探そうとして、車に置きっぱなしだったことに気づ、鳴門刑事に電話をする。
「あ、そっちはどうだ。そろそろ応援が駆けつけていると思うんだが……あぁ、そうか、あぁ、頼む、俺もすぐにそちらに向かう。あー、あとすまないんだが、車の中にライターを置き忘れたらしい。この暑さだ。爆発でもされたら洒落にならない。あぁ、頼む。５分で戻る」

　後藤が電話を切ると、下駄の男が話し出した。
「結論から言えば、いろんな偶然が重なって、おきるはずも無い、或いはここまで大事にならないようなことが、人間一人を呪い殺すという結果になったわけじゃが……」
　下駄の男は、歩くのを止めて空を眺める。
「あの姉妹の――坂口姉妹の怨念の深さが、すべてを突き動かしたのじゃろう。そうでなければ、今回の件、ワシらが知った時点で、最悪の結果を回避できたかもしれんじゃろう？　だが、そうはならなかった。愛の深さゆえに恨みが大きくなり、時間の経過がそれを助長する。そして、この場所、このときじゃ。すべてがひとつの結果の因となっておる」

「なんですか？　この場所、この時とは、つまり笠井町に問題があると？」
「そうじゃ。いや、もっと大きな規模での話しなのじゃが、ワシが今この場所におる理由もそこにある。この地でやらねばならぬこと。その影響が、小さな事象ですむはずのことを大きくしておる。人に暗部がある以上、恨み、妬み、嫉み――そういうった感情が、誰かを傷つけることなどあたりまえに存在するんじゃよ。じゃが、少しばかり懲らしめるつもりが、相手を殺してしまう。そしてそれが負の連鎖、復習と報復。そんなことになってしまえば、世は乱れ、混乱し、すべては闇に閉ざされる。人の心のバランスは、案外ともろく、崩れやすいんじゃ」

　後藤には、下駄の男が言っている意味が良くわからなかった。言っていることはわかる。しかし、なぜこの笠井町なのか、なぜ今なのか。その答えを導き出せるような鍵を下駄の男の言葉から、見つけることは出来なかった。

「わかりません」
「わからぬか。そりゃそうじゃ。わからないように、わかりやすく説明しておるんじゃからのぉ」
「だから、それがわからないって、言ってるんですよ！」
　後藤が声を荒げる。下駄の男は、それを面白がり、そしてまた、歩き始める。

　カラン、コロン、カラン、コロン

「後藤よ！呪詛とは、人のなせる業よ。それは今も昔もそれは変わらん。人の営みは、どんなに便利な世の中になろうとも、どんなに医学が発達し、生命のなぞが解明できたとしても、何一つかわらん。闇を求める心があれば、光を求める心もある。それが人というものよ」
「呪いなんてものは、はるか昔の作り話かと思ってました。違うというんですか？」
「ちがうな。これだけははっきり言っておく。ワシとお主のやっていることはたいして変わりはしない」
「わ、私はそんな、そんなおどろおどろしい商売をやっているつもりはないんですがね」
「たわけが！　ならばなぜ暴力団はなくならん。答えは簡単ぞい！その力を望むもの、その力に頼るものがおるからであろう！　呪詛も同じじゃ。あの姉妹は呪詛に頼む選択肢しか、なかったのじゃ。権田のような人間がいなくならないのは、権田のような人間を頼る誰かがいるからであろうに」

　後藤は言葉がなかった。そう、どんなに法律が整備されようとも、救われない人はいる。そして、そういう人が、まあ、闇の力をたより、闇の世界に落ちていくさまを後藤はいやというほど見てきた。そう、その力を欲するものがいる限り、闇の力はなくならない。闇に生きるも者は、闇の力を頼る者によって生かされている。

「お主を突き動かすものはなんぞ。正義か？　秩序か？」
「ちがいます」
「そうか、ワシも同じじゃ。ワシは闇の力を知る人間として――そうプロとしてそのような力が、あちこちで乱用されることをよしとは思わん。ワシがこうして、事件に頭を突っ込むのはそれがゆえよ。お主もまたそうであるのなら、己の信じる道を見失わんよう心がけることじゃ。人は簡単に闇に落ちる。闇を知れば知るほど、その誘惑は強烈ぞい」

　後藤はある疑問があることを思い出した。このことだけは聞かなければと先を行く下駄の男の前に出てる。下駄の男の前に立ちはだかるかたちになった。２人は正面から向かい合う。後藤が口を開く。

「その誘惑ですが、坂口由紀子がやったあれ、なっていいましたっけ――」
「厭魅《えんみ》あり、奇《く》しき厄《わざわい》、生み出《いづ》る。厭《いとわ》しい、もののけと書き表す。人型を使った呪術よ」
「そのえんみ　とかいうものは、誰でも調べればできることなんですか？あるいは、そんなことを教えるような輩がいると……」
　下駄の男の表情がいっそう険しいものになる。
「おそらくは、悪意を持ってこの外法を坂口由紀子に教えたものがおる。ワシはそうにらんでおる」
「ちょっと待ってください。もしかしたら、権田はその何者かに――」
「それはわからん。わからんが可能性はある。ある以上、探さねばならん。無視はできん」

「どうも、これは、ただの事件、ただの呪いではないですね。裏にもっと深い事情があるように思えます」
「お主に声をかけたのもそのあたりじゃ。権田という男。この前の事件に何らかのかかわりを持つ。いや、事件ではなく、あの関係者。それもおそらくは表立っては見えてこない人物」

　公園の出口で２人の男が険しい顔をして話している。そこへ４～５人のこどもたちが自転車で現れる。これから公園で遊ぼうというのだろう。日中は日差しが強すぎて、人影はほとんどない。子供たちは虫かごと虫取り網を持っている。蝉を採りにきたのだろう。
「今回も、いろいろと世話になりました。たぶん事件としては事故で処理し、その上で公園の遺体については調べが進むでしょう。それであの姉妹の魂が浮かばれるとは思いませんが、せめてもの供養です」

「ワシは坂口由紀子のなきがらを探そうと思う。少しばかり、心当たりがあるのでな。それがわかったら、また何かしらの手段で連絡を取るから、そのときは２人の魂を弔ってやろう」
「心当たりって……そんなことわかるんですか？」

「ムクドリの跡を追えば、おそらくはなんらかの手がかりがあるじゃろう」

　一瞬の沈黙の後、下駄の男は後藤の横をすり抜け、後藤もそのまま前に進んだ。

　カラン、コロン、カラン、コロン

　笠井町の雑踏の中、どこからともなく下駄の音が聞こえてくる。そして夕暮れとともに闇に消えていった。街のあちらこちらで蝉が鳴く。時に激しく。時に弱々しく。

　シクシクと鳴く

　ツクツクと鳴く

　ジージーと鳴く

　ギーギーと鳴く

　だが、その鳴き声にずっと耳を傾けていると、時々蝉とは違う別の何かの鳴き声が聞こえたような気がする。その声は風に吹かれ、塵にまみれ、街の中へと溶け込んで行く。

「事故としか、書きようないですよね。でも、その公園の遺体についてはどうします？」
「あとは鑑識に任せるしかないさ。部屋の中に公園の土と、女の髪の毛。ガイシャの不可解な事故死。日本の警察は馬鹿じゃない。多少時間はかかっても、すぐに答えにたどり着くだろう」
「答え……ですか。でも、それだけでは真実は――」
「鳴門！真実なんてものは、俺たちの領分じゃない。そうだろう？それに俺たちだって――」
「下駄の男が現れなければ、何も知ることはなかった。存在しないものからの情報は、ないということと同じ……ですか」
「そういうことだ。俺たちは俺たちの方法で知りえたことでしか仕事をしない。ほかの力を用いて得た証拠など、そもそもがあってはならないし、それがなければ事件を解決できないなど……」
「あの下駄の男に笑われますかね」
「ふん！　報告書とっととまとめておけよ。俺は用事がある」
「ちょ、ちょっとまた、抜け駆けですか！」
「ちがうよ。子供と約束があるんだ。花火をする」
「あー。あの子、今、何歳でしたっけ」

「小学校３年だ。歳は……いくつだっけ？」
「小学３年なら、８歳か９歳でしょう。誕生日はいつでしたっけ？」
　後藤は沈黙で答えた。
「後藤さん。そういうことって、結構大事なんですよ。純子さんだってーー」
　後藤は沈黙を守った。
「あぁ、すいません。余計なことでした」

　沈黙は静寂を呼ばない。蝉の鳴き声がどこからともなく聞こえてくる。後藤はラジオをつける。ラジオからは天気予報が流れてきた。
「今日の最高気温、東京は３８度を記録しましたが、明日は昼間は晴れですが、夕方ごろには北から冷たい空気が流れ込み、大荒れの天気になるでしょう。気温も夜には２５度を下回ると見られ……」

「涼しくなるのはいいですが、傘がいりますね。明日は」
「ふん。もうあんな事件はごめんだ」
「そうですね。それに蝉も気温が下がったら、長くは生きられないかもしれません」
「そうか。まったく。おかしなことが次から次へと起きるものだ」
「で、どうなんです？その下駄の男がこの街ーー笠井町にいる本当の目的ってやつは？」
「それがなーー闇の塔とか言ってたんだが、何のことだと思う？」
「闇の塔。塔といえば、ほら、あれ」
　鳴門刑事は荒川越しに、車の中から指差した。
「東京スカイツリーですかね。世界最大の電波塔です」
「東京スカイツリーがなんで闇の塔なんだ？」
「さぁ、そんなことときかれても。ただ、荒川の土手からは本当に良く見えるんですよ。あの塔」
「ふーん。東京スカイツリーねぇ」

　荒川の土手、一人の男が、一匹の猫になにやらえさを与えている。コンビニの袋には猫用の缶詰とさきイカが入っている。
「団十郎、ほうびじゃ、。よく教えてくれたのぉ。賢い猫じゃ」

　ニャーォ

　遠目にはただの野良猫にしか見えないが、正面からみるとその猫の異常さに気づく。全身は黒い毛で覆われているのに顔は右半分と左半分が白い毛と黒い毛に真っ二つに分かれている。一見して不気味である。

　男はコンビニの袋の中からさきイカを取り出し口にする。団十郎がそれをねだる。

「なんじゃ。猫用の缶詰は気に入らんか。結構いい値段したんじゃがな」
　そういって、男はさきイカをちぎって渡した。
「あまり食いすぎると、腰を抜かすいぞい」
　団十郎はさきイカを加えると、茂みの中へ消えていった。
「さてと、いくとするかのぉ」

　カラン、コロン、カラン、コロン

　荒川の土手。暗闇の中に下駄の音が響く。荒川の向こう岸、江東区の方角を望めば、そこには闇の塔ーー東京スカイツリーが禍々しくそびえ経つ。そして時を同じくして、闇の塔を見つめるもう一人の男の影。その人物と下駄の男が互いを知るには、まだ、少しばかりの時間を要した。

蝉時雨ーーおわり

下駄の男シリーズーー次の奇伝へとつづく

# 短編集『週末、公園のベンチにて』

http://p.booklog.jp/book/28376

著者：めけめけ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/mequemeque/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/28376

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/28376

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ